

令和7年度

第40号

教育実践研究論文集

公益財団法人 日本教育公務員弘済会千葉支部



「教育実践研究論文集」第40号の発刊に寄せて

公益財団法人 日本教育公務員弘済会千葉支部

支部長 榎 原 正 策

教職員の皆様には、日頃より公益財団法人日本教育公務員弘済会千葉支部(千葉教弘)の諸事業に深いご理解とご支援をいただいておりますことに、心より感謝申し上げます。

また、多くの皆様に日教弘の趣旨にご賛同いただき「教弘保険」にご加入いただくことで教育振興事業をはじめとする当支部の諸事業が実施できておりますことに、重ねて御礼を申し上げます。

さて、当支部の「教育実践研究論文」募集事業は1976年(昭和51年)度にスタートし、本年度で49回目を迎えました。

この「教育実践研究論文」は、当支部の教育振興事業の大事な柱の一つであり、その目的は、児童生徒の教育、人としての成長に寄り添い、努力と研鑽に努める教職員の教育実践と研究意欲を奨励することにあります。そして、その実践の中で、子どもたちが「できた」「わかった」という喜びを実感し、成長していく姿こそ、「最終受益者は子どもたち」という私たち日教弘・千葉教弘の理念の具現化につながるものと確信しております。

ぜひ、この教育実践研究論文をたくさんの教育関係者の皆様にお読みいただき、一人でも多くの方が日々の実践等にその知見を活用していただけたら幸いと考えております。

今年度は、小学校・中学校・高等学校・特別支援学校から、学校部門14本、個人・グループ部門34校、合計48本の応募をいただきました。

お寄せいただいた論文の内容は、全職員の共通理解に基づいた学校全体での取組もあれば、教科指導に特化した実践研究、地域と連携し地域の教育資源を活用する取組、単発ではなく長年にわたって積み重ねブラッシュアップさせてきた取組などもあり、どれも皆大変読みごたえのあるものでした。いずれも、自校の児童生徒の発達段階や実態に即して、よりよく成長する姿を追い求めた教育実践が報告されました。教弘の教育実践研究論文は、子どもたちや学校、地域の実態に即し、求める児童生徒・学校・教職員の姿に迫ろうとする実践の中から生まれた知見であることに大きな価値があると考えております。

今回も厳正な審査の結果、別掲の通り各賞が決定しました。入賞された皆様には、心よりお祝いを申し上げます。また、今回入賞されなかった皆様におかれましても、引き続き研究を深められ、その成果を日々の実践に活かしていただきたいと思います。

未来を生き抜く子どもたちをよりよく育むことは、教育に関わる者すべての使命だと考えます。県内の教職員の皆様が、本冊子に掲載された実践研究の成果を日々の教育に役立てていただければ、この事業は大きな成果を上げることになり、これに勝る喜びはありません。

千葉教弘は、「最終受益者は子どもたち」という日教弘の理念のもと、児童生徒の学びに資する環境づくりや学校教育の支援など、教育振興事業の充実に尽力してまいります。今後も、多くの教職員の皆様に「教弘会員」になっていただき、引き続きご支援を賜りますようお願い申し上げます。

末筆ながら、この間、審査委員長としてご指導をいただいた千葉県総合教育センター所長 酒井誠様をはじめ各審査委員の先生方、さらには論文をお寄せいただいたすべての方に感謝を申し上げまして、巻頭の挨拶とさせていただきます。



子どもたち一人一人の夢と可能性を支え、 持続可能な社会の実現を目指して

審査委員長 千葉県総合教育センター
所長 酒 井 誠 一

令和7年4月より「第4期千葉県教育振興基本計画」がスタートし、「人生をしなやかに切り拓き、千葉の未来を創る『人』の育成」を基本理念として掲げています。この理念は、変化の激しい時代を生きる子どもたちが、自らの人生を主体的にデザインし、多様な価値観を持つ他者と協働しながらよりよい社会を創り出していく力を育むことを目指しています。特に、子どもたちが課題を発見し、粘り強く考え、それを解決する力を身に付けることが重要視されています。また、個々の違いを尊重しつつ協働することを通して、多様性を認め合う態度や持続可能な社会の構築に向けた基礎力を養うことも含まれています。このような教育の方向性は、学校教育だけでなく、地域社会や家庭と連携して実現されるべきものであり、まさに千葉県の未来を創る教育の土台を形成するものです。これらのことから、本教育実践研究論文は千葉県の教育の羅針盤となる取組であるといえます。

本年度は、学校部門に14点、個人・グループ部門に34点、合計48点の応募がありました。今回寄せられた教育実践研究論文の数々からは、そうした理念を現場で具現化しようとする先生方の真摯な取組と創意工夫が随所に感じられました。子ども一人一人の学びの意欲を引き出し、自ら課題を見つけ、仲間と共に考え、主体的に行動する姿を生み出そうとする実践は、「自らの人生を舵取りする力」を育む教育そのものです。また、探究的・協働的な学びを中核に据え、地域社会や保護者、専門機関との連携を図りながら、学びを社会につなげていく取組も多く見られました。これらは、学校教育が社会と協働し、子どもたちを「持続可能な社会の創り手」へと育てていく具体的な実践として、高く評価されます。さらに注目すべきは、学校の中に「自治的・民主的な学びの文化」を根づかせようとする努力です。授業や行事、生徒会活動など、あらゆる教育活動を通して、子どもたちが互いの意見を尊重し、違いを認め、対話を重ねながら合意を形成していく過程を大切にする実践が多く報告されました。こうした営みは、単なる活動の一場面にとどまらず、子どもたちが将来社会に出たときに、他者と協働し、課題を創造的に解決していく基礎となるものです。まさに、自治的・民主的な社会の担い手を育てる教育の姿がここに 있습니다。

一方で、このような実践をより持続的かつ発展的に展開していくためには、学校全体での共通理解と連携体制の強化が欠かせません。個々の教員の熱意ある実践を学習指導や学習評価の在り方と一体化させていく学校全体のカリキュラム・マネジメントを位置付けていくことが、今後の課題といえるでしょう。また、ICTやデータ活用など、新たな教育資源を柔軟に取り入れながら、子どもたちの学びをより多面的・持続的に支えていく工夫も求められます。

本教育実践研究論文は、千葉の教育現場が今まさに新たなステージへと進化していることを示す貴重な記録であり、子どもたちの確かな成長と、教職員のたゆまぬ研鑽の軌跡が刻まれています。未来を担う子どもたちが、変化の激しいこの時代をしなやかに生き抜き、よりよい社会を共に創り出していくために、これからも学校・家庭・地域が一体となって学びの充実を図っていくこと、また学び続ける教員がさらに増えていくことを強く期待します。

最後になりましたが、長年にわたり教育実践研究論文の募集と発表を続けてこられた、公益財団法人日本教育公務員弘済会千葉支部の皆様、そして、先生方の熱意と努力に心から敬意を表し、今後も千葉県の教育が、子どもたち一人一人の夢と可能性を支え、持続可能な社会の実現に貢献していくことを心から願ひまして、講評といたします。

審 査 委 員

審査部門

審査委員長	千葉県総合教育センター	所長	酒 井 誠 一	学校部門
審 査 委 員	千葉県総合教育センター	カリキュラム開発部部長	佐々木 浩 幸	個人部門
審 査 委 員	千葉県高等学校長協会	会長	高 梨 祐 介	個人部門
審 査 委 員	千葉県特別支援学校長会	会長	杉 村 哲	個人部門
審 査 委 員	千葉県小学校長会	会長	宮 崎 晶 子	学校部門
審 査 委 員	千葉県中学校長会	会長	神 子 純 一	学校部門
審 査 委 員	一般財団法人千葉県教育会館維持財団	専務理事	渡 邊 均	個人部門
審 査 委 員	株式会社千葉教弘	代表取締役	石 橋 優	学校部門

(敬称略)



— 目 次 —

あいさつ	1
公益財団法人 日本教育公務員弘済会千葉支部 支部長 榊原 正策 審査委員長 千葉県総合教育センター 所長 酒井 誠一	
審査委員	3
《最優秀賞》	
学校部門	
一人一人のかけがえのない命を守る安全で安心な学校づくり ～地域と共に歩む防災安全教育の取組～ 千葉県立長生特別支援学校 校長 杉村 哲	7
個人・グループ部門	
共生社会の形成に向けた校内資源としての「通級による指導」の活用 ～中学校LD等通級指導教室による 「通常学級にある潜在的ニーズ」に対するプッシュ型支援～ 千葉市立高浜中学校 教諭 三浦 怜史	12
《優秀賞》	
学校部門	
科学的な資質・能力の育成を目指すホールスクールプロジェクト ～スーパーサイエンスエレメンタリースクールをめざして～ 千葉市立緑町小学校 校長 三橋 勉	17
一人一人の「読む力」「考える力」を高める国語科指導 ～学習計画、言語活動、音読指導の工夫を通して～ 神崎町立米沢小学校 校長 飯島 純子	22
個人・グループ部門	
定時制高校から提案する「総合的な探究の時間」のあり方 ～「健康まちづくりプロジェクト」の実践をたよりに～ 千葉県立佐倉南高等学校 教諭 伊藤 晃一	27
自らの学びを自己決定する学習者の育成 ～主幹教諭の視点からの学校組織運営～ 流山市立小山小学校 主幹教諭 武藤 光亮	32

《優良賞》

学校部門

新たなシンフォニーを奏でる近未来の教室

～国際社会で生きるために、多様な文化・価値観をもつ人々と共生できる児童の育成～

千葉市立高浜第一小学校 校長 三浦 昌宏 …… 37

誰もが安心して通える学校づくり

～校内組織すべてで取り組む支援体制とKHS会議、OKルームをいかした実践を通して～

柏市立田中北小学校 校長 中谷 光男 …… 42

地域と共に生きる学校づくりを目指して

～児童の地域に対する愛着形成を促す地域素材の活用の工夫～

千葉市立検見川小学校 校長 石田 信之 …… 47

個人・グループ部門

生成 AI は中学校の日常をどう変えるか？

～ Gemini API とプロンプトエンジニアリングによる教員業務の再構築と生徒の学びへの影響～

習志野市立第一中学校 教諭 濱 優貴 …… 52

学習意欲を高め「伝える力」を伸ばす指導と評価

～ルーブリックの提示と振り返りを通して～

流山市立東小学校 教諭 平田 彰 …… 57

定時制の課程の実態に則した「総合的な探究の時間」の取組

～プレゼンテーションをととして生徒の「生きる力」を育む～

千葉県立木更津東高等学校定時制 教諭 戸張 誠也 …… 62

《奨励賞》

学校部門

『ジャンボ！菅野っ子』の育成に向けて

～変化の激しい 21 世紀をたくましく生き抜いていく子どもたちを目指して～

市川市立菅野小学校 校長 松永 裕思 …… 67

友達と共にスポーツの楽しさを味わうことのできる児童の育成

～子どもたちと共に思考力・判断力・表現力を育む授業づくり～

野田市立岩木小学校 校長 角田 敏雄 …… 72

児童が自ら計画して進んで学ぶ力を育む取組

～単元内自由進度学習を通して～

千葉市立大木戸小学校 校長 浅田 康成 …… 77

ふるさとに誇りと愛着をもち、生き生きと挑戦できる児童の育成
～命の授業とキョントンメン作りの実践を通して～

勝浦市立総野小学校 校長 矢代 庸一 …… 82

個人・グループ部門

若手教師の授業研究力の向上を目指した中堅教師の支援
～伴走者としての働き～

松戸市立松ヶ丘小学校 教諭 村岡 大地 …… 87

個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を実現する授業の一考察
～自由進度学習と一斉授業形態による問題解決学習を組み合わせた授業デザイン～

袖ヶ浦市立長浦小学校 教諭 高橋 朋彦 …… 92

子どもたちが行きたくなるような学級・学校についての一考察
～児童一人一人の良さを生かし合う学級経営を通して～

野田市立清水台小学校 教諭 鎌田 啓嗣 …… 97

魅力がたくさん！各教科等を合わせた指導の実践！
～児童が夢中になれる、活躍できる生活単元学習の授業を目指して～

千葉県立楨の実特別支援学校 教諭 黒川 裕司 …… 102

《佳作》 …… 107

最 優 秀 賞

一人一人のかけがえのない命を守る安全で安心な学校づくり

～地域と共に歩む防災安全教育の取組～

千葉県立長生特別支援学校
校長 杉 村 哲

I はじめに

知的障害と肢体不自由の2つの障害種を教育部門とする本校は、昭和48年に千葉県立茂原高等学校旧校舎を仮校舎に「千葉県立桜が丘養護学校茂原分校」として誕生した。昭和52年に「千葉県立長生養護学校」として開校すると、昭和53年に現在地一宮町の校舎に移転した。平成27年に大網白里特別支援学校と分離し、現在の学区は、知的障害教育が一宮町、睦沢町、長柄町、長南町、長生村の長生地区内5町村であり、肢体不自由教育では長生地区内5町村に勝浦市、いすみ市、大多喜町、御宿町の夷隅地区内4市町が加わる9市町村である。

II 主題設定の理由

1 立地環境より

本校が立地する一宮町は、海と山に囲まれた自然豊かな地で、特に海は学校から約400mの距離であり、生活単元学習や特別活動の活動場所として大いに活用されてきた。しかし、この立地環境は、津波のリスクを併せ持ち、延宝5年の津波では、地域で約150人の死者を出したという史実が残されている。

(延宝の津波供養塔／一宮町指定史跡)

2 東日本大震災より

平成23年3月11日に発生した巨大地震と津波によって引き起こされた大規模な災害に、日本中が震撼した。一宮町にも小規模ながら津波が到達した。本校への被害はなかったものの、これまでの床面8.6mの2階への津波避難マニュアルの再考に迫られた。

III 目的

1 災害の危機に備えて、児童生徒と教師が、より実践的な知識と対応力を身に付けるための防災安全教育を実践し、その実効性を検証する。

2 保護者や地域との連携による安全で安心な学校づくりと、その効果を検証する。

IV 内容

1 実践的な知識と対応力を身に付けるための取組

(1) 命の大切さを考える防災教育公開事業の効果

平成24・25年度の本事業において、本校の立地環境を踏まえた新たな避難計画として、近隣の高層施設(船橋市立一宮少年自然の家/以下「自然の家」)、とスクールバス等を利用した高台地(一宮カントリー倶楽部)への避難計画を策定した。日常的な避難行動力の育成を目指した学習では、緊急地震速報音を利用したミニ(一次避難)訓練を毎月実施した。危険から身を守る動作や行動の育成を目指した学習では、幼児向け防災教育用カードゲームの活用、起震車体験、煙体験ハウス、通学路の安全確認、防災グッズの作成などを行った。道徳教育推進とも連携して「命の大切さを考える道徳教育」にも取り組んだ。防災意識高揚のために、防災写真パネル、非常食・炊き出し体験、災害対応カードゲーム教材活用などに取り組んだ。危機管理に基づく環境整備として、気象庁緊急地震速報受信装置、発電機、防災リュックの導入を図るとともに、校舎内外の安全点検の徹底を図った。そして、校内外との連携として、PTA、一宮町、管内の消防・警察との連携強化を図った。災害時の連絡手段としてマチコミメールを導入し、訓練時にも配信した。本事業の取組は、「平成24年度ぼうさい甲子園」において「津波ぼうさい賞」を受賞するとともに、本校の防災安全計画と防災安全教育の基本となった。児童生徒の実態に応じた車椅子避難の安全・効率化、基本行動のパターン化による避難訓練の取組、防災リュックの活用、学習内容は、現在に受け継がれている。

現在の避難訓練は、詳細な計画で行うシナリオ型の訓練と必要最小限の計画で行うブラインド型の訓練を、それぞれミニ訓練と通常訓練の形式で、段階的に取り組んでいる。小学部児童が、教室巡回中の防災安全主任に対して、机の下で身を守る一次避難の動作を進んで披露するなど、防災意識と実践力は確実に高まっている。また、給食時に震度4の地震が発生した際には、

食堂にいた児童生徒は、冷静かつ機敏にテーブルの下で身を守る行動がとれていた。教師の指示よりも早く行動し、友達の避難を誘導する生徒もいた。

現在の防災安全教育は、各学部において年間指導計画に組み込み、生活単元学習、総合的な学習(探究)の時間の授業などで取り組んでいる。

小学部では、年度初めに「学校探検をしよう」で、新年度の教室配置の確認を行うとともに、校舎内の非常口や消火器、消火栓の位置、その役割などについての学習に取り組んでいる。



図1 学校探検

中学部では、総合的な学習の時間で、「防災安全」をテーマに、学校や自宅周辺の防災マップの作成や災害の種類と特色の調べ学習などに取り組んでいる。実際に管内消防署を見学し、消防署の施設設備、消防士の仕事などについても学んでいる。



図2 災害の種類と対策



図3 消防署見学

高等部では、総合的な探究の時間で、新たな校外避難場所の開拓、修学旅行先の避難方法についての調べ学習などを行っている。また、避難経路の安全確保のための除草活動に取り組んでいる。



図4 避難所の開拓



図5 修学旅行事前学習

(2)「ラップ♪防災」による防災安全教育

知的障害の児童生徒が、防災安全について学ぶ上で大切なことは、恐怖を与えて萎縮させることなく、楽しく(分かりやすく意図的に)学べることでありと捉えている。そのための新たな試みが行われた。きっかけは、小学部4年児童(以下「Aさん」)の防災安全

に対する思いだった。ある日、Aさんが中学部の総合的な学習の時間の掲示物を熱心に見つめていた。災害の種類をまとめた掲示物であった。たまたまその場を通りかかった当時の教頭が尋ねると、地震や津波などの災害が恐いので、どうしたらよいか知りたいとのことであった。そのことを聞いた担任は、早速、工夫を凝らした。音楽が好きでリズム感のある児童の実態に合わせて、リズムに乗って防災安全に関する知識を学ぶことにした。初めは身近な事象から取り組んだ。「地震が起きたら?」「身を守る」「津波が起きたら?」「すぐ避難/海から離れて高いところ」などの掛け合いをリズムカルに行った。同級生の児童も熱心に取り組んだ。単調なリズムに合わせたキーワードの反復は分かりやすく、二人の児童は楽しく学んだ。

「地震と津波は怖いけど、どうしたらよいか分かり、少し安心した」は、Aさんの感想である。

「防災安全教育の啓発のために役立ててほしい」という保護者からの理解も得て、動画配信サイトに本校のチャンネルを開設して、二人の学習活動を投稿した。

平成30年度、「ラップ♪防災」の誕生である。

反響は大きく、二人の動画は、他の学級の授業で活用されるようになった。そして、「ラップ♪防災」は、全校児童生徒と保護者からの賛同を得て、「みんなのラップ♪防災」に発展した。その後、避難訓練の振り返り、小学部の学校探検、中学部の防災安全学習、高等部の自力通学生による不審者対策、スクールバスの安全利用、夏季休業中の交通・生活安全、食育、熱中症など、防災安全だけでなく、学校安全に関わる全ての題材による取組に発展していった。

「ラップ♪防災」を核とした新たな防災安全教育の取組は、「平成30年度ぼうさい甲子園」で再び「津波ぼうさい賞」を受賞した。そして、各学部の学習や避難訓練の様子記録は、映像教材として大いに活用されるようになった。特に、避難訓練の映像は、見直しをもって訓練に臨むために役立っている。



図6 長生特別支援学校チャンネル

(3) スクールバス等による高台地への避難訓練

東日本大震災後、連日のように津波による被害映像と「いち早く海から離れて、できるだけ高い所へ避難」という心得が繰り返され報道された。本校の避難方法は、近隣の高層施設への避難よりも、スクールバス等を利用した海から離れた高台地への避難に重きが置かれた。そして、全校児童生徒がスクールバスと職員の自家用車に分乗しての避難訓練が重ねられた。



図7 スクールバスによる高台地への避難訓練



図8 職員自家用への分乗訓練

しかし、職員の自家用車に児童生徒を分乗させての訓練は不完全のままであった。実際に公道を走行することはせず、職員の自家用車に乗るまでの訓練とした。よって、職員の自家用車に児童生徒を分乗させての高台地までの避難訓練の検証はできていない。何よりも、筋緊張の強い肢体重複障害の児童生徒を職員の普通車両で搬送することの安全保証が大きな課題であった。また、この計画は避難先の高台地へのルートが平時の訓練では渋滞も道路の損壊や倒壊物もなくスムーズに移動できていても、災害時には果たして無事に目的地に到達できるのかという懸念も内包していた。このように、本計画は、大きな課題を抱えていたが、「いち早く海から離れて、できるだけ高い所へ避難」という各種メディアの報道に強く背中を押され、とにかく今できることに精一杯取り組んだ。そのため、避難訓練への姿勢は、教職員はもとより、児童生徒もより真剣になり、避難時の行動手順を確実に身に付けていった。

(4) 屋上への避難訓練

東日本大震災の教訓を受け、屋上避難のための非常用外階段と屋上に転落防止フェンスが設置され、平成26年8月に屋上の利用が可能となった。以降、屋上への避難も選択肢に加え、屋上への避難訓練を重ねていった。車椅子利用者から、姿勢によって空しか見えずに不安になるといった課題が挙がった。これを機に、

車椅子利用者の避難支援方法が再検討され、車椅子利用者も支援者も、安全で安心して階段を移動するための研修を重ねた。そして、全ての児童生徒の実態を踏まえた個別の屋上避難支援計画を作成して、職員間で共有した。



図9 屋上への避難訓練

(5) 防災安全研究グループによる教材開発

令和6年度の校内研究は、「肢体不自由教育」「情操教育」「防災安全教育」「地域連携」の4グループで取り組んだ。「防災安全教育」グループは、分かりやすい避難心得の掲示物製作と、主体的に考えた避難行動力の育成を目的とした教材開発とその活用に取り組んだ。

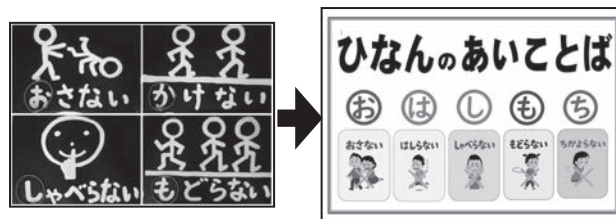


図10 避難心得のリニューアル(旧:左/新:右)



図11 防災クイズ教材

避難心得は、図10のように改めた。従来のデフォルメされた棒人間の絵から動作が分かりやすいイラストに変え、最近では言い慣れない「かけない」という言葉から、児童生徒にとって馴染みのある「はしらない」に変えた。また、火災時に大切な「ちかよらない」を加え、常に意識できるように、校内各所の目に付く場所に掲示した。避難訓練のたびに新しい避難心得について言及し、評価の観点に挙げると、児童生徒の方から避難の合言葉を口にするようになった。

また、地震発生時の居場所に応じた行動を考えるた

めの教材として、図 11 のような 3 パターンの動作を示した掲示物を作成した。特別教室、階段、グラウンドなど、校内外 12 か所に、場所ごとの掲示物を作って掲示し、学校全体を防災安全について学習する場とした。「ラップ♪防災」でも紹介すると、友達同士や教師を相手に意見を交換する児童生徒の姿が見られるようになった。地震発生時の基本的な避難の行動力に加えて、どこで地震が発生しても、自ら考えて行動できることを期待している。

2 地域連携による安全で安心な学校づくり

(1) 学校を核とした県内 1000 か所ミニ集会の活用

スクールバスによる高台地避難計画での災害時の渋滞や道路の損壊リスクという課題に対して、避難ルートと避難場所の見直しを何度も図り、試走や学部を限定しての訓練を積み重ねた。しかし、どうしても納得のいく答えは見つからなかった。職員の自家用車分乗避難計画は、避難車両の職員が不在の場合は代替計画を始業前に確認する必要があった。また、避難車両を直ちに発進できるようにするために、担当職員は常に免許証と車の鍵の携帯を強いられた。このことに疑問を感じる職員が次第に増えていった。

東日本大震災の検証報告として、津波による直接被害よりも低体温症が要因で亡くなるケースが多かったことが報道された。当然ながら冬季や雨天時の屋上避難に関係する。さらに、数年来の気候変動による熱中症リスクも、炎天下での屋上避難を困難にした。

二次避難についての試行錯誤は、本校だけの取り組みでは、限界に来ていた。そこで、保護者をはじめ、広く地域からの意見を聞き、防災安全の専門家に助言を求めることにした。そして、「地域の防災安全」をテーマに、「学校を核とした県内 1000 か所ミニ集会」(以下「ミニ集会」)を開催することにした。

① 令和 2 年度ミニ集会

令和 2 年度は、「九十九里・外房地区に 10m 級の大海津波警報が発令されたら、本校と地域は、どのような対応をとったらよいか？」のテーマで、保護者、地域行政防災担当、管内消防、学区福祉施設の代表者による公開パネルディスカッションを行った。講師の千葉科学大学危機管理学部の藤本一雄教授からは、避難方法の課題だけでなく、避難先での避難生活の課題が示された。変化が苦手な障害特性を有する児童生徒への対応、医療的なケアについては、クールダウンスペース

の確保や設備の整備など、避難先と連携する上でのポイントが指摘された。移動時のリスクが少なく、避難スペースにゆとりがあり、医療的ケアが可能な二次避難場所確保の模索が始まった。

② 令和 3 年度ミニ集会

令和 3 年度は、「本校の児童生徒を含む地域の子供たちへの大海津波発生時の支援について、地域で何ができるのか？」のテーマで、保護者、一宮町の公立学校・県立高校、地域の行政関係、管内消防、地域の福祉施設、自然の家などからの参加者により、具体的な避難場所について話し合った。長期的な展望として、津波リスクのない高台地への校舎移転が話題に挙がった。それには予算はもとより関係者の思いを大切にすることの必要性が確認された。現実的で具体的な避難場所としては、医療的ケアに対応できそうな老人福祉施設が挙がり、一宮町ハザードマップの浸水深想定から校舎 2 階への避難でよいという意見も出た。そして、車両による避難計画により中断されていた自然の家への避難が、一番現実的ではないかとの意見が多数を占めた。参加者の自然の家所長は、快く賛成してくれた。



図 12 令和 3 年度ミニ集会

早速、候補地に挙がった各施設の实地踏査を行った。高等部が総合的な探究の時間に、距離と収容スペースで検証を行った。自然の家が学校から約 230m と一番近く、医療的ケアの備品運搬も可能であり、現在の児童生徒数であれば、クールダウンスペースも含め、自然の家への全員避難が可能であることが分かった。また、自然の家の 3 階大広間(寝室)床面の海拔高度は 13.2m であり、本校の屋上 11.2m よりも高い。

車椅子利用者も含めて、徒歩で一斉に、シンプルに非難できる避難計画の作成に直ちに掛かった。

(2) 自然の家との連携強化

令和 4 年度からは、新たな避難計画による避難訓練と合わせて、避難場所に慣れるために、自然の家への校外学習を増やしていった。小学部は、学校探検から避難所探検に発展させ、学級や学年ごとに徒歩で自然の家を見学した。中学部は、宿泊学習と防災安全学習を組み合わせて、自然の家に宿泊し、非常食を食べた。

自然の家の施設をさらに知るために、屋上や別棟にある2階の体育館でも活動した。高等部は、作業学習で園芸班が自然の家の花壇に季節の花苗を植えた。その活動は定期的に実施され、年間計画に組み込まれた。それらの活動は、「ラップ♪防災」にまとめて振り返った。そして、訓練のたびに、新たな課題を検討し、マニュアルの改善を図った。以上のような取組を経て、ようやく待望の二次避難計画が確定した。

令和5年度からは、新たな二次避難計画のもと避難訓練を重ね、その都度、振り返りと改善を図っている。



図13 中学部宿泊学習/ラップ♪防災



図14 船橋市立一宮少年自然の家への避難訓練

3 成果と課題

災害の危機に備え、児童生徒と教師は、より実践的な知識と対応力を身に付けるために、避難計画の改善を積み重ね、常に危機意識をもって、避難訓練に取り組んできた。そして、防災安全教育の充実を図り、年間指導計画に組み込み実践し、その継続発展に努めてきた。特に、最悪を想定した津波からの避難の取組は、安全で安心な学校づくりへの前向きな原動力となった。恐怖を与えて萎縮させることなく、楽しく（分かりやすく意欲的に）学ぶことを心掛けてきた防災安全教育は、「ラップ♪防災」による振り返りで、より強化された。教師はもとより、児童生徒は、先ず身を守り、そして防災リュックを身に付けるなどの基本的な避難行動の実践力を確実に身に付けている。

また、防災安全をテーマとしたミニ集会の取り組みは、学校と保護者、地域との連携を強め、三位一体による安全で安心な学校づくりにつながった。何よりも、シンプルに徒歩で素早く避難できる近隣の避難施設を確保できたことは最大の成果といえる。

これらの長年にわたる継続した取り組みは、「令和6年安全功労者内閣総理大臣表彰」の受賞としても高く評価された。

なお、ミニ集会を契機に、地域との新たな絆が生まれている。令和6年度には、本校所在地の自治会からの相談を受け、自治会の盆踊り大会が、本校を会場に開催された。本校伝統の和太鼓グループ「長養太鼓」がオープニングを飾り、万雷の拍手を受けた。本校の児童生徒を地域の人に知ってもらい、本校の児童生徒も地域の人たちを知る良い機会となった。一宮町の小中学校や一宮商業高等学校との連携強化は、令和7年1月21日に本校体育館で開催されたバリアフリー演劇一宮公演として具現化された。高等学校の生徒は、演劇に参加するだけでなく、前日の会場設営と当日の受付係としても協力してくれた。一宮町の各種学校が垣根を越えて一堂に会し、まさにバリアフリーとして、楽しい時間を共有することができた。



図15 自治会の盆踊り



図16 バリアフリー演劇

成果の検証は、防災安全委員会による総括だけでなく、学校運営協議会においても、学校評価アンケート結果を踏まえて行っている。地域連携による安全で安心な学校づくりは、新たな防災安全計画のもと軌道に乗り、高く評価されている。今後は、児童生徒の在住地域との連携拡大を図り、「ライフサポートファイル」（本人に関する様々な情報や支援内容の記録、関係機関等の支援計画を一冊にまとめたファイル）の防災ページの活用を啓発するなど、在宅時の防災安全の在り方を、保護者とともに模索していくことが課題である。

また、災害時の避難所生活における障害特性に応じた支援の在り方について、地域の行政機関や福祉機関、医療機関と連携して、整備していくことも課題である。

一人一人のかけがえのない命を守る安全で安心な学校づくりを、今後も真摯に取り組んでいきたい。

【参考文献】

「生きる力」をはぐくむ学校での安全教育/文部科学省
学校安全の手引き/千葉県教育委員会
一宮町地域防災計画/一宮町防災会議
船橋市立一宮少年自然の家避難マニュアル

共生社会の形成に向けた校内資源としての「通級による指導」の活用

～中学校LD等通級指導教室による「通常学級にある潜在的ニーズ」に対するプッシュ型支援～

千葉市立高浜中学校

教諭 三浦 怜史

1 はじめに

千葉市では、「通級による指導」を必要とする児童生徒の増加に伴い、第2次千葉市特別支援教育推進基本計画(2023)の中で、設置教室を増加する方針を掲げた。中学校LD等通級指導教室(以下、「通級」とする)に焦点を当てると、平成27年度の2教室31名から、令和元年度には5教室89名、そして、令和6年度には9教室121名へと規模を拡大してきた。

勤務する通級は、平成30年度に美浜区高浜中学校内に設置された。主に同区の生徒が在籍し、他校から26名、本校から5名の合計31名が指導を受けている。

指導内容に関しては、市内でも通級担当者間で連携しながら実践や研究を積み重ねてきた。その結果、オーダーメイドの個別支援と教材教具が蓄積され、通級に通う生徒(以下、「通級生徒」とする)の教育的ニーズに応じ、成長につなげることができている。

今後は、通級で蓄積された個別支援と教材教具のノウハウを共生社会の形成に向け、障害の有無に関わらず、どの生徒にも、校内資源として活用していく段階にあると考えている。

2 問題の所在

眞城(2023)の全国小中学校における発達障害による通級対象者数の将来予測では、令和6年度の1.7%から10年後には9.7%を超えるとされ、今後、学校における通級の役割は、一層増すことが予想される。

千葉県では、第3次特別支援教育推進基本計画(2022)の中で、公立の小学校及び中学校において「通級による指導」を受けている児童生徒は、739教室で7047名になり、10年前から約2.7倍に増加したと指摘し、眞城による将来予測が、実際の教育現場で起き始めていることがわかる。

見方を変えれば、今後10年にかけて急激に障害のある児童生徒が、増加するというよりも、現状は、通常学級の中に教育的ニーズを抱えながらも、通級を始めとする特別な支援につながっていない児童生徒が、一定数存在することが想定できる。本実践では、その教育的ニーズを「通常学級にある潜在的ニーズ」と定義する。

三浦(2024)は、「通級による指導」に関する理解啓発教育を通常学級に実施したが、事前アンケートの結果、通級は、何をしている場所かを「知らない」と回答した生徒が約90%いることがわかった。自由記述からは、困り感を抱えていながらも相談にはつながらず、そのままにしていた生徒が複数いることが明らかとなった。

その研究から、「通級で待っていても必要な支援が届けられない生徒がいる」ことを痛感し、取り組むべき「明日の教育課題」として捉え、本主題を設定するに至った。

3 実践の目的と方法

(1) 実践の目的

中学校LD等通級指導教室担当者が、「通常学級にある潜在的ニーズ」を抱える生徒に対し、プッシュ型支援を行うことを目的とした。

なお、本実践が言う「プッシュ型支援」とは、支援が必要な生徒からの要請を待たずに、必要と思われる支援を届けることと定義し、以下、実践ⅠⅡⅢを指す。

(2) 実践の方法

実践は、大きく3つに分けて行った。

①実践Ⅰ「体験授業」

千葉市通級設置中学校の通常学級に対して、通級の理解と啓発を目的とした「体験授業」を実施する。

②実践Ⅱ「通級通信」

体験授業を実施した通常学級に、通級に対する認識の定着と支援内容の一般化を目的とした「通級通信」を配付する。

③実践Ⅲ「一般開放」

通級通信を配付した日の放課後に、通級を「一般開放」し、「通常学級にある潜在的ニーズ」を抱える生徒に対し、オーダーメイドの個別支援を行う。

4 実践の内容

(1) 実践Ⅰ「体験授業」について

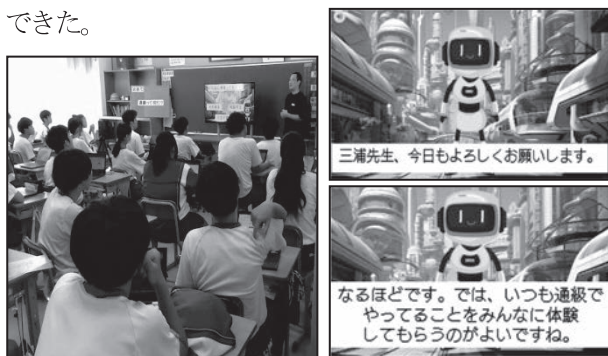
体験授業では、通常学級に対して、通級の理解と啓発を目的とした。本時の趣旨と通級の役割について説明を行った後、通級で実際に行っている授業の体験活動を行い、最後に通級担当者としての思いを語った。

①対象・時期

千葉市通級設置中学校1～3学年6学級 160 名を対象に、9月9日～13日に、一単位時間（50分）の授業構成で実施した。

②工夫（ゲーミフィケーション）

ゲームの要素やデザインの技術を取り入れ、学習者のエンゲージメントとモチベーションを高める手法（藤川 2016）として注目されており、通級生徒も楽しみにしている。体験授業を初めて行う通常学級生徒の心理的な抵抗感を下げ、自発的な参加を促すため取り入れた。[資料1]は、導入で登場した通級サポートロボットの「Qちゃん」であり、1人一台端末タブレットPCで作成した。AI音声を設定しており、クリックすると授業者である筆者と会話をしているような演出ができた。



【資料1】通級サポートロボット「Qちゃん」

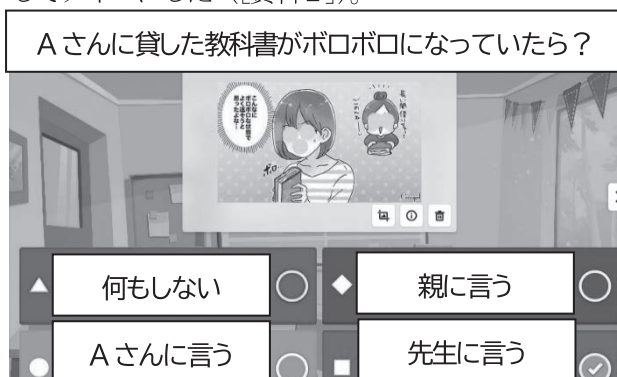
③展開

ア 導入（通級の役割について）

通級は、生活や学習の中で困っていることがあり「できるようにになりたい」という思いをもった生徒が学習しており、課題を解決していく中で、自己理解していく役割があることを伝えた。

イ ソーシャルスキルトレーニング

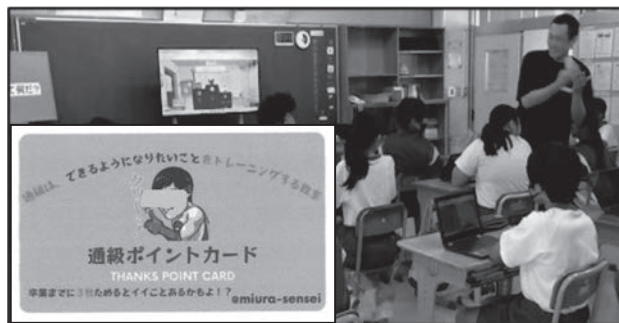
日常や学校生活の中で起こり得る場面を想定した問題を Kahoot!（ゲーム型教育用システム）で、10問作成してクイズにした（[資料2]）。



【資料2】Kahoot!で作成したクイズ

生徒は、各自のタブレットPCから参加できる設定

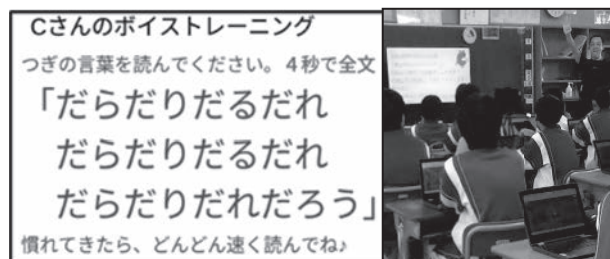
にし、正解数と解答スピードで競うクイズ大会を全員で行った。上位3名に、ゲーミフィケーションの報酬に該当する「通級ポイントカード」を贈呈した（[資料3]）。



【資料3】クイズ大会の表彰と「通級ポイントカード」

ウ ボイストレーニング

通級生徒がルーティーンで行っている学習であり、発声、活舌を向上させることを目的としている。3分間でできる内容をスライドで作成し、全員が同時に行った（[資料4]）。



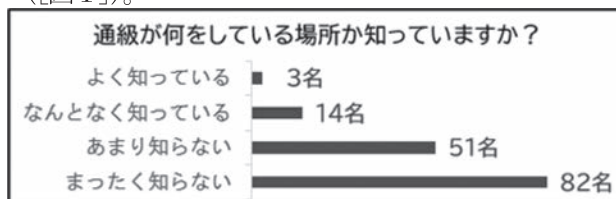
【資料4】ボイストレーニングのスライドと様子

エ まとめ（通級担当者の思い）

通級生徒は、学級の授業を抜け、1人で通級に通っていることを話した。そのことは、勇気がいることであり、自分の苦手と向き合い、できるようにになりたいと努力している生徒を担当者として誇りに思い、関わることができ、やりがいを感じていると、思いを語った。

④結果と考察

実践Ⅰの前に、通常学級生徒の通級に対する認識を把握するため、Google Forms によるアンケートを行い、「通級は何をしている場所か知っていますか？」を4択で回答を求めた。「まったく知らない」「あまり知らない」を合わせると 150 名中 133 名（88.6%）であった（[図1]）。



【図1】事前アンケート結果（150名）

この結果からわかるように、通級は、校内にあるため、存在自体は知っているものの、通常学級生徒は、どこか

自分とは、関係のない場所と認識しているため、約90%の生徒が、何をしている場所か「知らない」と回答したと考える。

しかし、体験授業後に感想を求めた自由記述では、「自分」という語彙が10回出現していた〔資料5〕。体験授業を通して、自分自身について振り返り、通級の支援内容が自分にも当てはまる部分があるのではないかという認識の変容があったと考えられる。

- 自分はやりたいことがたくさんあるから通級でトレーニングしてみたい。
- 自分の思っていた通級のイメージと全然違った。
- 自分のやりたいことがある時に、相談できる場所があると思うととても心強いと思った。
- 自分は通級に偏見をもっていたけど、実際に体験してなくなった。
- 自分は算盤をやっていたのに、大変でやめてしまった。人生で1番努力した瞬間を思い出した。

〔資料5〕「自分」と関わる自由記述

また、〔資料6〕のように、自身の困り感を打ち明ける記述が複数あった。まさに、本実践の対象であった「通常学級にある潜在的ニーズ」が、表面化したものだと考える。勇気をもって記述してくれたことを踏まえ、今後は、その生徒の思いに応える支援を検討し実施していく必要がある。

- 整理整頓ができなくて困っている。
- 話している時に、相手に意味が伝わらなくて何を言っているのと言われたことがあった。
- 人になかなか相談できなくて一人がかかえちゃう。
- 私は後回しにしちゃうので悩んでいる。
- 日本語がむずかしいです。※外国籍の生徒

〔資料6〕自身の困り感を打ち明ける自由記述

(2) 実践Ⅱ「通級通信」について

通級通信では、通級に対する認識の定着と支援内容の一般化を目的に、授業の紹介を継続的に行った。

①対象・時期

実践Ⅰの生徒160名を対象に、11月15日～1月31日に、全10号の配付を実施した。

②工夫（内容・名称の決定）

通級通信の内容は、体験授業のアンケートの自由記述に対する回答も含め、学校生活で起こる「こんな時、どうする？」といった場面を、特別支援教育自立活動6区分27項目から選択した〔表1〕。

通級通信の課題は、読むことが苦手な生徒に対する配慮であると考えた。そこで、内容を音声データにし、各自のタブレットPCからQRコードで読み込み、聞いて学ぶことができるようにした。また、読み終わった

後の確認クイズをKahoot!で作成し、QRコードで読み込み、復習できるようにした。

毎週金曜日の配付が日常化すると「一つ一つ楽しみにしています」と、通級通信をそのように呼ぶ一人の生徒が、声をかけてきた。その後、他生徒にも通級を身近に感じてほしいという思いを込め、タイトルを「一つ一つ」とした。

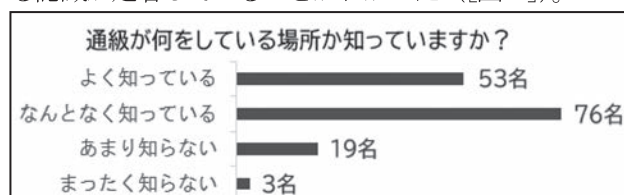
〔表1〕全10回配付した通級通信「一つ一つ」

号	通級通信のタイトル	自立活動6区分27項目
1	整理整頓はできているかな？	環境の把握
2	動画で勉強したいあなたへ	環境の把握
3	同じ100m走でも	身体の動き
4	一回の授業料	生活のリズム
5	忘れ物するのは誰？	環境の把握
6	一生使える？プレゼンスキル	コミュニケーション
7	生成AIの波に乗ろう	環境の把握
8	あなたのブレイクスルーはいつ？	心理的な安定
9	みんなちがって、どうでもいい話	人間関係の形成
10	相手と心のギャップを近づける方法	コミュニケーション

体験授業の事後アンケートで、表面化した「通常学級にある潜在的ニーズ」を抱える生徒を想定し、具体的な支援内容の紹介をした。途中、担任から「通級通信の内容の補足授業をしてほしい」という要請を受け、スライドを使った出前授業を通常学級で実施した。

③結果と考察

全10回配付後に行ったアンケートでは、「通級は何をしている場所か知っていますか？」を4択で回答を求めた。「知っている」「なんとなく知っている」を合わせると151名中、129名(85.4%)であり、通級に対する認識が定着していることがわかった〔図2〕。



〔図2〕通級通信後アンケート結果（151名）

また、通級通信の配付を始めてから、8名の生徒が通級へ相談に来室し、4名の生徒が紹介した支援を参考に行動へ移した。他にも通級へ来室してはいないが、2名の生徒が、自身の生活の中にある悩みを保護者に打ち明け、「(困り感を解消するため)通級へ通いたい」と、担任へ相談があった。

(3) 実践Ⅲ「一般開放」について

通級通信を配付した日の放課後は、通級を一般開放し、相談を受け付けることとした。ここでは、来室した4名の生徒の事例を取り上げる。

①整理整頓ができるようになりたい生徒A

生徒Aは、ロッカーとカバンの整理整頓が苦手で、紛失により、課題の提出が遅れるなど、学校生活に影響が出ていた生徒である。通級の体験授業アンケートで記述があったため、1号の通信では、生徒Aを想定し、整理整頓の仕方について紹介した（〔資料7〕）。



〔資料7〕 通級通信1号「整理整頓」について

生徒Aは、通信で紹介した「ジッパーファイル」と「ネームタグ」を自分で用意したことで、ロッカーとカバンの整理整頓ができるようになった。〔資料8〕は、生徒Aが、「整理整頓ができるようになりました」と、通級へ嬉しそうに報告に来てくれ、一緒に教室のロッカーを見に行った時の写真である。

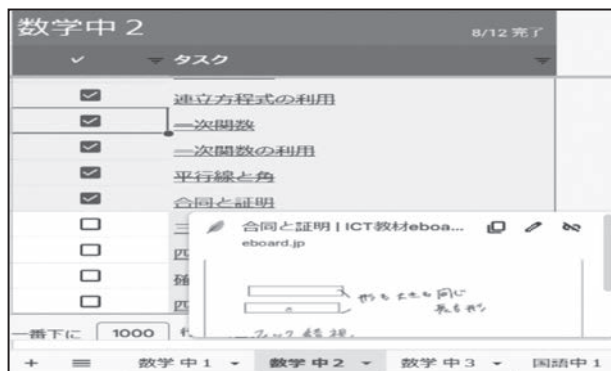


〔資料8〕 生徒Aのロッカーとカバン

これは、通級通信の写真により、「何が正解か？」「どうすればできるのか？」という、模範と方法が明確になったためと考える。「〇〇したら、□□できた」という経験を積み重ねることで、困り感が生じた際に、相談しながら自分で工夫してみようとする生徒に育てていく。

②自宅学習ができるようになりたい生徒B

生徒Bは、2号の通信で紹介した動画学習教材「高浜自習サプリ」に興味をもった生徒である。教科書やワークによる自習が難しいという悩みを抱えていた。そこで、「高浜自習サプリ」を生徒B用に改良し、定期テストまでの範囲の動画教材をスプレッドシートにまとめた。〔資料9〕。



〔資料9〕「高浜自習サプリ」のスプレッドシート

動画で学習した内容は、チェックを入れ、テスト範囲の達成度を数値化したことで、テスト当日までに範囲を終わらすことができた。スプレッドシートのメリットは、生徒と教員が共有できることにある。進みが遅れている教科については、廊下ですれ違った際に、アドバイスすることができた。生徒Bは、ワークでわからない箇所があると、動画教材で復習し、解き直すという自宅学習の仕方が身に付いたと話していた。

なお、この「高浜自習サプリ」は、5教科3学年分すべての単元を無料動画教材『eboard』と連携しており、学び直しや受験勉強に活用できるようにしている（〔資料10〕）。1動画10分前後で構成され、視聴後に関連した問題が5問程度出題される。不正解だった問題は、関連する動画部分まで戻って復習ができる。



〔資料10〕 無料動画教材『eboard』の画面

③提出物を言語変換できるようになりたい生徒C

生徒Cの母国語は、中国語である。本人は、日本語の読み書きができるが、母親が中国語で生活しているため、提出物で困り感を抱えていた。体験授業後のアンケートで記述があり、5号の通信で、通級が製作した教具「どこでもスキャン」を紹介した（〔資料11〕）。



【資料 11】 教具「どこでもスキャン」

その通信を見た副担任が生徒Cを誘い、通級へ来室した。そこで、「どこでもスキャン」と、Google 翻訳の使い方を覚え、母親のため、中国語に翻訳した提出物を持ち帰った。

その結果、生徒Cは、期限までに提出することができたが、これまでも親子で生活言語が違うことにより、コミュニケーションの齟齬があったと考えられる。通級の一般開放をきっかけに、親子間の悩みに気付き、解消に向け、個別支援することができた。今後も、Google 翻訳や読み上げ機能、生成AIなど、進化するテクノロジーを取り入れながら、校内で連携し支援を続けていく。

④課題を期限までに提出したい生徒D

生徒Dは、課題提出に難しさを抱えていた生徒である。そこで、通級生徒用に作成した課題チェックリストを自身のタブレットPCで管理する方法を紹介した。

生徒Dは、スプレッドシートの共有機能を活用し、担任、教科担任、学年主任と共同で、チェックリストの記入を行った。間もなくして、すべての課題を期限までに提出することができるようになった（【資料 12】）。



【資料 12】 課題チェックリストを確認する生徒D

チェックリストは、課題の進捗状況が一覧になるため視覚的にわかりやすく、期限前に教員による個別支援が行えるメリットがあった。生徒Dは、書くことに苦手意識がある一方、インターネットに興味があり、日頃からPCに触れているためタイピングが得意であった。課題チェックリストを紙ではなく、タブレットPC上で扱えるようにしたことが、定着した要因として考えられる。

生徒Dについては、個別支援の内容を共有、改善する教員対象の「特別支援教育校内研修」の事例生徒とした。

その研修は、部活動休養日の放課後 15 分間で設定し、月に 1 回、計 10 回行うことができた。1 人の生徒の変容を通して、生徒の個性を教員間で共有し、得意を生かす個別支援をチームで続けていくことが確認できた。

5 まとめ

（1）成果

本実践では、共生社会の形成に向けて、通常学級に対し「通級による指導」に関する体験授業を行うことで、通級の理解と啓発をし、生徒の認識に変容があった。そして、通級通信を通して変容した認識の定着と支援内容の一般化を目指した。その結果、アンケートに困り感を打ち明けたり、通級への相談数が増えたり、「通常学級にある潜在的ニーズ」を表面化することができた。

その後、通級の一般開放により、一人一人の困り感に応じたオーダーメイドの個別支援を行うことができた。

一方、「（困り感を解消するため）通級へ通いたい」と、担任を通して相談があった2名に関しては、今後、本市の就学支援委員会へ、入級に向けた上程をする予定である。それは、本実践の「プッシュ型支援」により、「通級を知る」過程を経験できたことで、円滑に必要な支援へとつなげることができた成果と考える。

（2）課題

本研究では、「通級による指導」を校内資源として、障害の有無に関わらず、どの生徒にも活用することとした。そのため、通級が設置されていない他校の通常学級は、対象としなかった。しかし、「通常学級にある潜在的ニーズ」は、どの学校にも教育課題として存在していることが想定され、そこには、支援を必要とする生徒がいる。共生社会の形成に向けて、誰一人取り残すことのない教育を実現するため、本通級では、今後、校内資源に留まらず他校とも連携していく。そして、より多くの生徒に、成長を後押しするプッシュ型支援を届けるため、それぞれの学校の実情に合わせた持続可能な支援の形について、模索していくことを今後の課題としたい。

【主な引用/参考文献】

- 千葉市（2023）『第2次千葉市特別支援教育推進基本計画』
- 眞城知己（2023）『通級による指導対象者数変化の数理モデル』
- 千葉県（2022）『第3次千葉県特別支援教育推進基本計画』
- 三浦怜史（2025）『「通級による指導」に関する理解啓発教育を通した「安全・安心な居場所」づくり』
- 藤川大祐（2016）『ゲームフィクションを活用した「学びこむ」授業の開発』

優 秀 賞

科学的な資質・能力の育成を目指すホールスクールプロジェクト

～スーパーサイエンスエレメンタリースクールをめざして～

千葉市立緑町小学校

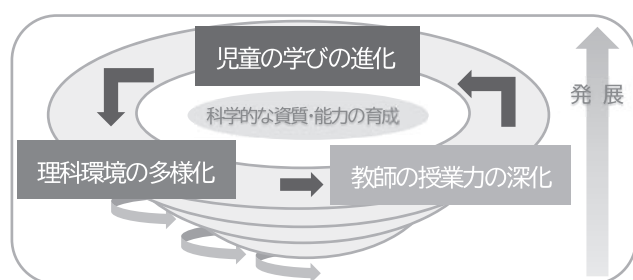
校長 三 橋

勉

1 スーパーサイエンスエレメンタリースクール(以下SSE)をめざして

文部科学省では、将来の国際的な科学技術人材の育成を図るため、科学技術、理科・数学教育に関する研究開発等を行う高等学校等を「スーパーサイエンスハイスクール(SSH)」に指定し、理科・数学等に重点を置いたカリキュラムの開発や大学等との連携による先進的な理数系教育を実施している。本校は昭和 39 年の開校当初より千葉市理科教育センター校として理科教育を中心に研究を積み重ねてきた歴史がある。シンギュラリティが近づき、VUCA の未来に向かって理科教育の重要性はさらに増していることから、科学的な資質・能力をもった人材育成をめざし SSH の小学校版として SSE を標榜し、そのためのプロジェクトを立ち上げた。児童の実態は、知的な好奇心があり知識・理解や思考力・判断力などの学力は総じて高い子が多いが、自然の中から疑問を見つけて問題をつくり主体的に学ぶ力や学習成果を他者に伝える情報発信力はまだ十分ではない。

そこで「児童の学びの進化」「教師の授業力の深化」「理科環境の多様化」の3つの「化」を柱として、相互に関連付けながら教育課程を編成し、AAR サイクルを回しながら実践していくこととした。【図1】



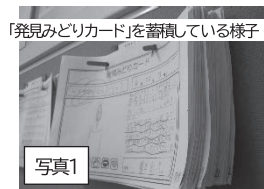
【図1】SSHの3つの「化」サイクル

2 児童の学びの進化

児童の学びの進化とは、教師から指示を受けて動き、教えてもらう受動的な学習者となるのではなく、自ら学びの計画を立てて遂行し、省察するといった自己調整を行いながら学び続けていく主体的な学習者となることである。そのために本校では理科教育を中心に主体的に学ぶ経験を積み重ね、学びの進化を目指した。

(1) 探究の出発点となる「発見みどりカード」

まずは身の回りの自然の事物・現象から疑問をもち、問いを立てる力を育成することから始めている。普段何気なく生活していると気づけないが、身の回りには、「なぜ」「どうして」と思える不思議なものが多数存在している。こうしたものに目を向けることで、気づき、疑問に感じ、問題として探究するための出発点となる「発見みどりカード」を日常化している。このカードは普段の生活の中で疑問に感じたこと、調べたことなどをいつでも自由に書けるようにしており、作成後には学習ポートフォリオとして廊下に掲示して蓄積している。休み時間や放課後に進んで取り組んでいるため4月からの3か月で100枚を超えるカードを書き貯めた子どもも少なくない。この実践により自然の事物・現象を見たときに、自ら疑問をもつことができる能力の育成につなげている。【写真1,2】



(2) 自ら疑問もつ力を育てる「はてなボックス」

「はてなボックス」とは、児童が様々な生活道具やおもちゃに触れながら疑問を見つけることをねらった箱のことである。【写真3】例えば「なぜ栓抜きは瓶のふたが開けられるのか」「なぜ砂時計の砂はゆっくり落ちるのか」など、改めて栓抜きや砂時計に触れることで「なぜ」がたくさん見つけれられるようになる。この学びの経験から、理科の授業導入時においても事物・現象に初めて出会った時に、自ら進んで疑問を見つけられる子が増え、学習問題づくりも容易にできるようになり、主体的な学びへとつながっていく。



(3) 科学的な見方・考え方の視点「みどりのめがね」

3年から6年までの4年間にわたり理科の授業では、科学的な見方・考え方を育成するために「みどりのめがね」(以下「めがね」)という視点を身に付け、普段から活用できるようにしている。児童は問題を発見す

るとき、解決方法を考えるとき、発表するとき、考察を書くときなどの思考場面で、意識的に「めがね」を使って考える習慣がついている。この「めがね」の視点は他教科の授業にも応用が効くので、学習中に思考の拠り所として活用している子が本校では非常に多い。【図2】

【科学的な見方】
質的・実体的
量的・関係
共通性・多様性
時間的・空間的
部分と全体
定性と定量
原因と結果

【図2】
【科学的な考え方】
比較する
関係付ける
条件を制御する
多面的に考える

「みどりのめがね」の
視点をもって物事を考
える習慣をつける

(4) 学びの成果を発信する「自由研究相談会」と「サイエンス展」

夏休みには全員が自由研究取り組むため、休業前には「自由研究相談会」を開催している。この会では一人一人が質問や課題に応じた助言をもらうことができるので、テーマに悩んでいる子やより研究を深めたいという子が進んで参加している。休業後には「サイエンス展」として自由研究の優秀作品を校内に展示し、保護者や全児童に向けて発表することで学び合いの機会をつくっている。【写真4】



(5) 学びの自己調整を行う「単元振り返りシート」

一人一台端末を利用し、3年から6年までの全単元で「単元振り返りシート」を共通化している。このシートには「問題を見出す」「予想を立てる」「実験・観察の計画を立てる」「実験・観察を行う」「結果を記録する」「結果から考察をする」「学習の有用感」の7つの項目があり「ともよい・よい・あまりできない・できない」の4段階で自己評価を実施し、単元の学習後に自らの学びを振り返る機会を設けている。自由記述式で「自分の学び方」に関する振り返りも書けるようにしており自分の考えや思いを記録している。本シートは学級全体で1枚にまとめて共有化しているため、いつでも友達の自己評価も読むことができ、学び合い、高め合いにつながる取組となっている。【図3】

5-1理科 単元振り返り

ファイル 編集 表示 挿入 表示形式 データ ツール 拡張機能 ヘルプ

100%

	A	A子	B子
1	4:できた 3:少しできた 2:あまりできなかった 1:できなかった		
2	調べたいことや不思議なことを見つけることができた		
3	学習問題に対して今までの学習や経験から予想を立てることができた		
4	見通しをもって確かめる方法を考えることができた		
5	目的をもって観察や実験をすることができた		
6	結果をわかりやすく(図、表、絵など)まとめることができた		
7	結果から学習問題について考えることができた		
8	学習したことや社会や生活に生かされていると感じることができた		
9			

項目ごとに4段階の自己評価

上に自己評価の7つの観点
右に学習の振り返りの自由記述

天気の変化 メダカ 台風と防災 植物の葉 流れる水のはたらき もののとけ方

【図3】 単元振り返りシート

3 教師の授業力の深化

自ら学ぶ児童を育てるためには、従来からの一律一斉授業から脱却し、授業を深化させる必要がある。校内研究では研究主題を「子どもの心に灯がともる学びの創造」～子どもの思考に寄り添った生活科・理科～としてAARのサイクルを回し授業を深化させている。本校で目指す「子どもの心に灯がともった姿」とは児童が主体的・対話的に学び進める次のような姿である。

- 問題解決への意欲が高まり、自ら探究し続ける姿
- 学習で得たものを次の学習や生活に生かそうとする姿
- 学習を通して気付いた自らの成長を実感している姿

授業において「子どもの心に灯をともし」には、単元を通して児童が主体となる探究的な学びを主軸とし、教師は児童の思考の流れに寄り添い、一緒に学びを進めていく伴走者となることが大切だと考えている。従来の教科書を中心とした教師主導の一斉授業ではなく、児童の「なぜ」という疑問から問題をつくり、計画を立て、自ら学習を調整しながら学びを進め、最後には省察を行い、次の単元へとつなげていくことが、本校がめざす授業のスタイルであり、こうした学びを実現できる児童を育てるために授業を深化させている。

(1) 【実践1】4年「ものの温度と体積」

導入時にペットボトル内の空気を温めたり冷やしたりする自由試行の体験活動を行うことで、気づきから学習問題が生まれた。児童は「めがね」の「原因と結果」の見方を働かせて「膨らむ、膨らまない」という表面的な変化だけで留まることなく「石鹼膜はお湯に入れたら1回目は膨らんだのに、なぜ2回目はお湯に入れても膨らまなくなったのだろうか？」という1回目と2回目を比較する「温度差」に関する問題を見出すことができた。次時では体積変化をより大きくしたいという児童の願いから、三角フラスコで実験を行った。その結果、膨張した空気の力で石鹼膜が大きく膨らんだり、ガラス管の中の栓も押されて高く上昇したりしたので、温度差による変化が視覚的に捉えやすくなった。導入での自由試行を通して、湯(氷水)につけても体積が大きく(小さく)ならない場合もあることに疑問をもち探究することで、表面的な温度の違いによる体積変化を知ることだけで終わらせることなく、温度差が大きいほど体積変化も大きくなるというところまで深化させることができた。【写真5】



石鹼膜が膨らむ様子を写真に撮る様子

〔2〕【実践2】5年「もののとけ方」

食塩を水に溶かしシュリーレン現象を観察するところから単元の導入を図った。数日後のビーカーの中の食塩水について「食塩の濃さはビーカーの上や真ん中や下では違うのだろうか」という「めがね」を生かした問題が児童から出てきた。多くの児童は「塩は下に落ちていったので下のほうが濃くなる」と考え「全体で均一になる」という考えは少数であった。それを確かめるために3つの実験方法が出てきたので、希望別のグループで検証を行った。

1 グループ:ビーカーの上中下3か所の水溶液をスポイトで採取し蒸発させて同じ量の食塩の結晶が出てくるか調べる。ミニトマトが浮かぶかどうかを調べる実験



2 グループ: 3か所の水溶液でミニトマトの浮き沈みを調べる。(イスラエルの「死海」では塩の力で物が浮くということから発案した)【写真6】

3 グループ: 真水の中に3か所の水溶液をスポイトで入れシュリーレン現象が同じように起きるかを調べる。

実験結果からは、全グループで濃度は不明だが上中下の3か所のどの場所にも食塩が溶けていることがわかった。【写真7】そこからさらに「どの場所の食塩が一番濃いのだろうか」という次の問題が生まれたので、次時は濃さを正確に測定するためにデジタル塩分濃度計を使って3か所の水溶液を調べ、全ての場所で均一になっていることを証明することができた。本単元でも自ら学びを進めたことに対する満足感や達成感が高かった。



上中下の蒸発皿の食塩を画面で整理する様子

〔3〕【実践4】5年メダカの成長

本単元では単元内自由進度学習を取り入れ、児童自らが学習計画を立てて実行し、振り返りを行いながら学んでいった。単元の導入では学習方法のガイダンスを行い、単元全体に関する学習の見通しをもたせた後に、児童が学習計画を立てた。学習進度や学習の順序が個別になるため、学習環境の整備や学習時間の設定には十分配慮し、児童の自律的な学びを側面から支援する体制を整えた。教室には雄雌の入ったメダカの水槽、卵の成長観察用の双眼実態顕微鏡、



双眼実態顕微鏡でメダカの卵を自由に観察する様子



自由進度で学びの成果をまとめている様子

メダカの卵が入った観察用のチャック付きビニール袋、メダカに関する図書資料や掲示物、端末から視聴できる動画資料などを揃え、内容別に学習コーナーを設置した。【写真8】教師は巡回しながら個別に指導や助言を行うとともに、学習記録を毎回提出させることで、個別の進度や理解度などの学習状況を見取り、次時に生かしていった。学習記録用紙は学びの成果をアウトプットしやすいように、絵や写真を自由に貼れる白紙のワークシートを配付し、最終的には自由研究論文のような冊子にまとめた。【写真9】作品を交換してお互いに読み合い、意見交換する場面を設けたことで、単元テストではクラス平均点が95点を超え、児童は自律的に学ぶことの良さや価値を知るとともに、学び方に対する自信も深めることができた。

〔4〕【実践5】6年「人の体のつくりとはたらき」

高学年になるほど「学びのコントローラー」を教師から児童へと手渡す機会を増やし、本単元も単元内自由進度学習で行った。単元の初めには全体ガイダンスを行い、単元全体の見通しと学習計画を立てることも経験を積み重ねることで上達していく。学習環境をより充実させるために外部機関とも連携し、千葉市科学館から魚の骨格標本やデジタル心拍計などの教材を、千葉市中央図書館からは人体に関する図書資料を70冊借用し、いつでも自由に見たり触れたりしながら学習を進められるようにした。理科室と図画室に学習スペースを広げ、人体模型や心音測定器などを設置したコーナーや「でんぷんを糖に変える唾液の働きの実験」「運動後の心拍数を測定する実験」などの実験コーナーも準備し、自主的に探究活動ができるようにした。

学習成果はデジタルポートフォリオを作成するため、一人一台端末のスライドを活用したほか、自分の学び方をメタ認知できるように毎時間スプレッドシートに学習計画と学びの振り返りを書くことも継続した。単元前の事前学習では、消防署の救急救命士を外部講師として招き、心肺蘇生やAEDの使用法の体験学習を実施した。【写真10】この経験から心臓や肺の働きは生命にかかわる大切なものであることを強く意識することができたので、深い学びへ深化させることもつながった。学習成果は自分の中にインプットをして終わらせるのではなく、誰かのためにアウトプットをすることで、学習の価値をより高めることができ



全児童が心肺蘇生を体験している様子

るため発展として「人体展」も企画し開催した。展示内容は学習成果をポスターにまとめたり、自作したペットボトル聴診器で心音を聞けるコーナーを作ったりと、中学校の文化祭のようなレベルに仕上げた。【写真 11】展示会は廊下を会場にしたので誰もが自由に参観できるため低学年の参観者も多く、児童からは、学びは「自分のため」だけにあるのではなく「みんなのため」にも役立てることができるという感想も聞かれ、自己肯定感を高める効果もあった。

写真 11

全校児童が参観できる人体展の展示の一部

〔5〕【実践 6】6年「水溶液の性質」

「無色透明の謎の水溶液を判別するにはどうすればよいか」という単元全体を貫く大きな問題意識を設定し、単元を通して水溶液の性質について学ぶための意味や動機付けを行った。教科書にある5つの水溶液のほかに「ミョウバン水」「酢酸」「水酸化ナトリウム水溶液」「純水」の4種類を追加し、酸・アルカリなどのそれぞれの水溶液の性質について、より多角的・多面的に理解できることをめざした。学習した水溶液は、その性質を一覧表にまとめたり、判別の方法をフローチャート化したりすることで「学びの可視化」を意識していった。【写真 12】単元末には、最初の予告通り、無色透明の5種類の水溶液を用意し、一人一実験で正しく判別できるか「謎解きチャレンジ」を行った。【写真 13】

写真 12



フローチャートで実験結果をまとめた様子

授業では各自が学習中に身につけた判別方法と結果をフローチャートで可視化し、獲得した知識や実験技能をフル活用して問題解決を図った。無事に水溶液の正体を見つげられた時には、正解に対する喜びだけではなく、学びの有用感や「理科の学習は生活に役に立つ」という効力感にもつながることができた。最後に実験結果を発表共有しあい、全体の傾向を掴ませた後に、もう一度自分のフローチャートの見直す時間を設けたことで、客観的に結論の妥当性や再実験の必要性を考えることができ、メタ認知能力を高めることにもつながった。単純な〇×クイズのように結果の正解・不正解だけで一喜一憂するので



写真 13

一人一実験で水溶液を判別している様子

はなく、結果を出すまでの過程や結論の妥当性を考察する過程でも「めがね」が重要であることに気付いた。

4 理科環境の多様化

科学的な資質・能力を高めるためには理科環境の多様化させることも重要である。そこで「空間」「時間」「人間」の3つの「間」を環境と考えた実践を行った。

〔1〕わくわくどきどきが広がる「科学のひろば」

本校ではロング昼休みの時間に低中高学年ごとに内容を工夫した「科学のひろば」という科学実験会&工作会を年7回実施している。内容は「よく回る七変化コマ」「電極モーターづくり」「ぐるぐるぶんぶんコマ」「ギネスに挑戦！紙飛行機」「曲がれブルーメラン」「不思議なバタフライピー実験」「科学オリエンテーリング」など遊びながら学べる内容となっている。当会の司会進行や工作中のお手伝いは、委員会活動の一環として環境委員の児童が担い、毎回100名以上が集まって、皆で遊びながら科学を楽しんでいる。

写真 14



「科学のひろば」に参加している児童の様子

〔2〕様々な生き物と触れ合う「飼育環境」

本校は市街地に位置しているため、野山や河川などの自然環境には恵まれていない。児童が生き物と触れ合う機会を増やすために飼育環境の充実にも取り組んだ。2年生ではカイコの幼虫とヤゴの飼育を行い、その様子を観察カードで記録し、羽化するまでを見届けている。3年生ではモンシロチョウやアゲハチョウの飼育を行い、産卵から成長する様子を観察するとともに無事に羽化したチョウは室外に放し、生命の大切さや生命の循環を実感することができた。校内のビオトープではクロメダカやミナミヌマエビ、アメリカザリガニ、ミシシippアカミミガメなどが生息している。校舎内には熱帯魚や海水魚、淡水魚の大型水槽も展示し、生き物委員の児童が世話をし、えさをあげる時間は「ふれあいタイム」として公開している。

〔3〕楽しくて美味しい「栽培環境」

2年の生活科では自分たちで育ててみたい野菜を決め、グループごとに様々な種類の栽培活動を行っている。希望した野菜はメロン、スイカ、イチゴ、トウモロコシ、ゴーヤ、シソ、ダイズなどの多種多様である。「みどりっこ農園」では栽培委員会がイネ、ナス、ピーマン、キュウリ、ジャガイモ、サツマイモ、

写真 15



ジャガイモの収穫を喜ぶ児童の様子

ダイコン、カブなどの世話をし、収穫体験も行っている。また食育に関連させてトウモロコシやソラマメの皮むき体験も実施し、体験から気づいたことを絵や文章にまとめて記録することで体験価値を高めている。

〔4〕教師の授業力を深化させる研修会

児童の学びの進化と教師の授業力の深化は車輪の両輪である。そのために教師にも充実した研修機会を確保している。千葉大学教授に年間を通じた指導をお願いしているほか、文部科学省の教科調査官(理科)の有本淳先生をお招きした講演会も実施した。当日は他校教員に向けたライブ配信も行い情報発信も活発である。

〔5〕各種財団の教育助成を活用した環境整備

理科教育を多方面から推進していくために様々な教

- ①中谷財団の科学教育振興助成
- ②ちゅうでん教育振興財団の教育振興助成
- ③日産財団の理科教育助成
- ④武田科学振興財団の理科教育振興助成

育助成の活用も図った。2年間で4つの教育助成を獲得し、STEAM 教育につながる最新のプログラミング教材、一人一実験用の実験器具、SDGs をめざす手回し発電機やコンデンサ、水槽セットと熱帯魚、海水魚、ウーパールーパーなどの多様な生き物たちの導入を図ったことにより豊かな学びを支える学習基盤ができた。

6 科学的な資質・能力につながる成果

本校で行った SSE を目指すプロジェクトの成果をエビデンスに基づき、複数の観点からまとめてみた。

〔1〕令和6年度千葉県学力検査(理科)の結果

	3年	4年	5年	6年
本校	85.4	83.3	81.9	80.2
県平均	77.2	73.5	70.4	62.8
県との差	+8.2	+9.8	+11.5	+17.4
昨年度県との差	+4.1	+1.9	+5.0	+0.2

令和6年度の千葉県学力検査(理科)の結果、どの学年も県平均を上回っており、学年が上がるにつれて、その差はさらに広がっている。昨年度の同学年の県との差も比較したところすべての学年で上昇していた。

〔2〕令和7年度の全国学力・学習状況調査の結果

学力調査における理科の平均正答率は 68%であり、県平均 57%、全国平均 57.1%と比較し、約 11 ポイント高くなっている。学習状況調査の質問項目では、一つ以外の全ての項目で県、全国を上回っているが、特に「実験・観察の進め方や考え方を振り返って考えているか」という項目では、本校 46%、県 32.7%、全国 33.4%と約 13 ポイントも高い水準であることがわかった。

〔3〕令和6年度の自由研究作品の出品成績

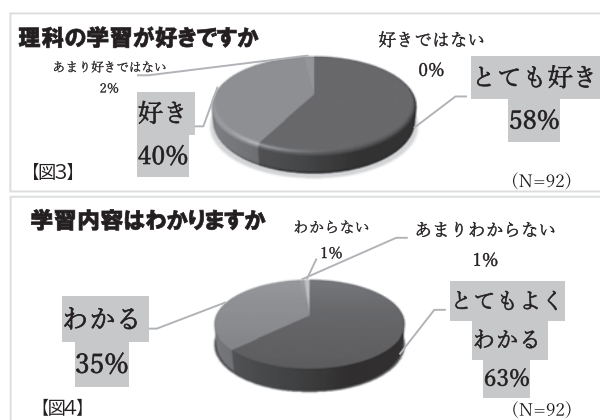
令和6年度に千葉市総合展科学部門に出品した8点のうち入選1点、推奨7点(うち千葉市科学館賞1点)、

県展出品作品2点(うち奨励賞1点、優秀賞1点)という成績であった。この他に令和6年度の毎日新聞社主催の自然科学観察コンクールに上記の以外を出品(9点)したところ6年児童の作品が「一等賞」を受賞したほか、学校も全国で唯一「学校奨励賞」に選出された。一等賞の6年児童の作品は右上の二次元コードにて閲覧可能である。



〔4〕令和7年度の児童アンケートの結果から

令和7年7月に児童アンケート(小5)を行った結果。「理科の学習が好き」と回答した児童は合わせて 98%【図3】「学習内容がわかる」と回答した児童も合わせて 98%【図4】であり、どちらも高い数値であった。



(5) 児童の理科日記から(注: _____ は資質・能力に関連した記述)
 <科学的な資質・能力の高まりが感じられる日記例>

「通学路と校庭にあるアジサイの変化を毎日欠かさず観察しました。花が咲く前のたくさんの粒々。これが後に花になるのではないかと予想しました。観察の結果、何日か経つと花がさらに開き、粒々も大きくなっていました。もうそろそろ6月、花の色もうっすら決まり始め、最後には色とりどりのきれいな花になりました。でも、通学路と校庭のアジサイの花の色が違っているという疑問はまだ解けないままです。予想を考えると、学んだことをしっかりと思い出して、たくさん考えたりします。それが私にとっての最高の時間です。もっと日常生活から不思議や発見を見つけたという気持ちです。」(5年A子の日記より抜粋)

7 科学技術人材の輩出に向けて

プロジェクトの成果をこうして積み重ねることができたのは教職員の情熱と努力、そして主体的に学び続けた児童のおかげである。令和8年度には全国小学校理科教育研究会千葉大会にて成果発表を行う予定だが、そこから先も緑町小は児童の科学的な資質・能力を育て、科学的技術人材を数多く輩出していくであろう。

一人一人の「読む力」「考える力」を高める国語科指導

～学習計画、言語活動、音読指導の工夫を通して～

神崎町立米沢小学校

校長 飯 島 純 子

1 主題設定の理由

本校は、「発酵のまち」神崎町の南東部の台地に位置し、創立150年の伝統をもつ児童数49名の小規模校である。教育目標は、「ほんき やるき げんき」を合言葉とし、「心身ともに健康で、自ら考え正しく判断する、実践力のある児童の育成」である。本校の児童は、明るく素直で、何事にも真面目に取り組む児童が多く、休み時間には、学年を問わず外で元気に遊んでいる。少人数であることから、一人一人への丁寧な支援が可能であり、児童と児童、児童と教師、教師と保護者との繋がりも深い。児童は、広いグラウンドやビオトープなどの自然豊かな環境の中で、穏やかに伸び伸びと生活している。また、地域の特色を生かした体験活動、「マイ・ニシキゴイプロジェクト（「自分の鯉」がいる学校）」「サシバのいる里山」「学校田での米づくり」「大豆・味噌づくり」「梅干しづくり」「藍染め体験」などを始め、福祉交流活動として、「大平台フェスティバル」「グループホーム訪問」「車椅子体験」「介助犬体験」、さらに、様々な人々との交流活動として、「県内外の小学校とのオンライン交流」「保育所交流」「特別支援学校交流」などにも積極的に取り組んでいる。

本研究は、2年目である。アンケートから児童の実態を見ると、研究当初は、「国語の学習が好き」「読書が好き」と答えた児童は約6割であった。傾向として、「好き」と答えた児童と国語に苦手意識をもつ児童の二極化が見られた。苦手意識の理由は、文章の読解や意味理解などの「読む力」や自分の考えを文章や言葉で書いたり話したりする「考える力」が十分に身に付いていないことが原因であると考えられる。また、語彙が未熟だったり、日本語の語句や言葉をあまり知らなかったりすることが原因で、友達とのコミュニケーションに戸惑う児童も見られる。

これらの実態を受けて、昨年度は、研究主題を「自分の思いを適切な言葉で表現できる子の育成」とし、ラーニングマウンテン(学習計画)の活用、語彙を豊かにする言語活動の在り方、日常的活動、読書指導の工夫について研究してきた。児童が言葉に着目して、進んで話したり、聞いたり、書いたり、読んだり、伝え合ったりすることで、語彙の量を増やし、語彙の質を高めながら言語感覚を養い、自分なりのものの見方や考え方を形成することをねらった。言語感覚の育成には、多様な場面での学習の積み重ねや継続的な読書が必要であると考え、他教科や教育活動全体と関連させたカリキュラム・マネジメントを工夫し、言語環境の整備を行った。成果としては、語彙量や読書量が増え、国語への学習意欲や読む力の向上が見られた。しかし、「物語を想像して読む力」を育むには、「文章を正確に読み取る力」を高めることが大前提であると考えを改め、今年度は、「音読指導」を重点に加え、一人一人の「読む力」「考える力」を高めることに焦点を当てた研究テーマを設定した。本研究においては、児童が、「国語が好き」「国語の学習が楽しい」「読書が好き」となることを主軸に、「言葉による見方・考え方を働かせること」を意識し、個に応じた丁寧な指導や学習計画、音読指導、言語活動の工夫に重点を置き、国語科の授業改善や日常的活動の工夫を研究していきたいと考えた。



米沢小学校の広いグラウンドと校舎

2 研究の概要

(1)研究目標

国語科の授業において、学習計画「ラーニングマウンテン」を作成し、言語活動や音読指導を工夫すれば、児童が主体的に学習し、一人一人の「正しく読み取る力」や「自分の考えを表現する力」が向上することを実践を通して明らかにする。

(2)研究仮説

単元のねらいや読みのめあてから、児童の考えを生かして学習計画（ラーニングマウンテン）を作成し、意欲を高める言語活動を工夫したり、効果的な音読指導を取り入れたりすれば、児童は、主体的に学習し、正しく読み解く力や自分の考えを表現する力を高めることができるであろう。

(3)研究内容

① 各研究部の研究内容

【理論研究部】

- ・研究主題、学習指導要領について
- ・実践モデルプログラムについて
- ・国語科の課題と授業改善について
- ・国語科の授業づくりについて
- ・ラーニングマウンテンについて
- ・教師モデル、SGカード、全文シートについて

【言語活動部】

- ・効果的な言語活動について
- ・音読指導の工夫について
- ・日常的活動の工夫について

【掲示統計部】

- ・実態アンケートの実施及び分析
- ・図書室貸出し利用調査及び通知
- ・掲示物、資料作成

② 授業実践による仮説の検証

③ 日常的活動の工夫

- ・語彙指導の工夫（語彙シート「言葉の宝箱」）
- ・掲示物（「話し方・聞き方のルール」等）
- ・日記指導（週末日記の継続）
- ・音読指導（音読カード、音読テスト）

- ・詩の音読（「音読チャレンジ（暗唱）」等）
- ・ICTの活用（検索、共有、言語活動、情報発信）

④ 読書活動の充実

- ・「読書通帳100冊貯金」・「ステータスカード」
- ・読み聞かせ（毎週金曜日）
- ・国語科の授業時、朝読書時の図書室利用
- ・学級文庫の入替、本の紹介コーナー設置

⑤ 他教科における指導の充実（学力向上を含む）

- ・ラーニングマウンテンの活用・音読指導
- ・話し合い活動・振り返りノート記述・コーチング

3 指導の実際

【第3学年『紙ひこうき、きみへ』教育出版】

(1)単元名

「登場人物の様子や行動、気持ちを想像し、人物紹介カードをつくろう」

(2)単元の目標

- 登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、場面の移り変わりと結び付けて具体的に想像することができる。

〔思考力、判断力、表現力等〕C(1)エ

- 文章を読んで感じたことや考えたことを共有し、一人一人の感じ方などに違いがあることに気付くことができる。

〔思考力、判断力、表現力等〕C(1)カ

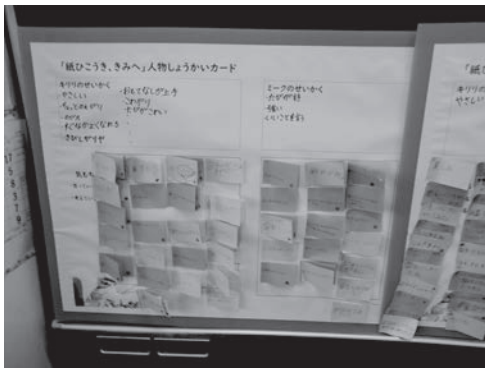
(3)児童の実態(9名)と学習形態

児童	語彙	読む力	考える力	学習の実態	個別支援
(例) A	◎	○	◎	消極的。自分の考えで学習に取り組める。	記述したものを個別に確認し、称賛する。
(例) B	○	△	○	積極的。考えが浅い。時間が掛かる。書くことは好き。	積極性を称賛し、必要に応じて助言する。
(例) C	◎	○	○	自分勝手に学習を進めたり、取り組めない時がある。	安心して活動できるよう、努力や工夫を称賛する。

上の表のように、学級全体の実態だけでなく、一人一人の学習の個性を分析し、それに有効なユニバーサルの支援を考え、授業づくりを行った。今回の学習形態は、3人×3グループで行い、自分達で進められるグループ、少しの支援で進められるグループ、常に支援が必要なグループに分けて学習を進めた。

(4)教師モデルと言語活動

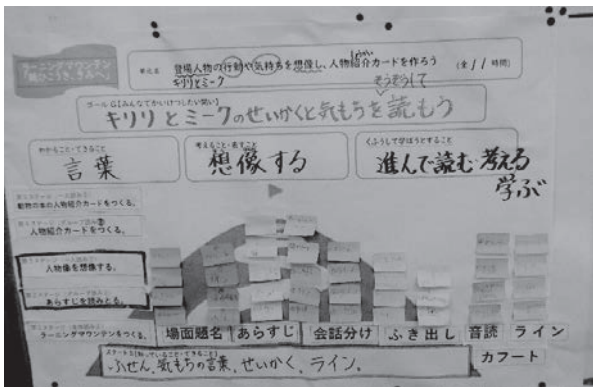
教師モデルは、2種類ある。授業づくりや指導案作成のための指導者用教師モデルと言語活動の手本として示す児童用教師モデルである。今回は、指導者用として、単元のゴールである「キリリとミークの人物紹介カード」を作成した。児童用として、既習単元の「白い花びら」で作成して提示した。学習のねらいや児童の実態をもとに活動を想定して作成するのだが、用紙の大きさ、項目やレイアウト、学習形態、学習方法、発問などにより活動が変わってくるので、教師モデルは教材研究に必要不可欠であることが明らかになった。今回は特に、叙述をそのまま書き抜くのではなく、想像した人物像を自分の言葉で書いた一人読み付箋紙を使って友達と共有することをねらって作成した。



教師モデルをもとに作成した「人物しょうかいカード」

(5)学習計画(ラーニングマウンテン)

ラーニングマウンテンも2種類ある。指導者用の学習計画と児童と作り上げる学習計画である。今回は、感想をもとに学習のゴールを決め、身に付けた力を確認し、ゴールに向かうための道筋である学習方法や順序を児童と相談しながら軌道修正して作成し、一人読みの場面で、一人一人が学習方法を選び、進めていった。



児童と作成したラーニングマウンテン

(6)音読指導

少人数を生かして、毎時間音読の時間を設け、評価と支援を個別に行うようにしている。物語文では、ナレーター、登場人物の役割音読、説明文では、形式段落ごとの交代音読を主に行っている。また、家庭学習の課題として、音読練習やTeamsでの音読録画を行い、意欲化を図っている。この単元では、一場面ごとに「キリリ」「ミーク」「ナレーター」の役割分担を決め、グループで音読練習を行った。

(7)指導計画

過程	時	主な学習活動
第一次	1	○教師モデル提示で学習の見通しをもつ。 ○SGカードで身に付けたい力を自覚する。 ○「動物の物語」の本を図書室から探し、おすすめコーナーに設置する。 ○『紙ひこうき、きみへ』の範読を聞き、感想をノートに書く。
	2	○全員感想プリントを読み、友達と共有して「読みのめあて」を立てる。 ○ラーニングマウンテン（学習計画）について話し合い、次時の自分の学習方法を決める。
第二次	3	○自分の方法を選び、全文シートに書き込む（一人読み）。 ・あらすじを書く。
	4	・音読する。
	5	・場面の題名を書く。
	6	・叙述ラインを引き、キリリとミークについて読み取ったことを付箋に書く。 ・挿絵に吹き出しを書く。 ○「Kahoot!」クイズで、読みを確認する。
第三次	7	○キリリとミークがどんな人物なのかを話し合い、比較しながらカードにまとめる（グループ読み）。
	8	
	9	○登場人物の変容について話し合う。 ○物語の続きを読み、題名について話し合う。
	10	○「動物の物語」の本の人物紹介カードを書く。
	11	○友達の人物紹介カードをもとに読書をする。 ○学習を振り返り、SGカードで身に付けた力を自覚する。

(8)SGカード(スタート・ゴールカード)

『紙ひこうき、きみへ』
SGカード
学習のスタート (6月 3日)

名前

学習のめあて	よくできる	できる	あまり	できない
① 気持ちやせいかくを表す「言葉」を考えたりさがしたりすることができる。			☒	
② 登場人物の様子や行動、気持ちをそうぞうすることができる。		☒		
③ 友だちと感そうや読みを「きょうゆう」することができる。		☒		
④ 進んで「人物しょうかいカード」を書いたり、物語の本を読書したりすることができる。			☒	

学習のゴール (6月 24日)

学習のめあて	よくできる	できる	あまり	できない
① 気持ちやせいかくを表す「言葉」を考えたりさがしたりすることができる。	☒			
② 登場人物の様子や行動、気持ちをそうぞうすることができる。		☒		
③ 友だちと感そうや読みを「きょうゆう」することができる。		☒		
④ 進んで「人物しょうかいカード」を書いたり、物語の本を読書したりすることができる。	☒			

国語に苦手意識をもつ児童Dの成長が見られるSGカード

児童が単元を通して、学習前に「どんな力を身に付けたいのか」、学習後に「どんな力が身に付いたのか」という成長を自覚する目的で活用している。単元の目標をもとに作成するので、指導者にとっても、ねらいに沿った授業づくりができるという利点がある。今回のSGカードでは、全体的に「①語彙」「②一人読み」「④読書」に成長の自覚が見られた。「③共有」が伸び悩んだのは、自分の読みを書いた付箋紙が多すぎてしまったことで、考えが整理できず、友達との話合いが進まなかったことが原因だと考えられる。SGカードは、児童が力の伸びを自覚し、それが自信となり、国語への苦手意識を払拭することができる。指導者の振り返りにも有効であり、継続することで有効性が高まるとも考える。

4 成果と課題

(1)ラーニングマウンテン

自分の学習のめあて、振り返り、足跡が可視化でき、学びを調整する手立てとして有効である。また、ゴールを明確に示すことで、児童の意欲が高まることも明らかになった。ラーニングマウンテンの作成においては、児童の意見を取り入れ、加筆修正することで主体的に取り組めることも分かった。今後、より活用していくためには、既習の学習経験や方法を取り入れ、生かし、積み上げていくことが大切である。実際、物語文の学習の際には、児童から「ラーニングマウンテンでやりたい。」と提案があり、『わすれられないおくりもの』『モチモチの木』『おにたのぼうし』でも活用した。児童は、自らPowerPointやカード式ポスター、紙芝居などを表現方法として選び、読み取る項目を自ら設定し、学習を進めた。一人でまとめる児童もいれば、友達と相談しながら進める児童もいた。Teamsを使うことで、互いの表現物を見ることが可能なので、共有もできた。一人一人に学習計画が存在し、学習を進めながら軌道修正し、新しい学習方法を考え出すなど自分の考えで学習を進めている意欲には驚かされた。これらのことから、ラーニングマウンテンの有効性が証明されたとと言える。

(2)言語活動と教師モデル提示

学校全体として、児童の実態や教材の特性に合わせて、右の表のような言語活動に取り組んできた。

児童は、意欲的に言語活動に取り組み、友達と一緒に活動する楽しさや作品づくりの楽しさ、物語を読む面白さなどを味わいながら、「読む力」「考える力」を高めることができた。指導者は、試行錯誤しながら教師モデルを作成し、教材研究を練り上げ、楽しく効果的な言語活動を設定することができた。また、ラーニングマウンテンと併せて教師モデルを作成することで児童の実態や学習のねらい、指導計画の見通しが立ち、指導案が作成しやすいことも明らかになった。

「読む力」「考える力」を高める主な言語活動例

低学年	・しりとり ・かるたあそび ・読み聞かせ ・紙芝居づくり ・気持ち曲線図『1年スイミー』 ・説明書づくり『2年きつねのおきやくさま』 ・音読劇『1年おおきなかぶ』『2年かさこじぞう』 ・かるたづくり『2年ないたあかおに』 ・ペープサート発表『1年スイミー』	・ことばさがし ・クイズ「カフト」 ・ブックトーク ・音読発表会
中学年	・続きの物語づくり ・並行読書『3年紙ひこうき、きみへ』 ・読書カードづくり『3年モチモチの木』 ・人物紹介カードづくり『3年紙ひこうき、きみへ』 ・本の帯、ポップづくり『4年ごんぎつね』『5年大造じいさんとガン』 ・新聞作り『3年わすれられないおくりもの』『3年おにたのぼうし』	・パンフレットづくり
高学年	・ポスター作り ・意見文 ・解説文『6年川とノリオ』（オンライン発表） ・朗読発表会『6年川とノリオ』	・読書発表会 ・感想文

(3)音読指導

今年度より、全学年、全教科で音読する場面を意識的に多く設け、学習問題や教科書の文章の一斉読みや追い読みなどに取り組んでいる。また、国語科では、説明文の音読に重点を置き、「正しくはっきりとすらすら読む」ことを目標に、少人数を生かして、一人一人の音読の時間を確保し、具体的に評価し、意欲化を図っている。そうすることで音読練習への目的意識が高まり、家庭学習に熱心に取り組む児童も増えてきた。Teamsでの音読録画もAIによる評価があることで、意欲化が図れていると感じる。

「音読チャレンジ」は、毎月、児童の興味に合わせて詩を選び、音読プリントとして配付するとともに、図書室前に拡大掲示している。暗唱が合格すると校長から賞状がもらえるという取組を行っているが、児童は、5月「じゅげむ」、6月「おれはかまきり」の暗唱練習に夢中になって取り組んでいる姿が多く見られた。

(4) ICT活用

本校では、学年や児童の実態に合わせて、必要に応じてICTを使うようにしている。主なものとして、以下に例示するが、タブレット操作や文字表現の工夫に時間をかけないことが留意点と考えている。

- ① Teamsでの家庭学習「音読録画」を
- ② PowerPointやWordで読み取ったことのまとめ
- ③ Wordでの詩、作文、創作文、日記
- ④ Kahoot!での読み取りクイズ
- ⑤ 言葉や語彙などの検索
- ⑥ PowerPointでの発表やオンライン交流

(5) 読書指導

「読書通帳100冊貯金」や「ステータスカード」「読み聞かせ」「図書室利用」等の取組の効果で、年々全校の読書量は増加している。

図書室の本の貸出し冊数(1人1か月あたり)		
R5 年度	R6 年度	R7 年度(～7月)
2.7 冊	3.7 冊	5.9 冊

(6) 日記指導

日記指導は、発表する機会を設けたり、良い部分に朱線や花丸を付けたり、シールを貼ったりなど評価やコメントを工夫することで、書く意欲や技能を高めることができた。具体的には、日記を発表した後に、クイズを出し合ったり、友達の日記のどこがどのように良かったのかを伝え合ったりすることで、もっと工夫して書きたいという思いが高まり、さらには、友達の日記をよく聞いて考える力の高まりも感じられた。書き方の指導(「しみはきお」)や書き出しの指導(いつどこでだれがどうした)、まとめ方(思ったこと)についても具体的に指導している。

(7) アンケートから

国語アンケート「〇〇は好きですか」

項 目	R6. 4	R6. 12	R7. 4
国 語	62%	81% ↑	60% ↓
読 書	64%	74% ↑	82% ↑
音 読	62%	66% ↑	71% ↑
表 現	53%	75% ↑	70% ↓
話合い	66%	79% ↑	68% ↓

令和6年度4月と12月を比較して、どの項目も「好き」の割合が上昇した。その理由として、「表現活動が楽しかった」44%、「ラーニングマウンテンで進め

るのが楽しかった」19%と児童が答えているので、研究の重点である「言語活動」と「学習計画」の効果が表れたと言える。反面、令和7年度の結果が下降している主な理由は、新年度始めの4月は、まだ授業でラーニングマウンテンや言語活動を実施していないことが原因の一つと考えられる。「音読」は、今年度重点に加えたことで上昇が見られ、読書に関しても、昨年度に引き続き、10冊読むごとに先生方からもらえる「ステータスカード」や「読書通帳100冊貯金」の取組などを継続してきたことで上昇したと考えられる。今後、児童が「読めた」「できた」という自信をもって国語科学習に取り組み、「国語が好き」「国語が楽しい」と思えるような国語科指導を目指していきたい。

5 来年度に向けて

研究協議や講師からのご指導及び校内研修により、次のことが明らかになったので、来年度に向けて、さらに研究、検証していきたい。

- (1) 「読む力」を「一人で初発の文を読み取る力」と捉え、「叙述や言葉に着目して丁寧に読む力」を身に付けさせるとともに、読書を通して、「読む体力」を身に付けさせることが大切だということ
 - (2) 国語科の学習の本質は、どの学年でも同じであるので、「ことば」に注目して、段階的に力を伸ばすことを意識した学習を繰り返すこと
 - (3) 内容理解だけで終わらせず、アウトプットを意識し、楽しく「読む力」「考える力」が伸びる効果的な言語活動を設定するとともに、必要に応じてICTを活用していくこと
 - (4) 「共有」は、「読み」は個人の自由なので、伝え合いを基本とするが、一人読み→グループ・全体読み(共有)→一人読みという学習形態をとることで、一人読みを友達や全体で共有することにより読書を広げ、再度一人読みをすることにより読みが深まるということを意識して指導すること
 - (5) ラーニングマウンテンの効果は明らかであり、総合的な学習の時間など他教科でも活用し、今後も継続することで、ゴール設定や学習計画の立て方などの力を磨き、効果的に活用していくこと
- (執筆責任者 教諭 浜田 恵子)

定時制高校から提案する「総合的な探究の時間」のあり方

～「健康まちづくりプロジェクト」の実践をたよりに～

千葉県立佐倉南高等学校
教諭 伊藤 晃一

1 はじめに

千葉県立佐倉南高等学校は令和4年度より新たにつくられた三部制の定時制の課程の高等学校である。一般的に定時制の課程の高等学校（以下、定時制高校）は、多様な生徒がそれぞれの経験や生活リズムを背景として学ぶ場である。特に夕方から夜にかけて学ぶ「夜間部」では、学習の時間そのものが「夜」という特有の環境に組み込まれており、生徒たちはその中で、自らや社会を独自の感覚によって捉えている。

本稿では、本校定時制夜間部の現4年次生が、「総合的な探究の時間」において2年半かけて取り組んできた「健康まちづくりプロジェクト」を事例に、定時制高校の特質を踏まえた「総合的な探究の時間」の実践を考察する。そしてそのことを通して、定時制高校からの「総合的な探究の時間」のあり方を提言する。

2 主題設定の理由

2-1 研究の背景

定時制高校に在籍する生徒の中には、不規則な生活リズム、家庭や経済状況の課題、対人関係の困難など、健康的な生活を阻害する要因を抱えている者が一定数存在する。本校夜間部では、これらに加えて働きながら学ぶ生徒がクラスの半数以上を占めており、単に「規則正しい生活」を志向させるだけでは、生徒自身の主体的な健康観の形成には至りにくいという現状があった。さらに、夜間に学ぶという特質は、生徒の社会との接続や地域での自己肯定感の醸成にも影響を与えている。人と異なる環境で働き、学ぶことは、時に孤独感や疎外感をもたらし、「自分は人と違う」という意識を強める場合がある。

こうした現状を踏まえ、定時制高校では、生徒の素朴な思いを受け止めつつ、学びを通して課題をはぐしていく実践が求められる。現行の学習指導要領では、「総合的な探究の時間」の設定や「主体的・対話的で深い学び」の要請など、「探究」が重要な概念として

位置付けられているが、定時制高校の生徒の中には、人や社会と関わることに苦手意識をもつ者も少なくなく、これらの理念を実現するためには特別な工夫が必要である。

こうした課題認識のもと、本校定時制夜間部の現4年次生は2年次であった2023年度より、「健康」をテーマとした探究的な活動を開始した。本取り組みは、地域との協働を重視し、一般社団法人 Spice（以下、Spice）と連携して進められた。さらに、佐倉とその周辺地域で薬の卸業を営む岩渕薬品株式会社（以下、岩渕薬品）、佐倉市役所関係者、四街道市在住のパラリンピアンで千葉県教育委員会の委員である花岡伸和氏（以下、花岡氏）ら多様な協働者を巻き込み、「学校前の夜道を、誰もが歩きたくなる・歩きやすい道にする」という具体的な目標を設定した。

2-2 目的

本研究の目的は、定時制高校における「総合的な探究の時間」を、生徒の生活課題や地域社会との接続を踏まえた実践的な学びとして再構築する可能性を示すことである。

3 研究仮説

本研究では次の仮説を立てた。

- i. 定時制高校の生徒が主体的に地域課題解決に関与する探究活動は、自身の生活や健康への意識変容を促す。
- ii. 夜間という学習環境を前提とした地域協働型プロジェクトは、生徒のアイデンティティ形成や社会的自立に寄与する。
- iii. 具体的な社会実装を目標とした探究は、生徒にとって「学びの意味」を実感できる機会となる。

4 実践の実際

4-1 プロジェクトの立ち上げの背景

2023 年度、「総合的な探究の時間」を活用し、匿名アンケートで生徒の健康意識を調査した結果、半数以上が「自分は健康ではない」と回答した。この結果が「健康とは何か」という問いを、夜間部生自らの立場で考えさせる契機となった。自らのことを必ずしも健康とは思わ（え）ない生徒たちが考える、望ましい健康のあり方は、定時制高校生のみならず、他の者にとっても重要な健康観につながる可能性がある。それゆえ、定時制の生徒だからこそ考えられる「健康」のあり方を模索する必然性ができた。そこで、佐倉とその周辺の大切な学びの場としての佐倉南高校の地域性を念頭に、外部パートナーと連携した探究活動として「健康まちづくりプロジェクト」が立ち上がった。

4-2 協働的な学びの展開

(1) 外部との連携

本研究で取り上げる実践「健康まちづくりプロジェクト」は、地域企業・行政・学校とそれらをつなぐ Spice との協働を基盤にした探究活動として展開された。特に Spice は、教員の願いや生徒たちの実態を丁寧に把握した上で、どの企業や機関と連携するかについての調整役を担い、関係各所との連絡・調整を実施した。このことは、独自性のあるアイデアの創出に寄与したことはもとより、学校側の事務的な負担の軽減にもつながった。

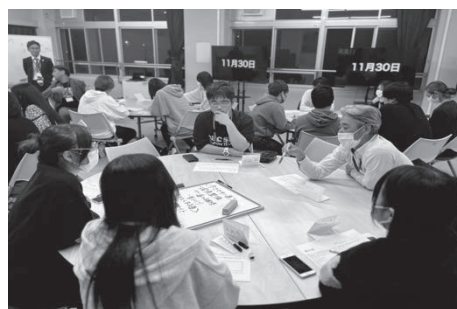
(2) アイデア創出のブレインストーミング

Spice の仲介により、2023 年夏、岩渕薬品の岩渕琢磨社長や社員、Spice スタッフ、本校夜間部教員が、生徒たちの「健康」課題を出発点に、どのような地域貢献型プロジェクトが可能かを検討した。この場で共有されたのは、「健康を、単に生活習慣の改善ではなく、地域環境のあり方とも不可分なものとして捉える」という視点であった。

初回の授業において岩渕社長は、薬品卸業としての企業理念と絡めつつ「地域全体の健康づくりへの貢献」という企業の思いを語り、「健康的なまちとは？」をテーマに講話した。生徒からは「仲間がいない中で運動を始めるにはどうしたらいいか」というような、自分ごととして捉えて聞いているからこそ出せる率直な問いが出された。

その後のブレインストーミングは、岩渕薬品の社員の方々と行った。普段人と関わることを避けがちな生

徒も社員の方々の温かい雰囲気に触れ、自ら意見を出す様子が見られた。ブレインストーミングの過程では、「食」「運動」「休養」など健康の一般的要素に加え、「夜間部という学習環境にそくした健康づくり」という独自の観点が浮かび上がった。最終的な結果として、「学校前の夜道を、誰もが歩きたくなる・歩きやすい道にする」という具体的な探究テーマが形成された。この合意によって、プロジェクトは抽象的な健康論議にとどまらず、地域資源を活用した実践的な社会デザインへと発展するための基盤を整えることができた。



岩渕薬品の社員の方とのブレインストーミング

(3) キーワードについての考察の深め方

「歩く」というキーワードが見出されたところで、「歩く」ことについて丁寧に考察すべきという考えのもと、四街道市在住で、車椅子利用者である花岡氏との協働的な探究が始まった。

花岡氏は、実際に車椅子で JR 佐倉駅から学校までの道のりを移動し、その体験を踏まえて夜道の課題やよさを生徒たちに具体的に語った。生徒たちは、車椅子利用者の視点から見た歩道の段差や傾斜の影響を聞き、とにかく二足歩行を想像しがちであった「歩く」ということについて、これまで意識してこなかった課題に直面することとなった。このワークショップを通して、「健康的な夜道」とは単なる運動促進の場ではなく、多様な人々にとって安心・快適な移動空間であるべきだという認識が共有された。



花岡氏の話聞く生徒たち

4-3 社会実装への取り組み

(1) 行政へのプレゼンテーション

先に述べたように、本プロジェクトは、抽象的な健康論議にとどまらず、地域資源を活用した実践的な社会デザインの実装を目的としている。

2024年度、生徒たちは佐倉市役所魅力推進課の職員2名を学校に招き、プロジェクトの趣旨と具体案を発表した。プレゼンテーションは、生徒自身が分担し作成したスライドを用い、「夜間部生だからこそ提案できる夜道デザイン」という視点を軸に展開された。生徒からは、夜道を単に明るくするのではなく「夜は暗いからいい」という視点を活かし、車のライトで照らされると健康的な歩幅の足跡が浮かび上がる歩道をつくるという独創的な案が提案された。車のライトで照らすと浮かび上がる健康的な歩幅の足跡というアイデアは、視覚的な効果と運動促進を両立するものである。

質疑応答の場では、行政職員から「どのようにすればアイデアが行政の中で通るのか」といったことが話され、このプレゼンテーションは単なる「子どものアイデアの披露」にとどまらず、行政とともに実現可能性を検討する協働的議論として機能したことがうかがえた。さらに、職員からは「市としても地域と連携しながら前向きに検討したい」とのコメントがあり、生徒たちは自身の探究が社会実装へ近づく手応えを得た。



プレゼンテーションの様子

(2) クラウドファンディング

具体的に道をデザインするために選ばれたのは、日中の光を蓄光し、夜発光すると共に、車のライトなどの光に反射する蓄光・反射パネル「ナイトコンシェルジュハイブリッド」（株式会社humorous）である。このパネルは、1枚あたり約4,000円であり、当初の計画全体では50枚程度必要であった。そこで、Spiceを主催者としてクラウドファンディングを実施し、プロジェクトの理念を広く発信することとした。

校内では教室背面に進捗状況を確認できる掲示物を設置し、集まった金額と支援者数を毎日更新した。これにより、資金が少しずつ増える様子が可視化され、生徒たちは自分たちの取り組みが社会の関心を集めていることを実感した。中には「見知らぬ人が自分たちの案を応援してくれている」というようなことを話している生徒もあり、地域外からの支援が生徒の自己肯定感や社会的なつながりについての意識の向上につながったことがうかがえた。

最終的に、支援額は、当初目標としていた金額を大きく上回り、オンライン支援と手渡しの寄付を合わせて100万円を超える資金が集まった。この成功によって、100枚程度の「ナイトコンシェルジュハイブリッド」を購入することができるようになった。また、この取り組みは、メディアによる取材を通じて地域内外に広く共有された。資金調達の過程そのものが、「自分たちの学びが社会に価値を持つ」という実感を伴う探究活動となった。

(3) 道のデザイン

生徒たちは250メートルの学校前の一本道を50メートルごとに区切り、各区間に異なる趣向の足跡デザインを配置するという最終案の具体化に取り組んだ。この過程では、健康的な歩幅の提示、蓄光・反射パネルの効果的配置、車椅子利用者の視点の反映といった複数の要件を満たす必要があり、単なるアイデア出しから一歩進んだ「具体的な設計判断」を迫られた。

特に最終区間において、遊び心をもったランダムな足跡デザインをどう配置するかが大きな議論の焦点となった。生徒たちはこれまでのブレインストーミング等で培った多様なアイデアを持ち寄ったが、それらを一つの案として収束させることの難しさを実感することとなった。意見が割れた場面では、教員が意図的に結論を出さず、生徒同士での合意形成を促した。その結果、生徒たちは相互の意図を聴き取り、取捨選択するプロセスを重ねる中で、「プロジェクトにおける意思決定の重み」を体験的に理解していった。

こうした過程を通じて、生徒たちは(1)デザインには利用者の多様性を考慮する視点が不可欠であること、(2)意見の多様性を尊重しながら合意形成を行うための対話スキルの重要性、(3)構想を具体化する段階では現実的な制約条件を踏まえた判断が求められることを学んだ。

(4) 道づくりとお披露目会

2025年4月より、学校前の一本道に蓄光・反射パネルを貼り付け、夜道に施工する作業に取り組んだ。放課後の21:00～21:30の時間を連日利用し、生徒たちとSpice と一部のクラウドファンディング支援者で素材を専用の両面テープを用いて道に貼った。

2025年5月22日、本プロジェクトの集大成として、蓄光パネルを設置した夜道の「お披露目会」が佐倉南高校グラウンドで開催された。会には、生徒・教職員・クラウドファンディング支援者（岩渕薬品の社員の方々をはじめとする地元企業の方々や地域の方々）、佐倉市長をはじめとする行政関係者が参加し、学校と地域が一体となった成果共有の場となった。

イベントは、生徒主導で行われた準備運動から開始された。生徒が参加者に向けて「ここが痛い人は運動が足りていない人です」などとユーモアを交えた声かけを行い、大人と生徒が共に身体を動かす和やかな雰囲気が醸成された。次に、本校の保健体育科教員によるウォーキング指導のもと、グラウンドでの歩行体験が行われ、参加者は普段意識していなかった歩き方の改善点に気づきを得る機会となった。

続いて、生徒がプロジェクトの概要および蓄光パネル設置のコンセプトを来場者に説明した。生徒は「緊張する」と語りながらも、自らの言葉でプロジェクトの意図を発表し、その主体性が高く評価された。その後、実際につくられた歩道が披露され、生徒の案内により参加者が歩行を体験した。「身長160cm向けの健康的な歩幅区間」や「恐竜のように歩き恥を捨てるゾーン」など、遊び心を取り入れた設計は好評を得た。

イベント終盤には、佐倉市長や地元企業の方々からの挨拶があり、プロジェクトの意義が地域社会においても認められたことが確認された。また、岩渕薬品の社員および岩渕社長（オンライン参加）からもコメントが寄せられ、企業・行政・学校が連携して取り組んだ意義が改めて強調された。最後に、担任教員がこれまでの取り組みを総括し、定時制夜間部の生徒が主体的に企画を進め困難を乗り越えた経験の価値を語った。

本お披露目会は、単なる成果発表にとどまらず、生徒が自らの学びを社会に伝え、地域住民や関係者から承認を得る場として機能した。さらに、プロジェクトの実施過程で培われた企画立案力・協働力・表現力が可視化され、学びが社会的意義を持つ実践であることが示された。



道づくりの様子

5 考察

本研究の目的は、定時制高校における「総合的な探究の時間」を、生徒の生活課題や地域社会との接続を踏まえた実践的な学びとして再構築する可能性を示すことであった。以下では、研究仮説との対応を踏まえ、実践から得られた知見を考察する。

5-1 地域協働型探究が促す健康観の再定義

第一の仮説である「定時制高校の生徒が主体的に地域課題解決に関与する探究活動は、自身の生活や健康への意識変容を促す」について、本プロジェクトはその有効性を示した。匿名アンケートで半数以上の生徒が「自分は健康ではない」と回答していたことを契機として、生徒たちは「健康とは何か」という抽象的な問いを自らの生活実感から再定義する試みに取り組んだ。岩渕薬品や花岡氏との協働を通じて、健康を単なる生活習慣の改善ではなく、地域環境や社会とのつながりの中で捉える視点が醸成された。このことは、生徒の健康観を「受動的な指導対象としての自己」から「能動的に健康をつくる主体」へと転換する契機となった。

5-2 夜間部ならではの学習環境が生み出すアイデンティティ形成

第二の仮説である「夜間という学習環境を前提とした地域協働型プロジェクトは、生徒のアイデンティティ形成や社会的自立に寄与する」についても、本実践から肯定的な知見が得られた。夜間という環境はしばしば「孤独感」や「疎外感」といった負のニュアンスと結びつきがちであるが、本プロジェクトでは「夜は暗いからいい」という肯定的な視点が生徒から提案され、道のデザインコンセプトに取り入れられた。このことは、夜間部ならではの学習経験を、自己肯定感や

誇りにつながる価値へと再構築した点で重要である。

5-3 社会実装を目指す探究がもたらす学びの意味づけ

第三の仮説である「具体的な社会実装を目標とした探究は、生徒にとって『学びの意味』を実感できる機会となる」については、行政へのプレゼンテーションやクラウドファンディングの過程、お披露目会の実施によって裏づけられた。アイデアが地域行政や企業と共有され、支援者からのクラウドファンディングという具体的承認を得ることで、生徒は自らの学びが社会的意義を持つことを実感した。さらに、お披露目会では企業・行政・地域住民の前で成果を発表し、承認を受けることで、学びが単なる学校内活動にとどまらず社会的に開かれた経験となった。

以上より、生活課題を出発点とし、地域社会との協働を通じて具体的な社会実装を目指す探究活動は、定時制高校生にとって自己理解と社会的自立を促す有効な学びになることが示唆された。

6 まとめ

本研究は、千葉県立佐倉南高等学校定時制夜間部における「健康まちづくりプロジェクト」の実践を通して、定時制高校から提案する「総合的な探究の時間」のあり方を検討するものである。まとめとして、本実践を踏まえ、提案する意義を三点に整理して述べる。

(1) 個人の生活課題を出発点とした探究

夜間部生が抱える「自分は健康ではない」という実感を出発点に、「健康とは何か」という問いを自らの言葉で再定義し、学びを個々の生活と接続させた。とかく「地域の課題」を解決するというような大きな課題設定がなされがちな探究活動であるが、個人が抱える問題を考えることが、実は社会のあり方とつながっていることもある。本実践はそのことを示唆している。

(2) 夜という時間を活かした地域協働

夜間に学ぶ生徒ならではの視点を基礎に据えた探究活動を行なった。具体的には、「夜は暗いからいい」という視点を念頭に、蓄光・反射パネルによる夜道デザインを構想・実装した。これは、夜という時間を単なる制約ではなく価値ある学びの資源として活かした取り組みであり、定時制高校生だからこそ提案できる発想である。翻ってこの発想は、定時制高校によらず、他の学校においても応用可能であり、同様の視点で探

究活動を行うことができる。本実践は、その学校や学校で行われている授業が持つ要素を契機に、他にはないユニークさをもって探究活動を発想する方法を提示した。

(3) 社会実装による学びの意味づけ

行政へのプレゼンテーション、クラウドファンディング、お披露目会を経て、学びが実際のまちづくりとして形になり、社会的承認を受ける経験となった。本稿では詳しく述べていないが、この取り組みは、テレビや新聞といったメディアにも取り上げられた。それらの経験もまた生徒たちが取り組んできたことが社会的に意味あることであるということを生徒たち自身が気づく契機となった²。

最後に全体を通してまとめる。

本実践は、定時制高校の「総合的な探究の時間」において、生徒の生活課題と地域社会、そして学びの場としての「夜」という時間を結びつけることで、新たな価値を創出できることを示した。

また、この取り組みは「夜間部だからこそできる探究」として、定時制高校が果たしうる独自の役割を提示するものであると同時に、全日制高校や他校種の探究活動にも応用可能な視点を提供するものである。

今後は、こうした視点を踏まえ、継続可能なカリキュラム化や他校との共有を通じて、定時制高校から発信する新しい探究のモデルを構築していく。

¹ 「定時制高校生が挑戦！ 夜の通学路に光を灯そう。楽しく歩いて健康になる夜道をつくる」CANPFIRE サイト内 <https://camp-fire.jp/projects/798305/view> (2025年8月4日最終確認)」

² 千葉テレビ (2025年5月28日・29日)・千葉日報 (2025年7月30日)・読売新聞 (2025年6月22日)・教育新聞 (2024年11月2日・2025年6月19日)に取り上げられた。

参考文献

文部科学省 (2018)『高等学校学習指導要領 (平成30年告示) 解説 総合的な探究の時間編』平成30年7月

自らの学びを自己決定する学習者の育成

～主幹教諭の視点からの学校組織運営～

流山市立小山小学校

主幹教諭 武藤 光亮

I はじめに

本校は、2005年（平成17年）8月24日の首都圏新都市鉄道つくばエクスプレスの開業以降、児童数が急拡大している。令和7年度6月時点では、1年生215名（特別支援学級在籍児童含む、以下同様）、2年生249名、3年生269名、4年生305名、5年生280名、6年生303名、全校児童数1621名と、非常に大所帯の学校である。その分教職員も多く、102名が在籍している。義務教育下における公立の小学校では全国一の児童数を誇る学校である。

II 主題設定の理由

人工知能（AI）、ビッグデータ等の技術が高度化し、あらゆる産業や社会生活に取り入れられる時代（Society 5.0）が到来しつつある。これからも社会の在り方が劇的に変わることが予想され、その変化が加速度を増し、複雑で予測困難な時代となっている。これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けることができるようにするためには、「学びの過程」を一人一人の個性に応じた多様で質の高い学びを引き出す方向で、質的に改善していくことが不可欠だといえる。

令和3年1月の中央教育審議会答申『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～では、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」の理念が提唱された。これは、現行学習指導要領でも重要性が示されている「個に応じた指導」を学習者の視点で捉えた「個別最適な学び」の実現を図るものであるといえる。

また、PISA2022の結果からは、「科学リテラシー37か国中1位」「数学的リテラシー37か国中1位」「読解力37か国中1位」と、日本の学力は世界トップの水準であることがわかった。しかしながら、「自律学習と自己効力感」という指標においては、OECD加盟国37か国中34位という結果であった。これは、現行学習指導要領に示されている「主体的に学習に取り組む態度」

における「粘り強さ」と「自己調整」という2つの側面に分けて捉えることができ、子どもが学習者として自律していくことが必要だと言い換えることができる。

本校の学校教育目標は「すべての子どもを『幸せ』にする学校～今（現在）もこれから（未来）も～」である。その実現のための学校経営方針の1つとして、「教育の『本質』を追求し、子どもにとっての『最善』を実現する。」が掲げられている。その行動指針では、「個別最適な学び」や「個に応じた支援」が重点項目としてあげられている。

これらを踏まえ、本校では自由進度型学習や複線化型授業に取り組み、授業改善の一助とすることとした。

また、本校は大規模校であるため、コロナ禍の影響により、多くの教育活動が制限されていた。2023年から新型コロナウイルス感染症は「5類感染症」に変更されたものの、その歪みが残っており、大規模校であるが故に教育活動が本来の形に戻りきれていない実情があった。さらに、教職員数が多いことにより、学年内で活動を完結させようとするあまり、他学年の教職員との関わりが希薄であったり、働き方も閉鎖的な側面があったりした。

授業改善を推進するにあたり、先に述べた小山小学校の学校組織としての課題について、主幹教諭の立場から改善を促すことで、より教育効果が得られると考え、本主題を設定した。

III 目的

本研究の目的は二点である。

- ① 本校教育課程における「集団最適」ではなく「個の最適」を追求する学びのための授業改善の推進から得られる教育効果の検証
- ② 本校の課題を踏まえ、主幹教諭の立場からの働き方改革の視点（負担「感」の軽減）を含めた学校組織運営から得られる教育効果の検証

本論文では、学校教育目標である「すべての子どもを『幸せ』にする学校～今（現在）もこれから（未来）も～」を実現するべく、自らの学びを自己決定する学

習者の育成を目指した取り組みについて報告する。

IV 研究の実際

1. 教育課程の見直し

1) 日課表の変更

令和6年度までの日課表では、下校時刻が5校時14時50分、6校時15時30分であった。なお、退勤時刻は16時35分である。また、朝の会後にモジュール活動（15分間×3日間＝1コマ）を実施していた。しかし、朝の会の延長などにより、実際は学習を進めていない学級も多く、モジュール活動としての役割を果たせていない実情があった。さらに、校舎開放時刻7時40分に対し、教職員の出勤時刻が8時5分と、場合によっては30分近くの時間を教室に児童のみで過ごすという状況が生まれていた。

それらを踏まえ、令和7年度より日課表を変更した。（資料1）主な変更点は以下のとおりである。

- 下校時刻：5校時 14時10分
：6校時 15時00分
：水・金曜日5校時 14時00分

○朝活動の時間を設定

- ・モジュール活動を廃止し、1コマ増やした。
- ・朝の会や朝学習ができる環境を整備。

○校舎開放時刻：7時50分

下校時刻を早めたことにより、教職員の放課後の業務時間を確保することができた。職員会議等、校内にはさまざまな会議があるため、6校時日課の日に設定せざるを得ない場合があるものの、会議終了後も退勤時刻までは多少の余白を生むことができている。中でも、学級事務、教材研究、教材・教具作成の時間を多く確保することができた。こうした余白は、児童のために時間をかけることが多くなることにつながり、総じて授業改善のための一助となっている。

また、機能させきれていなかったモジュール活動を廃止することで授業時数を確保でき、45分1コマをしっかり学習の時間に充てることができた。また、今年度より自由進度型学習の推進にも着手している。児童が自分で学習する時間を確実に確保することで、自ら学びを調整する機会を創り出すことができている。

さらに、校舎開放時刻を遅らせ、教職員の目の届かない時間帯を短く設定することで、生徒指導トラブルや提出物の煩雑さ等、未然に防止することができている。

資料1 小山小時間割表

校舎開放 7:50 時間割					
時間	月	火	水	木	金
8:10 ~ 8:25	朝活動				
1	1	2	3	4	5
8:25 ~ 9:10	6	7	8	9	10
9:15 ~ 10:00	フレッシュタイム				
10:00 ~ 10:15	11	12	13	14	15
10:20 ~ 11:05	16	17	18	19	20
11:10 ~ 11:55	給食				
11:55 ~ 12:40	給食				
12:40 ~ 12:55	ロング2.4年	ロング1.3年	昼休み	ロング5.6年	昼休み
12:55 ~ 13:10	どうじ	どうじ	5分どうじ	どうじ	5分どうじ
13:15 ~ 14:00	5 1年下校13:30 2年下校14:10	22 1~2年 下校14:10	23 13:05~13:50 下校14:00	24 1~2年 下校14:10	25 13:05~13:50 下校14:00
14:05 ~ 14:50	6 3~6年 下校15:00	26 3~6年 下校15:00	27 3~6年 下校15:00	28 4~6年 下校15:00	4~6年クラブ 14:10~15:10 5~6年専攻 14:10~14:55

2) 学年教職員のプラスワン配置

学校長の教育方針により、令和7年度より学級編制の弾力的運用や増置・加配教員を活用して、各学年の担任数に対し、教職員を一人追加した配置を行っている。配置の実際については以下のとおりである。

表1 学年教職員のプラスワン配置

学年	学級数	担任数	プラスワン教職員の役割
1	6	6	副担任
2	7	7	副担任
3	7	7	学年主任
4	8	8	学年主任
5	8	8	学年主任
6	8	8	学年主任

ここでは、特に3～6年生の学年主任に対し、学年全児童の担任として、思いを伝える場を設定したり、その指導力を満遍なく行き渡らせる（児童・教職員）ための場の設定をしたりすることを目的として、次の7点について、主幹教諭の立場から業務の提案を行った。

①曜日ごとに学級またはペア学級に入る。

→曜日を固定せず、週ごとに入る学級を変更。

②学年集会、フロア毎のミニ学年集会の定期開催。

③朝の会、帰りの会等に学年主任の話を設ける。

④学年主任通信。

⑤生徒指導事案の対応。

⑥自由進度学習、習熟度学習等、実態に応じた柔軟な学習形態の推進。

⑦1コマ以上の専科教科の担当。

これにより、特に複数の教職員の目で児童をみることができ、より深い児童理解ときめ細やかな指導を行うことができている。また、生徒指導事案が起きた際にも、早期発見・早期対応を可能とした。学年主任と

学級担任等、すぐに複数で対応できる体制を整備することにもつながっており、早期解決の一助である。

さらに、若年層教職員に対する人材育成の側面も担っている。前述のとおり、生徒指導事案では、学年主任のサポートにより、事実確認のための「聞き取り」スキルは向上している。その他にも、授業展開の事前・本時・事後の指導助言をリアルタイムで行うことができ、若年層教職員が必要なときに必要なことを相談しやすい環境を設定することができた。

3) 学びを自己決定させる学習形態の推進

研究主任と連携しつつ、個別最適な学びに対応するべく、本校として新たな学習スタイル（以下〔1〕〔2〕参照）の促進を図った。

（1）自由進度型学習形態

子どもが自分のペースで学習を行う学習形態のことである。一単元または一単位時間ごとに何に取り組むかということを学習者が設定・計画したりして、学習目標を達成するために自分のペースで学んでいく学習のことを指す。

（2）複線化型授業形態

一単位時間の中で、学び方を自分で自己決定する学習形態のことである。例えば、学ぶ空間（教室前方、教室窓際）、学ぶツール（教科書、タブレット端末、動画教材、思考ツール）、人（一人で学ぶのか、複数でだと学ぶのか）など、自分で学びの環境を自己調整する学習のことを指す。

その推進のための具体的な取り組みを次に述べる。

（ア）オープンスペースを含めた教室の活用法提案

本校の校舎は、オープンスペース型のため、廊下側の教室の壁がない造りである。また、テーブルを置けるようなフリースペースもある。広いエリアを教室から見渡すことができるような設計となっている。そのため、一人で学習を進めたい子ども、ペアやトリオを組んで、自分達で学習を進めたい子ども、教室のような広い空間でない小スペースで集中して取り組みたい子どもなどが自分で学びの環境を自己決定できるよう、オープンスペースの活用について提案を行った。

（イ）研修会等の設定

先に述べた（1）自由進度型学習、（2）複線化型授業について、本校においては実践例が少なく、知らない教職員も多くいた。そのため、その学習形態に関する先進校に視察に行き、情報共有を行った。さらに、自由進度型学習や複線化型授業のような子どもに学びを委ねる学習形態に長けている講師を招聘し、研修会

及び相談会を設定した。研究主任と副研究主任に自由進度型学習の授業を展開してもらい、それぞれの教職員がその実際を知ることのできる環境を設定した。

さらに、研究主任と連携し、自由進度型学習の促進を図るため、一教職員につき一展開（参観なし）、はじめての自由進度型学習を実践し、負担感を抱かせない程度の簡単な成果と課題を提出するよう提案した。

（ウ）学び方の系統性の方向性提示

（イ）で前述したとおり、自由進度型学習や複線化型授業において、本校ではあまり馴染みがなかったことから、各学年で「何をどの程度」進めればよいのか不透明であった。

したがって、主幹教諭として本校児童の到達度を示すため、学び方の系統性（主に3～6年）の素案を提案した。その後、研究推進委員会で練り上げることで、より児童の実態に寄り添ったものへと修正をかけた。表2は、素案として提示した学び方の系統性である。

（エ）つながる授業ボードの提案

いつでも気軽に自由進度型学習や複線化型授業に関する学習形態を参観できるように、前述した「はじめての自由進度型学習」の実践日をボード上に記載することにより可視化した。

表2 小山小学校学び方の系統性 素案
<6年>

空間：	学級横断型学習指導、オープンスペースの活用、 個人・ペア・トリオ学習の自己決定、席順廃止
算数：	学びの手引きに沿った中で自分なりのめあて 毎時間キーワードをカード化 ワンペーパーポートフォリオ型のふり返し
社会：	グループまたは個人で疑問を出す。 疑問に対し、学習順序を自己決定して調べ学習 新聞やポスター等成果物（デジタル）

<5年>

空間：	学級横断型学習指導、オープンスペースの活用、 個人・ペア・トリオ学習の自己決定、席順廃止
算数：	学びの手引きと与えられためあて 毎時間キーワードをカード化 ワンペーパーポートフォリオ型のふり返し
社会：	グループまたは個人で疑問を出す。 疑問に対し、学習順序を自己決定して調べ学習 新聞やポスター等成果物（デジタル）

< 4年 >

空間：学級横断型学習指導、個人・ペア・トリオ学習の自己決定、席順廃止

算数：学びの手引きと与えられたためあて

一斉授業のときにキーワードをカード化
ワンペーパーポートフォリオ型のふり返し

社会：児童が抱いた疑問から、学級で単元を貫く学習問題を立てる。

与えられた一単位時間ごとの学習問題に対し、
学習順序を自己決定して調べ学習

新聞やポスター等成果物（デジタル）

< 3年 >

空間：個人・ペア・トリオ学習の自己決定、席順廃止

算数：学びの手引きと与えられたためあて

ワンペーパーポートフォリオ型のふり返し

社会：児童が抱いた疑問から、学級で単元を貫く学習問題を立てる。

与えられた一単位時間ごとの学習問題に対し、
学習順序を自己決定して調べ学習

新聞やポスター等成果物（紙面）

これらのとおり、主幹教諭の立場からの推進により、小山小の教職員が同じ方向を向いて、自らの学びを自己決定できる児童の育成に努めることができた。

また、児童の姿にも変容が見られた。一人で学習する子ども、ペアを組む子ども達、教え合いながら学習を進める子ども達、教室でない場所で取り組む子どもがそれぞれいる中、多くの児童がその時間に学習することを自分で理解し、よく学びに向かっている姿がたくさん見られるようになった。さらに、学びの環境を自ら整える機会があることにより、「～がわかった。」「～が楽しかった。」というような画一的且つ感想で終わっていた児童のふり返しについても、「どこで」「だれと」「どのように」勉強し、「結果どうだったのか」に触れるようなものが増加し、自らの学びを自己調整する姿も見受けられるようになってきた。

4) ペア学級制度の導入

隣同士のクラスでペアを組み、専科を担当する教職員による学習指導以外の時間割をほぼそろえるように日課表を組むことを提案した。

これは、学年教職員のプラスワン配置と合わせ、ペアを組む学級担任同士で互いに児童理解・情報共有・相談しやすい環境を整備することを目的としている。

また、教科担任制や学級横断型の学習指導等、柔軟な学習形態を取り、個別最適な学びにも対応できるような体制を図った。

例えば、学級横断型学習指導の展開について、ペアを組む2学級が同時に算数科の授業を展開するとする。これにより、担任2名・学年主任・学習サポート教員の最大4名で2学級の学習指導が可能となる。

こうしたペア学級制度の導入により、児童に自由進度型学習や習熟度別学習など、「指導の個別化」「学習の個性化」の実現を図ることができるようになった。前述した児童の学びに向かう姿に高まりが見られる一因だと考える。また、生徒指導事案にもすぐに複数人で対応することができ、早期解決の一助となっている。

2. 教職員が働きやすくなるような環境整備

1) 学習サポート体制

(1) 学習サポート教員の配置の工夫

学習サポート教員は流山市教育委員会の制度の1つとして、各校に数名ずつ割り当てられている。主に算数科の学習にサポートに入れるように配置している。

本校ではペア学級制度を導入しているため、2学級が同じ時間帯に算数科を学習していることが多い。通常一単位時間に対し1学級配置するところではあるが、一単位時間につき2学級にまたがってサポートできるよう配置した。また、主に1～4年生の学級に配置した。高学年になるほど、自由進度型学習や複線化型授業により、教職員が「指導の個別化」による個別支援が可能であったり、「学習の個性化」によるペアまたはトリオ学習をしながら教え合う中で学習を進めやすいと考え、焦点化した学年配置を行った。したがって、1年生の体育科（体育館）など、算数に限らず、安全管理上、必要な科目に配置することも可能となった。

(2) 学生ボランティアの配置

前項2. 1) (1) で前述したように、1～4年生を中心に学習サポート教員を配置した。しかしながら、これでは5・6年生へのサポート体制が課題となる。

その改善策として、学生ボランティアを配置した。人員は、教育実習生として本校で1ヶ月間の実習を行った学生である。これにより、週2回における算数科の学習サポート体制を構築できた。なお、他学年同様、一単位時間につき2学級にまたがって配置した。

(3) 学校支援コーディネーターと連携した保護者ボランティアの配置

本校では令和7年度よりPTA本部が解散し、保護者

活動は地域学校協働本部に移管された。その活動の1つとして、保護者ボランティアの配置について、学校支援コーディネーターと連携を図ることで、児童の安心安全な学習環境づくりを行っている。

具体的には、1年生の公園探検、2年生の町探検、3年生の学区内消防施設探検などで保護者ボランティアを配置した。

2) 部会の整理

本校は教職員の人数も多く、主たる部会の数も6部会と多く組織されていたが、実質機能していないものも存在していた。そこで、生徒指導部会・特別活動部会・研究推進部会に新たに長欠対策部会を加え、4部会に再組織した。そして、平均8名からなる学年担任のうち、2名ずつ各部会に所属させ、月ごとに定例開催する部会会議はどちらか1名が参加すればよいこととした。これにより、2回に1回、部会会議に出席すれば良いこととなり、会議の精選を図ることができた。

3) 会議日の明確化

本校の課題の1つとして、職員会議以外の会議開催日が定まっていなかったり元々予定されていないのに急に集まりがあったりと、計画の立案および実行が難しかったことがあげられる。そのため、各種定例会議の開催日を固定化し、行事予定の見通しを図った。

4) 教職員数が多いが故の小さじ一杯の強制力

本校は100名程の職員が在籍している。その内、児童に直接関わりのある教職員数は80名を超えるだろう。それだけの大所帯の中、同じ方向を向いて教育活動を進めることは一筋縄ではいかない。そのため、前述した「つながる授業ボード」でそれぞれの取り組みを可視化したり、提出物等において、事前に細かく期日を周知することや学年でまとめて提出させたりと、負担感につながらない程度の小さじ一杯の強制力を持たせることで、小山小学校の進む道筋を示した。

5) 日報を活用したプチ情報共有～題して「通りすがりの体育人」～

毎日、日報を出している。日々を忙しく過ごす担任達にとっては、日報を読んで確認する時間すらも惜しく、連絡事項が行き届かないことが数多くあった。それは、間際になって取り組むことにつながり、結果、さらに多忙感増加の一因となっていた。そのため、「通りすがりの体育人」と題し、情報共有の欄を日報に追加した。そこには、教職員の日々の頑張りを掲載するとともに、その感謝を伝えたり、特に若年層教員を中

心とした今必要なスキルに関する知識や教育に通ずる学問の知識を伝えたりすることで、「読みたくなる日報＝情報伝達」となるようにした。

これらの環境整備を通して、「働きやすくなった。」「見通しが持てるようになった。」「日報を読んでいます。」などの声を多く聞くようになり、教職員の負担感や多忙感の軽減につながっていると実感している。

V 成果と課題

1. 成果

本研究の目的である②働き方改革の視点(負担「感」の軽減)を含めた学校組織運営の実践を通して、教職員の時間的余白と心のゆとりを生むことができた。それらは、目的の①である「個の最適」を追求する学びのための授業改善の推進を図ることにもつながったといえる。例えば、「自分たちで疑問を出し合う姿」「自分で学習計画を立てる姿。また、計画に対する学び方のふり返りの質向上。」「黙々と資料をまとめる姿」「ホワイトボードを使ってミニ先生をしながら教え合う姿」など、多くの児童の生き生きとして学びに向かう姿からも、その成果を見取ることができた。

2. 課題

学校組織体制を整えることは大切であるものの、それだけでは人材育成までにはつながりきらない。生徒指導事案等、チーム(組織)で対応する中での経験を通して成長する側面はあるだろう。しかし、若年層教職員研修だけでなく、日々の学習指導や生徒指導の中でどのように人材育成を図っていくかが、今後さらに重要であると考えられる。例えば、人数の多さ故、他学年の教職員との関わりが薄れがちになってしまう本校において、ロールモデルとなる教職員と若年層教職員とが関わる機会を設定することで、日頃からの情報交換を可能とする人間関係づくりのアシストをすることなどが考えられる。

また、本校は毎年異動する教職員がとても多い。そのため、教育効果のある取り組みに対して、継続またはアップデートさせていく仕組みについても、今後検討していく必要があると考える。

(参考文献)

- ・文部科学省初等中等教育局教育課程課教育課程企画室(2025)『『個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実』のためのサポートマガジン『みるみる』』
- ・樋口万太郎(2025)「その自由進度学習、間違っていないですか？」

優良賞

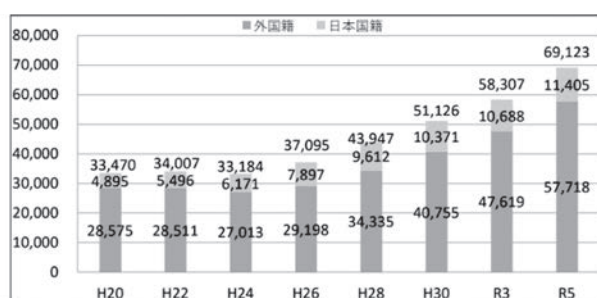
新たなシンフォニーを奏でる近未来の教室

～国際社会で生きるために、多様な文化・価値観をもつ人々と共生できる児童の育成～

千葉市立高浜第一小学校
校長 三浦 昌宏

1 研究の背景

文部科学省（令和6年8月発表）によると、公立学校における日本語指導が必要な児童生徒数は、10年前と比較して2倍超の69,123人となった（資料1）。年々増加のスピードが速く、かつ確実に刻まれていることがうかがえる。



【資料1】公立学校における日本語指導が必要な児童生徒数の推移

このような状況を鑑みると、日本における、これからの更なる人口減少や外国人受け入れの加速に伴い、全く日本語が話せない児童生徒と生活し学んでいく今までになかったスタイルが、どの学校、どの学級でも当たり前になり、その状況を前提にして教育活動を進めないと学校自体が成り立たなくなる日がいずれやってくるのが容易に想定される。7万人に迫る日本語指導が必要な児童生徒の個別の状況も踏まえた上で、学校での学びをどのように捉え進化させていくかが、今後の鍵になることは間違いないだろう。

2 本校を取り巻く現状及び研究の方向性

千葉市では、学校教育における課題の中で、国際教育（国際理解教育・日本語指導）の目標として、以下の内容（抜粋）を掲げている。

- ・国際関係や異文化を単に理解するだけではなく、自らが国際社会の一員としてどのように生きていくか等について意識し、主体的に行動し、発信できる力を高める。
- ・特に日本語指導が必要な児童生徒には、学校生活への適応を図り、日本語の適切な指導の充実を図る。

また、文部科学省では、国際教育を推進するための基本的視点として、「国際教育の実践力の向上と学びの広がり・深まりをもたらす授業づくり」及び「共有の促進や連携のための支援体制の構築」を挙げている。

本校の歴史を紐解くと、昭和62（1987）年に全校のわずか0.3%に過ぎなかった外国にルーツをもつ児童が、平成8（1996）年には10%に達し、校内に日本語指導教室が開設された。そして、現在8か国、57%の外国にルーツをもつ児童が在籍し、3人の日本語指導専科教員が配置される学校となった。学年によってはクラスの3分の2が外国にルーツをもつ児童であり、昼休みや給食の時間だけでなく、授業中も多言語が飛び交っている。また、言葉の壁だけではなく、考え方や慣習等の違いによる様々な壁も存在する。

これらのことも踏まえ、本校では、長年積み重ねてきた国際教育に関する実践を基にし、「①誰もが取り組める、②特別ではない、③普段の授業+α」の3つをコンセプトに掲げた授業構築を進めていくこととした。そして、国籍や文化や考え方の異なる児童が自らに備わる個性を大いに発揮し、教室に新たなシンフォニーを奏でる「近未来の教室」（異なる様々な楽器が音を出し合い協和していく、オーケストラの交響曲のような共生の教室）を目指す国際教育の研究を進めることで、研究主題及び副題に迫ることとした。

3 研究の目的と方法

(1)研究の目的

互いの考えや文化を認め合える児童並びに基礎的・基本的な日本語が習得できる児童を育てるための授業の在り方を探る。

(2)研究の方法

- ・各教科等における国際教育につながる教科研究等を3つのコンセプトを基にして実践する。
- ・日本語指導教室における指導の充実と各学級との連携を継続し更に深める。

4 研究の内容

(1)研究の視点

【各学級】互いの考えや文化を認め合える授業の工夫（相互理解）

【日本語指導教室】基礎的・基本的な日本語が習得できる授業の工夫（言語理解）

【各学級】「互いの考えや文化を認め合える授業」を以下のように捉える。

- ・それぞれの母国、言語、環境等の違いにより異なる考えをもつことを理解し合いながら、互いに考えを述べ合い、それぞれの考えのよさに気付いたり、自分とは違う考え方を認めたりすることができる授業（→**人とのつながりを中心に据えた授業**）。
- ・今まで知らなかった外国について知ることで、他国の文化や考え方の違いに気づき、それぞれのよさに気付いたり、自分とは違う考え方を認めたりすることができる授業（→**知識や理解を中心に据えた授業**）。

【日本語指導教室】「基礎的・基本的な日本語が習得できる授業」を以下のように捉える。

- ・日本語の基礎的・基本的な知識や技能を獲得し、学校生活への適応を図る授業（→**初期指導が必要な児童に対する個別授業**）。
- ・学級での学習に積極的に参加できるように、理解・表現・記憶支援等を行い、語彙力、思考力、表現力を育てる授業（→**教科につながる指導が必要な児童に対する個別授業**）。

(2)研究の実際

①道徳の実践（第2学年）（→**人とのつながり**）

・主題名「みんな 友だち」

・資料名「はなせない ねこさん」（オリジナル資料）

【視点①地域及び本校の実態を考慮した、オリジナル資料での授業構成】

本校には、日本語でのやり取りで互いの意思疎通を図ることが難しい児童が多く在籍している。そのため、教科書教材の「およげない りすさん（誰とでも仲良く助け合うことについて学ぶ資料）」の学習を通して、どの友達とも仲良くしようという心情を育てたいと考えた。しかし、言葉の壁により、その気持ちを実生活で生かしきれないケースが生じることが容易に予想された。そこで、本校の実態を考慮し、「言葉の通じない友達との具体的な関わり方」について扱ったオリジナル資料を開発し、授業を構成した。

本資料は、さる、いぬ、りすが、言葉の通じないねこを誘って公園で一緒に遊ぼうとするが、遊びのルールが伝えられずに困るという内容である。この状況をどのように解決し、遊んでいけばよいかを考えさせた。仲間に入れてもらえて嬉しかったねこの気持ちや、一緒に遊べてよかったという仲間に入れた側の気持ちに共感できるようにした。その結果、言葉の壁がある友達とも積極的に仲良くしようとする心情や態度がこれまで以上に身に付き、実生活においても温かなやりとりをする一面を垣間見ることができた。

【視点②児童の実生活に近い場面を想定し、本音や感情を表出させる役割演技】

本時のねらい達成のため、学習の中で言葉が通じない友達に遊び方の説明をする場面の役割演技を取り入れた。言葉の通じないねこの役を教師が演じ、並び順を抜かしたり日本とは異なるじゃんけんを出したりする等、遊びに誘ったさる役の児童達が困る場面を意図的に作るようにした。

そして、ねこにどのような説明をしたらよいのか、相談しながら演技を行うことにより、言葉の



【資料2】役割演技

通じない友達と遊ぶときに起こりうる困り感を具体的に経験させた。

様々な工夫をしながら遊びのルールやじゃんけんの仕方の伝達を図る活動を通して、言葉の通じない友達とコミュニケーションをとることは、大変ではあるが楽しいことだと気付くことができた。また、遊びに誘ってもらったねこの気持ちを想像させることで、言葉が通じず不安な状態にいるときに、やさしく声を掛けてもらう嬉しさについても押さえることができた。

また、役割演技後に、「仲の良い友達だけで遊んだほうが楽なのではないか。」といった発問で揺さぶり考えさせた際は、前時に学んでいた「皆で生活するときには、自分の都合だけでなく、相手の気持ちも考えながら行動することが大切だ。」という考えに迫り着く姿が見られた。仲良し同士で過ごす時間はもちろん大切ではあるが、たとえ言葉の壁はあっても周りの友達のことを考えて皆で生活していくことのよさや大切さへの意識も高めることができた。

②社会科の実践（第6学年）（→知識や理解）

・単元名「世界に歩み出した日本」（明治時代）
「日本の国力が充実し国際的地位が向上するために何を優先するべきだと考えるか。」

【視点①仮想首相へのプレゼンテーションの設定】

本学級に在籍する児童のルーツは3か国（日本、中国、ウクライナ）にわたる。歴史学習において、様々な視点から歴史的事象に対する根拠に基づいた自分の考えや経験を伝え合う機会を設けることが主体的な学習を導き、思考や理解等を深めることにつながると考えた。

そこで、本単元のまとめとして、「明治時代に、もしも自分が首相に進言する立場の役人だったら、我が国の国力が充実し国際的地位が向上するために何を優先するべきだと考えるか。」という問いを立て、その優先すべき方策を考え、グループで話し合い、首相に提案する仮想の活動を設定した。そのために、児童は学習で取り上げられた歴史的事象について、優先すべきと考える価値の高い順のランク付けとその根拠を、その都度整理・更新していった。そして、まとめの過程で、それらの歴史的事象を「戦力」「国際貢献」「欧米化」の3つに分類し、3～4



【資料3】プレゼンテーション

人のグループで自分の考えを伝えたり、相手の考えを聞いたりしながら、最終的にグループとして仮想首相に提案するランク付けをした。その後、学級担任を仮想首相と見立て、学級全体でプレゼンテーションを行った。

このような活動を通して、たとえ自分と同じランク付けであっても根拠が違っていたり、自分とは異なる視点や育った国の環境・事情等で歴史的事象を捉えたりしていることに気付くことで、思考や理解等を更に深めることにつながった。

【視点②タブレットPCを活用した振り返りの工夫】

学習したことを根拠にした活発な話し合い活動を行うためには、自分の考えを整理し他者に伝えられるようにしておくことが必要である。そこで、毎時間の授業終了の3分間ほどを「今日のまとめタイム」とし、学習内容を振り返る時間をとった。その際、タブレットPCの学習支援用ソフトを活用し、まとめの過程に向けた「歴史出来事カード」を並べ替えたり、自分なりに考えたことを記録したりしながら学び進めた。

このように、歴史の流れ全体も意識しながら自分の考えを構築していくことで、話し合い活動に向けた素地を養っていった。

本時は公開研究会としても設定していたため、児童だけではなく他校等からの多くの参会者からも、各グループのプレゼンテーションに対する振り返りとしてGoogle Formsで3段階評価をしてもらった。集約結果やコメントを読む中で客観的な振り返りもでき、改めて歴史的事象に対する認識を深めることにつながった。

③日本語指導の実践（→初期指導）

※対象：中華人民共和国籍児童

・単元名「クリスマスカードをおくろう」
（色に関わる「イ形容詞」の名詞修飾用法）

日本語指導教室での指導内容

○サバイバル日本語 ○日本語基礎
○日本語と教科の統合学習

【視点①「イ形容詞」の名詞修飾用法の理解を図る導入の工夫】

導入の際、今まで学習してきた色（赤や青等）が、「イ形容詞」化し、後に続く言葉を修飾していることに気付かせるため、帰納的アプローチを用いることとした。

具体的には、あか+ほし→あかいほし（赤い星）、あお+えん→あおいえん（青い円）のように、いくつかの例を出した。それらを基に、「色+α」の言葉にするときは色の後ろに「い」が付くのではないかという規則を自ら発見したことで文法規則の理解が進み、習得につながった。

【視点②言葉の定着を図るゲームを用いた練習方法】

導入で理解した「イ形容詞」の名詞修飾用法を定着させるためには、文型練習を繰り返し行う反復的な練習がある程度必要になる。しかし、意味もなく繰り返し聞かされたり言わされたりしていると児童が感じてしまったら、意欲が低下し定着には結び付かないことが容易に予想される。

そこで、反復的な練習にゲーム的要素を取り入れることとした。トランプの「神経衰弱」のように、



【資料4】マンツーマンでの指導

カードをめくりながら発話をしていく等、1つ1つのゲームはシンプルだが、少しずつ変化を付けて何度も取り組んだ。その結果、児童は繰り返して練習している

という意識をもつことなく夢中になり、楽しみながら言葉を定着していった。

【視点③コミュニケーション能力を高めるための状況設定練習】

コミュニケーション能力を高めるためには、自分の思いや考えをやり取りする練習が必要不可欠である。そこで、実際のコミュニケーションに近い状況をつくるため、「教師とのやり取りを通して、自分の好きな色や形を集めてカードを作り、担任にプレゼントをする。」というシチュエーションを本時の最後の活動場面として設定した。

実際のコミュニケーション場面では、定着した表現を使いこなすだけでなく、会話の始め方や終わらせ方、相手の反応によって自分の発話を変える能力が必要になってくる。そのために、どのように会話を始めたり終わらせたりするのかを例示したり、「カードを作るときに必要なものが1つではなく、2つや3つあるときはどう言いますか?」「カードが出来上がったら、先生に何と言って渡しますか?」と問い掛けたりした。様々な想定を踏まえることで、コミュニケーション能力を高めることにつなげていった。

④日本語指導の実践（→教科につながる指導）

※対象：中華人民共和国籍児童

- ・社会科 第5学年「水産業のさかんな地域」
- 「カツオの一本釣りとまき網漁のそれぞれのよさを調べよう。」

日本語指導教室での指導内容

○日本語と教科の統合学習 ○教科の補習

【視点①学習意欲を引き出すための具体物や写真等の活用】

本校には、生まれ育った国での食習慣が影響し海産物を苦手としている児童が多くいる。そのため、漁業や魚そのものに対する関心が低いことが予想された。

そこで本時では、児童が実際に鰹節のにおいや硬さを肌で感じたり、カツオの模型で大きさや重さ等を体感し



【資料5】動画での視覚化

たりすることで、魚への興味や関心をもてるようにした。また、釣れたカツオの数や状態等が分かるものを写真や動画で視聴したことで、本時で押さえる「一本釣り」と「まき網漁」を比較しながら、それぞれの手法のよさ

に気付くことができた。このように、具体物や写真等を使って体感や視覚化させたことで、言葉と結び付けながら理解を促すことができた。

【視点②適切な答え方ができるような問い掛け】

児童と教師とのマンツーマンでのやり取りを通して、「なぜ～だと思いますか。」という理由を問う発問を多くし、「～だから～だと思います。」等の適切な答え方に慣れるようにした。また、主語と目的語が逆になる等の普段から間違いやすい言い方（例えば「プランクトンがカツオを食べたいから。」）をした場合は、その都度確認しながら正しく話せるように指導を進めた。

単元を通して取り出し指導を行っているため、漁業に関わる言葉や問いに対する適切な答え方についても丁寧に進めることができ、児童の学習言語としての日本語習得に前進が見られた。

⑤教員に向けての研修（異文化トレーニング）

・貿易ゲーム ・バファバファ 他

国際教育を進めていくにあたり、実際に指導をする教員が、他国の文化や考え方を知ることで双方の共通点や相違点を知り理解すること（異文化理解）が重要であることは周知の通りである。付け加えると、単に頭の中で理解するという認知面だけではなく、異文化に対して当たり前のように共感ができるトレーニングが必要になる。そこで、いくつかの異文化シミュレーションゲームを校内研修に取り入れ、教員全体が実践する場を設定した。

【異文化トレーニング：貿易ゲーム】

無作為の4つの国（先進国・開発途上国・後発開発途上国等）に分かれ、資源である用紙を使って定められた商品（長方形や正方形、円等）を作り資金を稼ぐ「貿易ゲーム」を行った。このゲームの特徴は、各国に配当された道具のはさみ（技術）や用紙（資源）等の種類や数量が国によって異なる点である。中には、用紙（資源）しか配当されず、はさみ（技術）がない国もある。そのため、例えば用紙がない国は、はさみがない国に自分たちが持っているはさみの「時間貸し」をして用紙を手に入れる等、各自で交渉をして貿易活動を進めていくことになった。また、どの国でも作りやすい商品（長方形）が市場に多く出回ってくると商品価値が急落するという現実社会のような状況も生じ、困惑する国もあった。

ゲーム後の振り返りでは、「紙（資源）が大量にあっても、はさみ（技術）がないとどうにもならなかった。」「市場のバランスが変わって長方形が供給過多になる

と、値段が突然変わって戸惑った。」「先進国と他の国々との関わり方を考えるきっかけになった。」等、ゲームに参加した教員にとって、世界経済や国際協調について実践的に考える場になった。

⑥給食における取組（世界の料理を知ろう）

・ベトナムの料理 他

（バインミー、フォー・ガー、バナナケーキ、牛乳）

給食の献立として、本校在籍児童の国の料理を毎月提供している。その際、栄養士による「お昼の放送」において、献立やその国にまつわる情報を分かりやすくクイズ形式で伝えている。

【放送内容：ベトナム編】（抜粋）

…ベトナムは、東南アジアにある国で、日本から飛行機で6時間くらいのところにあります。農業が盛んで場所によっては1年に2回、3回とお米の収穫ができる稲作の国です。日本のように、ご飯をよく食べます。中国やフランスとの歴史的な関係があり、料理に関しても影響を受けています。例えば、箸や茶碗を使ったり、お米や麺を食べたり、お茶を飲んだりする文化は、中国の食文化の影響を受けたものです。

また、フランスの影響から、フランスパンを食べたり、コーヒーを飲んだりする習慣も



【資料6】ベトナムメニューの給食

あるようです。今日の給食の「バインミー」は、ベトナムのサンドウィッチです。それでは、クイズです。今日のスープ「フォー・ガー」に入っている麺は、何からできているでしょう。正解は…

5 研究のまとめ（考察と今後の展望）

児童同士の相互理解を進めるため、どの学級でも掲載した実践の他に、学級の実態に合わせた授業の工夫を行った。日本語指導対象児童に対しては、翻訳ツールを活用した画面共有や翻訳の送信、大型テレビ表示等を行うことで、友達との考えの共有や学習内容の理解につなげることができた。また、授業構成の1つとして外国にルーツをもつ児童の母国等、その国についての内容を取り上げたり日本と比較したりすることで、互いの国のよさや違いについて感じる事ができた。特に歴史や貿易等の学習では、多国籍の友達と学んでいるからこそその考え方の広がりが見られた。

一方で、どの教科においても児童の日本語理解度に合わせた個別指導を行いたい、一人の担任がクラス全体での学習と同時に進めることが難しい状況もある。担任+αでの体制をできるだけ多くの授業で組めるように教育課程の工夫を今後も続けていきたい。

最後に、普段の国語の授業での一場面を挙げる。

第5学年「言葉の意味が分かること」

～母語ではない言語を学ぶ際に生じるエピソード～

…「朝食にスープを食べました。」これは、アメリカ人の留学生が言った言葉です。日本語では、スープは「飲む」と表現することが多いため、日本語を母語とする人が聞くと、やや不自然に聞こえます。…（教科書より抜粋）

【T担任、CS中国児童、JS日本児童、AS全児童、AC全中国児童】

T：日本語の「スープを飲む」は、中国語では「飲む」と表現する？「食べる」と表現する？

CS1：中国でもスープは「飲む」だよ。飲み物は「飲む」、食べ物「食べる」だよ。

T：スープは食べ物じゃないの？

JS1：「飲む」は液体で、「食べる」は固体ってことじゃない？

AS：おお、なるほど。（皆、頷く）

CS2：でも、日本だと薬は「飲む」っていうけれど、中国では「食べる」だよ。そうだよ。（中国の友達に問い掛ける）

AC：うん、そうだよ。（中国児童の皆が口々に）

JS2：ああ、なるほど。確かに、薬は固体だからかな？

JS3：じゃあ、なんで日本では「飲む」なのかな？

【資料7】「薬は飲む？食べる？」の話し合い場面

上記の場面は、日本人にとって当たり前である「薬を飲む」という表現が中国では「薬を食べる」となっており、自分自身の「飲む」に対する言葉の意味理解を振り返ることで、認識を広げ深めようとしている場面である。これは、学級内に外国にルーツをもつ児童が在籍していたことと、教師が臨機応変な問い返しをしたことが相乗効果となって生まれた事例である。ささやかではあるが、私達は、このようなシンフォニーを日々目指し、目の前で生じる現実感動し、教育のもつ確かな可能性を噛みしめている。様々な楽器が奏でる音色が見事に調和し、美しく響き合うオーケストラのシンフォニーのような「近未来の教室」を今日も想望する。

【引用・参考文献等】

- 1) 文部科学省(2024)「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査」
- 2) 千葉県教育委員会(2024)「千葉県学校教育の課題 21世紀を拓く」
- 3) 文部科学省(2005)「初等中等教育における国際教育推進検討会報告―国際社会を生きる人材を育成するために―」
- 4) 光村図書出版(2024)「国語5 銀河」

誰もが安心して通える学校づくり

～校内組織すべてで取り組む支援体制とKHS会議、OKルームをいかした実践を通して～

柏市立田中北小学校
校長 中谷 光男

I 主題設定の理由

本校は、柏市の北端に位置し、野田・流山市に隣接しており、昭和30年4月柏市立田中小学校から分離し創立71年を迎えた。昭和54年に児童数約650名のピークを迎えた後は、児童数が減少し、学年単学級規模の状況が20数年続いた。

その後平成17年つくばエクスプレス開通と同時に、「柏たなか駅」ができ、都心への通勤の利便性が増したことで、戸建て・マンションの建設ラッシュが続いている。児童数の増加に伴い、旧田中北小学校（柏市大青田1536-1）から令和5年4月に現在の地（柏市船戸1-7-1）に新校舎が完成し、児童数830名で「令和の田中北小学校」がスタートした。

令和7年5月現在43学級、約1200名の児童が通う大規模校である。そのため、学校の喫緊の課題は、児童が安心して通える学校であり、交通安全教育、防災防犯教育に力を注ぐとともに、学校内においても心身の安全性を確保し、多様性を認め合い、誰もが安心して学ぶことのできる学校づくりを経営の柱と位置付けている。

新しくこの地に転居してきた児童の中には、多人数集団での学校生活に不安を持つ児童も一定数在籍する。登校を渋る、親と離れられない、教室に入れない等、さまざまである。学校教育目標に「幸せな学校NO1」を掲げ、誰もが安心して学ぶ機会を保証する教育の実現に向け校内体制を工夫して取り組んでいる。

全ての教職員が児童理解に努め、対応することで、どんな児童に対しても安心感を与えたい。

そのために、校内支援コーディネーター（専科教員）を分掌上に位置づけ、定期的にKHS（K：困っているH：人をS：救う）会議を開催し、市費負担職員の学習サポーター、教育支援員、教務主任などで校内支援チームを設置し、校内支援ルーム（「OKルーム」）を開設している。朝は「OKルーム」でスタートしたり、教室の一斉学習に耐えられなくなったら「OKルーム」に戻ってきたり、どの児童にも学ぶ権利を保障できるよう体制を整えている。

生徒指導部会議で問題行動を共有し、対応策を講じる。研修部では誰もが安心して学べる授業づくりに努め、特別支援チーム、校内支援チーム、教育相談チームで児童の実態を確認しながら、教育活動を行っている。ここに本実践をまとめることで、「誰もが安心して通える学校づくり」の在り方を問う一助になればと考え、本研究に取り組むこととした。

II 研究の概要

1 研究目標

本年度の学校経営方針に、『自ら学び、心豊かに、たくましく生きる北の子の育成～「考動・自立」』『みんなが幸せを感じる学校NO.1』を掲げている。“みんな”とは児童を主人公にして保護者、教職員、児童に関わる地域の方々全てが対象である。そのために、児童が「安心して楽しく学校に通い、友達や教職員と信頼関係で結ばれ、成長を共感しながら学ぶ」学校であり続けなければ、幸せ感を保護者、地域に共感してもらうことはできない。柏市学力・学習状況調査で「学校が楽しい」と感じる要因は「友達がいる」「休み時間が楽しい」「給食がある」が上位3項目と公表された。99%の児童は、教育活動の何かに安心を覚え、誰かと楽しさを共有し、登校し、学級に入る。本研究は、残り1%の児童が「安心できる場所、楽しみや達成感を感じる場所」を欲しているニーズに応えたい。そのために全ての組織をあげて、安心環境を整え、在籍学級も「OKルーム」も居場所と認めつつ、啖啄同機のタイミングを逃さずに在籍学級に戻ることもあきらめない、という方針を持っている。多様性、個性が尊重される時代にあり、公教育での限界もあるが、児童が学びの方法や場所を選択し、仲間で学びあい、試行錯誤しながら自己有用感を高め、未来に向かって「生きる力」を育てていきたいと考える。

2 研究仮説

本研究は「誰もが安心・安全な（心理的安全も含む）環境下で学ぶことができれば、考動・自立を表現できる児童の育成につながるだろう」という仮説に基づき、研究に取り組む。学校教育目標から連鎖する目指す児童への教育活動は、生徒指導、校内研究、校内支

援体制のすべてに結びつき、連携を図りながら日々の実践を行うものである。

さらに教育における“ウェルビーイング”を感じる指標は、現時点では完結はできないが、学校評価や教職員のストレスマネジメント、出席率、長欠率からも検証し考察していく。関係要素をすべて洗い出し、本校にかかわる児童、職員、保護者、地域の方々が「幸せな学校」を感じることを目標とする。

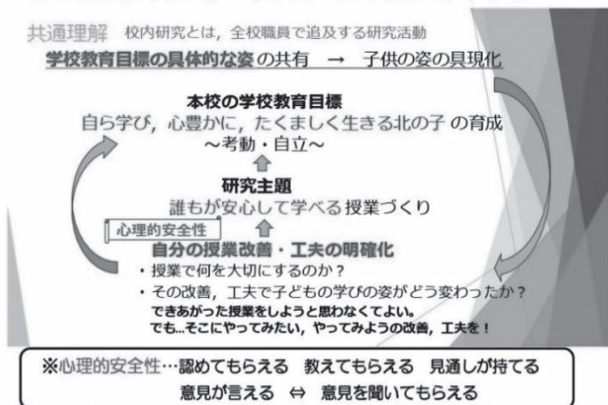
Ⅲ 研究の内容

始めに、校内研究体制と目的を明確にする。

1 校内研修体制 ※図1 本校職員会議資料より

令和7年度 研究 R7.5.22

＜第1回校内研＞共通理解と目指す児童の姿の具現化を学年で共有



(1) 研修の目的 ※図2 本校職員会議資料より

◆令和7年度の研究主題と目指すところ

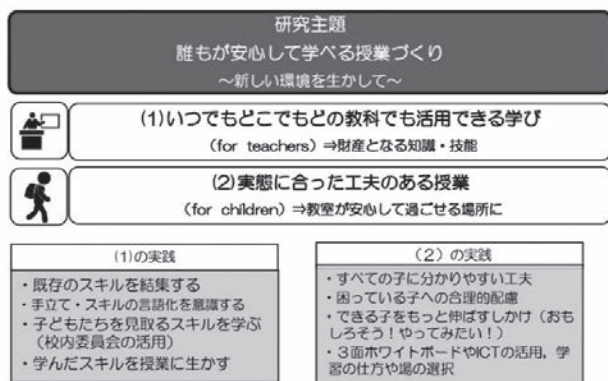


図1、図2のように「誰もが安心して学べる授業づくり」のために、職員選択制により各教科(国語3部会、算数3部会、社会、体育、道徳、生活科・理科、音楽・家庭科・外国語、図工・自活)12のグループに分かれ、3～4人でチームを作っている。相互に指導案を検討し、授業参観を行い、授業改善に取り組む体制を構築した。得意教科を伸ばしたり、苦手な教科に取り組んだりするなど意欲的に研修に臨む態勢ができています。

さらに授業づくりには、特別支援教育の視点も加味し、インクルーシブな環境、言葉かけの配慮、関わり方

や支援の要素も加味していくことで、児童の特性や多様性にも教師側から寄り添う活動が展開できる。「安心・安全な学級」を経営していこうとする姿勢を全校体制でつくことを意識している。一人一授業公開、3人以上の授業参観ができるよう校内体制で臨んでいる。

2 児童の心理的安全性を守る生徒指導

(1) 本校生徒指導の要点 ※4月提案資料から

ア愛情を持って子供に寄り添い、一人一人の児童に接する。

イ失敗を許し、それをばねとして立ち直らせ、さらに成長する機会を与える。

ウ問題行動を起こした児童については、担任任せにせず、具体的な指導の手立て等について職員全員で相談する。また、特別支援教育の推進を図る。

エ共通理解した事柄については、一貫した方針で指導を行う。

オ家庭との連携を密にする。

カ日常の観察や教育相談などを通して児童の一人一人の実態把握に努め個々に応じた生徒指導を行う。

キ児童の特性を踏まえて個に応じて支援・配慮を行い必要に応じて職員全体で共通理解を図る。

(2) 指導の具体的方法 ※4月提案資料から

ア些細な児童の変化に気づき、温かい声かけをする。思いや考えを表出できない児童に配慮する。

イ児童の良い所を積極的に認め、ほめる指導を行う。

ウ児童会活動と連携を図り、児童主体の活動を広げる。

エ学年・学級を超えてその場で全職員が一貫した指導を行う。

オちょっとした児童の変化や、気になる言動については生徒指導部を待たずとも職員相互で情報交換を行い、早期に対応できるようにしていく。

カ特別な支援が必要な場合は、各種支援会議やKHS会議等で話し合い、手立てを講じる。全校で共通理解を図ることが必要な事項は、職員会議で報告する。

キ学習規律の徹底、児童にとってわかりやすい授業(学習の内容の定着に限らず、学習の見通し・学習方法等を含む)の実践により、安心して学習できる場づくりを進める。

上記の内容は、一貫して、児童に寄り添うことと、課題に対しては全職員で向き合うことを示している。

また、生徒指導部校内独自の月1回のアンケートを実施している。5月～7月までの「学校は楽しいですか」のアンケートの問いには、学校平均95%以上

の児童が楽しいと回答している。

参考までに令和6年度学校評価アンケート(保護者・児童)の3項目の肯定的評価ポイントを見ると以下表1の通りである。 ※表1

NO	令和6年度 項目	保護者	児童
1	学校は楽しい	94%	94%
2	学習内容を理解している	93%	93%
3	思いやりがある	92%	88%

教育活動のすべての取組は、「学校は楽しい」に結びつくものとする。授業がわかることも友達と仲良く過ごすことも、先生との良い信頼関係も、その要素のどれかが否定評価となれば肯定的な評価は上がらない。こうした本校の生徒指導重点項目は、令和4年12月に改訂された生徒指導提要※1.1.2で示された生徒指導の実践上の四視点を反映している。以下概要抜粋

- ①自己存在感の感受…「自分も一人の人間として大切にされている」という自己存在感を持たせることが大事であり、自分を肯定的にとらえる自己肯定感や認められたいという自己有用感を育む活動
- ②共感的な人間関係の育成…学級という生活集団の中で認め合い、励まし合い支え合える学習集団になるために教職員と児童生徒が失敗を恐れず、支持的で創造的な相互扶助できる活動
- ③自己決定の場の提供…児童生徒自らが考え、選択し、決定し、実行できる体験を設定し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けていく活動
- ④安全・安心な風土の醸成…児童生徒一人一人が個性的な存在として尊重され、多様性を認め合い安心して授業や学校生活を自らつくりあげる活動

上記の活動視点は、本校の研究テーマ及び生徒指導の重点と重なり、「誰もが安心して通える学校づくり」の核として、全職員が意識をして教育活動に努めている。

3 児童理解を深め、対応策を共有するKHS会議

(1) 目的と内容(K:困っているH:人 S:救う)

- ・全学級を対象に、困り感のある児童についての情報共有を図る場とする。
- ・困り感のある児童の事象についての見立てを行い具体的な手立てを考える場とする。
- ・今後の対応・体制を考えるための場とする。
- ①リーダー 校内支援コーディネーター(理科専科・副教務)
- ②メンバー:管理職、個別支援教員(市費職員)、教育

相談コーディネーター、研究主任、養護教諭、長欠対策担当、特別支援コーディネーター、提案担任

③データを毎月入力し、児童の状況、対応、課題などを共有する。年間8回のKHS会議

④小グループで協議、児童への対応のヒントをみんなで考える。

⑤KHS会議の内容は、各種支援会議でも共有し、児童についての情報や手立ての方法は、学年間でも共有する。

(2) 6/24 KHS会議の実際の様子

事前にサーバー内データの様式に現状の様子を記入し会議に臨む。今回は学年1名課題対応の助言が欲しい児童を取り上げ、グループ協議によって児童の困り感と行動を分析し、見立てを行う。要因と支援方法を出し合う形式で実施した。

写真1 KHS会議の様子



写真2 A児への見立てと対応

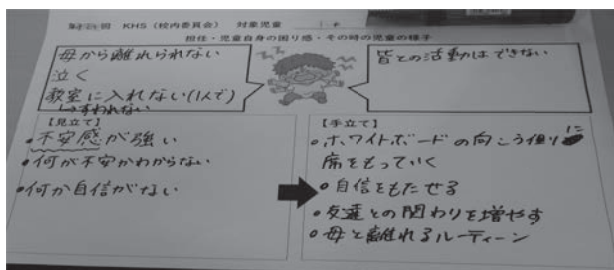
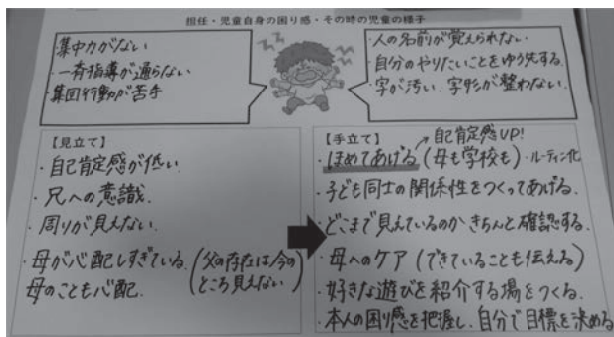


写真3 B児への見立てと対応



(3) 成果と課題

KHS会議は、令和5年度から始まっている。職員会議での事例報告や現職研修会等で特別支援教育研修を単発的に行うケースは他校にもあると思われる。本校では年間計画に位置づけし、児童対応のために時間を設けて具体例を出し、継続的な相互コンサルテーション

を行う組織として機能している。直接向き合わない教職員でも、自分事として困り感を考え、児童の顔や表情をイメージし、担任にできる支援を考える。それによって児童が救われ、担任が救われ、保護者が救われる。

児童の変容は、すぐに行動に現れるものではないが、「KHS会議ファイル」は、確実に私たち教職員の教育の証でありカルテのように積み重なっていくものである。

4 特別支援学級支援チームの活動

(1) 構成メンバーと内容(毎週金曜日)

①リーダー 特別支援コーディネーター(知的・情緒各1名)

②メンバー 特支担任7名(特支コーディネーター2名含) 教育支援員7名

一週間の児童支援の振り返りとともに、通常級の担任から木曜日の放課後までに提出してもらう翌週の時間割(週案のコピーも可)をもとに次週の支援級児童の動きを確認し、想定される支援方法、支援員の役割と関わり方を分担するために行っている。

(2) 会議の内容

本校には特別支援学級が7学級(知的学級が10名2学級、情緒学級が34名5学級)ある。県費職員7名の担任と、市費支援員フル勤務4名、ハーフ勤務3名で児童の指導、支援にあたっている。児童の障がいの程度や特性はさまざまであり、日々の生活の変化や状況について教職員が成長と課題の共通認識を持つことは重要なことである。児童に関わる教職員が総出で関わるのが大事であり、この会議の意義がある。

(3) 成果と課題

日程の変更、天気の良いし悪しなども支援級児童の生活態度、意欲に変化を生じさせる。本年度は、「知的学級」も「情緒学級」も支援の壁は作らないこと、担任は、担当児童に向かい合う時間や教える教科、方法には違いこそあれ、指導、支援をすることに区別をしないことを共通認識として円滑に連携協力ができている。支援級行事もできる限り知的・情緒両学級で一緒に行い、より多くの仲間の特性を肌で感じ、交流を深める取り組み(造形活動、調理)ができた。また支援員も各学級固定制ではなく柔軟に対応することで相互の情報交換量も増え、職員にも笑顔が増えた。一部の職員がストレス過多になっていないことが想像できる。

課題としては、児童にとっては、より多くの児童との交流によりストレスや課題解決の内容は複雑になる。友達の態度、表情、ものの言い方に悩むかもしれない。

目指すは、社会性や公共性の向上であり、教職員は丁寧に児童の課題に寄り添い向き合っていきたい。

5 校内支援チームの活動⇒校長へ報告書(毎週1回)

(1) 構成メンバーと内容(毎週金曜日)

①リーダー 校内支援コーディネーター(理科専科・副教務)

②メンバー 低学年支援教員2名、個別支援教員1名、専科教員2名

登校渋りの児童、教室に入れない児童などをリストアップし、どのように対応するか、メイン支援は誰が行うかなど情報を共有する。

児童は、一日の活動をミニホワイトボードで視覚化し、どの時間に教室で学習できるかを児童と考える。

(2) 会議の内容(4月18日支援会議録から抜粋)

①OKルーム(保健室利用も含む)9日～17日

・延べ18人 実質6名

・朝の登校渋り3名、朝のクラス確認3名

②各学年の様子(教室巡回にて)

1年生…朝の登校渋り児童はいるが、全体として教室に入り授業も受けることができている。

2年生…飛び出し行為はないが、教室内で困り感のある児童を複数見受ける。

3年生…飛び出し、授業中のトイレ、学習規律の乱れ周りから見ても支援が必要な様子がうかがえる。

4年生…特定児童のメンタル面が気になる。

5、6年生…現在OKルームに通う児童はいない。

③次週の対応について

・1年…N先生(市費支援員)2年…O先生(市費支援員)3年…教務、N先生(音楽専科2)フリー…S先生(市費支援員)K先生(音楽専科1)O先生(校内支援コーディネーター)

④担任に伝えること

・教室で手当てができる怪我は担任が対応する。保健室に移動する時間に問題が発生しないようにする。

・連絡なく休んでいる児童がいたら、職員室、OKルーム保健室に連絡する。他の場所での在室確認。

・学級を空けにくい状況であれば、教頭、教務、養護教諭が欠席確認を保護者にする。

このように、毎週の支援会議で、児童対応を確認して作業は、児童に安心感を与えることに繋がっている。

(3) 成果と課題

子どもは変容する力を自分で持っている。以下にOKルームに通う児童の感想メモを示す。

写真4 OKルームに通う児童の感想メモ原文

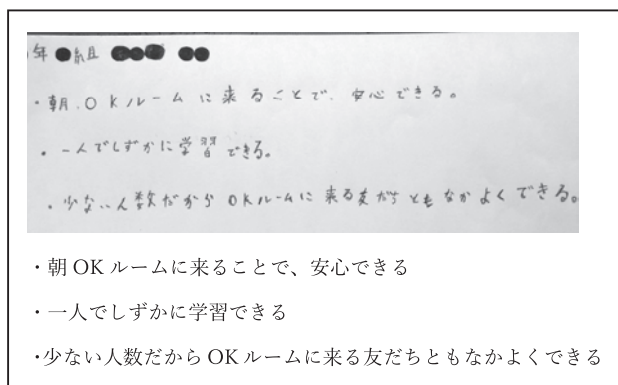


写真5 OKルームの教室の様子



ある児童の朝の流れがホワイトボードにこう書いてあった。以下、そのままの文章を示す。

- 1 OK ルームに にもつを おく
- 2 ○ー□にいて N せんせいにおはようを いう
- 3 あさがお に水をあげる
- 4 ○ー□にいて一日のよていをかくにんする

上記の児童は一学期の終業式には、朝から学級の中に入っていた。OKルーム利用者の推移を見ると4月には16名の入室。5月末には8名、6月末には5名に7月14日の報告では4名になっていた。

OKルームは、「何時きても良い場所であるが、学級の方がもっと楽しい場所」という概念を児童に感じさせたいという願いから、児童が喜びそうな物は置いていない。OKルームと在籍学級との違和感を取り除いていく作業を対話しながらチームで実行している。

6 教育相談チームの活動⇒校長へその都度報告

(1)構成メンバーと活動内容

スクールカウンセラー(SC)やスクールソーシャルワーカー(SSW)、教育相談コーディネーターでチームを組む。相談者の許可を得た範囲で相談者の願いや指導上配慮すべき事項などを共有している。相談者の多くが支援会議であがる児童、その保護者であり、連携して支援にいかしている。また、SSWは、長欠児童の家庭訪問もできるため、児童が、家庭でどんな生活をしているのか、保護者がどんな悩みを抱えているかを聞き取ることができる。担任は学年全体に情報を共有し、登校した際に児童に不安や違和感が無いよう準備

している。当該児童を毎朝、呼名する配慮は、学級の一員として常に心に留めているからに他ならない。
(2)本校の長欠率と実態について

表2 過去の長欠率の推移 ※単位人、率は%

	令和5年度		令和6年度		令和7年度	
全校児童	835	長欠率	998	長欠率	1198	長欠率
7月	6	0.72	3	0.30	9	0.75
12月	11	1.32	8	0.80		
3月	12	1.44	17	1.70		

上の表は、過去3年間の長欠率を示したものである。毎年7月は1%未満であるが、年度末3月には1%を超えている。本校における取組がこの数字にどう影響しているのか、数字のみでは判断できない。長欠の発生要因は家庭環境、病状を含め、さまざまである。しかし、本市内でみると大規模校でありながら長欠率の少ない上位校であることは、市教委の調査で確認している。「誰もが安心して通える学校」を目指す全教職員の取組は、児童の新たな不安や登校渋りの発症を予見し予防できるはずと信じ、今後も実践を続けていく。

7 考察～誰もが幸せな学校のために

令和5年12月には中央委審議会初等中等教育分科会から「義務教育の在り方ワーキンググループ中間まとめ」が出された。内容として、目指すべき義務教育・学校教育の姿及び取組の方向性が6点述べられているがその中の「公教育としての共通性の担保と多様性の包摂」が揚げられ、学校は子供が安心して学び、ウェルビーイングを実現できる場となるよう、また不登校児童生徒の状況に応じた学びの多様化に資する環境整備をしていくことが大切とある。さらに「児童生徒と教師が集う場としての価値を最大化していき、共に学ぶ魅力ある学校づくり・授業づくりが必要」とある。

本校の目指す「誰もが安心して通える学校づくり」の日々の取組に間違いはないと確信している。

下 資料1(5月の学校経営資料から)

幸せになる職場の10の実践 「誰もが安心して通える学校」

- 明るいあいさつを交わせる
 - 職員室に笑い声があふれる
 - 授業改善のための学び合いができる
 - 目標に向かいチーム一丸となって行動できる
 - 尊敬と感謝の気持ちを示せる
 - “お互い様”の信頼関係がある
 - “HELP”の声が出せる、それを見逃さない感性を持つ
 - 起きている課題を他人事としない
 - 残業が少ない
 - 自分の弱さを認め、他の職員の良さを認める
- は、幸せな学校である。そのためには職場が幸せである必要がある。職員の笑顔は子どもたちの笑顔を生む。誰一人不安な表情や怯える児童を生まないという学校であり続けたい。

地域と共に生きる学校づくりを目指して

～児童の地域に対する愛着形成を促す地域素材の活用の工夫～

千葉県立検見川小学校
校長 石田 信之

1 主題設定の理由

本校のある千葉県花見川区検見川町は、江戸時代には千葉街道の宿場町として、人や物資が多く往来する町であった。昭和40年代に大規模な埋め立てが始まるまでは、遠浅の海では漁業や潮干狩りがさかんに行われ、町内には今でも当時の港町の風情が一部残っている。また、本校の学区にある検見川神社は、1200年前の平安時代を起源とする歴史ある神社である。毎年夏に催される例大祭では、大型の神輿が町内を巡行し、商店街の沿道にはたくさんの屋台が並ぶ。疫病鎮めの伝統と現代の地域文化が融合し、熱気あふれる神輿の練り歩きが見どころの検見川の夏の風物詩である。3日間で4万人以上の来場者が訪れるとともに、地域の人々にとっても大きな楽しみの一つである。

近年では土地開発が進み、大型マンションや新興住宅が多く立ち並んでいる。町は少子化を感じさせないほどたくさんの子供たちであふれ、今年度の児童数は740名を超える市内でも有数の大規模校である。古き良き港町の風情と現代の暮らしやすさが共存する住みやすい町に位置する本校は開校154年目を迎え、祖父母・親・子の3世代に渡って通う世帯も多い。地域の方々の中には本校を母校とする方も多く、地域に愛されてきた学校である。

このような地域密着型の本校では、学校教育目標を以下のように設定している。

「一人一人のよさが輝く検見川っ子の育成」

- ☒ け けみがわの地域を愛する子供
- ☒ み みんなが明るく思いやりのある子供
- ☒ が からだと心を鍛えるたくましい子供
- ☒ わ わかる喜びを味わえる子供

4つの重点のうちの一つが「検見川の地域を愛する子供」という地域愛に関する項目である。

しかしながら、毎年実施している学校評価アンケート

ートの結果では、他の3観点に比べて地域愛の達成度が低いことが課題として挙げられている。(表1)

(表1) 保護者による学校評価アンケート結果

内容項目	令和6年度前期
検見川の地域を愛する子供について	2.94
みんな明るく思いやりのある子供について	3.37
からだと心を鍛えるたくましい子供について	3.12
わかる喜びを味わえる子供について	3.07

※数値は4段階評価

また、「検見川の地域を愛する子供」に関する2つのアンケート結果は以下の通りである。(表2)

(表2) 保護者による学校評価アンケート結果

内容項目	令和元年	令和6年度前期
検見川の子供たちが参加できる行事の情報が家庭に届いている。	3.66	3.49
子供たちは参加できる地域の行事に参加している。	3.02	2.40

※数値は4段階評価

結果からわかるように、本校の児童は、地域の様々な行事の情報が届いているにも関わらず、進んで参加しようとする児童はそれほど多くない。また、令和元年の結果と比較すると、令和6年度の方が「地域の行事へ参加している子供が減っている」と感じている保護者が多い。これは、新型コロナウイルス感染症の流行により、ここ数年、例大祭を始めとする町内の様々な行事を中止または規模を縮小させてしまっただけでなく、これまで本校が行ってきた地域の特色を生かした授業実践の多くが続行不能となってしまったことが要因として考えられる。加えて、コロナ禍での職員の異動によって、かつての授業実践を引き継ぐ職員も少なくなっている現状である。

そこで本校では、学校と地域のつながりを今一度もてるような手立てを講じることで、地域を愛する子供を育成し、地域と共に生きる学校づくりを目指すことにした。「地域と共に生きる学校」とは、地域

社会と連携・協働しながら、子供たちの学びや成長を支える教育環境が整った学校である。このような学校で学ぶ子供たちは、地域への愛着をもつことができ、心の発達に様々な良い影響を与えられると考えられる。地域に自分の居場所を感じられることで自己肯定感を養ったり、地域の多様な他者と関わることで、協調性や社会性を高めたりできるだろう。また、地元独自の文化や歴史に触れることは、自分はこの町の一員であるというアイデンティティの確立にもつながると考え、本主題を設定した。

2 研究の概要

(1) 研究の目的

本研究の目的は、希薄になりつつある学校と地域とのつながりを再度持ち、地域と共に生きる学校づくりを目指すことである。本研究では、地域の特色を学校教育の様々な面に活用することによって、児童の地域への愛着形成を促していく。

(2) 研究の仮説

地域の人々から長く愛されてきた検見川神社を教材化し、神社の歴史的価値に触れたり、祭事を守る人々の思いを知ったりすることで、児童は地域への愛着を深めることができるだろう。

3 研究の実際

令和7年度は、以下の3つの実践を行った。

(1) 4学年音楽科

「ちいきにつたわる音楽に親しもう」

本題材は日本の民謡の特徴を感じ取ったり、自分たちの地域に伝わる舞や音楽を調べたりして、郷土の音楽への興味を高めていくことをねらいとしている。指導計画は以下の通りである。

次	時配	学習内容
第一次	1	・日本各地に伝わる音楽を聴き、それぞれの特徴をつかみ、よさに気付く。
	2	・検見川神社の巫女舞と仁羽（お囃子）を聴き、それぞれの雰囲気の違いを感じ取るとともに、口唱歌しながら楽器のリズムを打つ。
第二次	3	・ゲストティーチャー（地域の囃子連の方々）から、楽器やリズムの打ち方を教わる。

	4	・仁羽のリズムに合わせて、リコーダーで旋律を即興的に演奏する。
第三次	5	・グループごとに旋律をつなげて演奏し、つなげ方や終わり方を工夫する。
	6	・作った旋律を発表し、自分たちのお囃子として聴き合う。

①ゲストティーチャーによるお囃子講座

検見川神社の山車曳きの際のお囃子の一つである「仁羽」の打ち方を教わった。（写真1、2）地域の囃子連の方の生演奏を聴いた児童は、太鼓の力強さと独特のリズムの面白さに興味を抱いていた。古タイヤやダンボールを大太鼓や小太鼓に見立てて、鉦の代わりにトライアングルを用いて、実際に楽器の打ち方を習うと、児童は独特のリズムに苦戦しつつも熱心に取り組んでいた。



写真1 お囃子講座で大太鼓の打ち方を教わる児童の様子



写真2 お囃子講座で小太鼓の打ち方を教わる児童の様子

学習後の児童の感想では、「知らない楽器ばかりだったので、打ち方などを知ることができて楽しかったです。」「大太鼓はすごく迫力のある音で、小太鼓はすごく軽くてきれいな音でした。」「小太

鼓のリズムが難しかったけれど、楽しかったです。」とお囃子に使う楽器やリズムの特徴をつかみ、仁羽に親しむ子が多く見られた。その後も練習を重ねたことで、どの楽器も上手に打てるようになり、児童は音楽の学習以外にも進んで仁羽を演奏するようになった。本題材で地域のお囃子に親しんだことによって、夏の例大祭での演奏を楽しみに思う児童や、これからもお囃子を大切にしたいという児童が増えた。(写真4、5)

く分かったこと
 にんばは、もり上げるための
 音楽だから 楽しい音楽にち
 かづけられるようにたかい音
 あたり ひくい音などを取り入れられ
 い！ るようにくふうしました。こ
 れからもにんばを大切にしてい
 きたいと思いました。

写真4 学習後の児童の感想

にんばをみらいに おいでいきなす

写真5 学習後の児童の感想

②音楽発表会「未来につなごう検見川ばやし」

本題材で学習したことをもとに、4年生は音楽発表会に向けて仁羽のリズムに合う旋律を学級ごとに考え、演奏した。どの学級も拍を合わせることに苦戦しつつも、繰り返し練習をしたことで、心を一つに演奏できるようになった。壮行会では、全校に向けて演奏し、音楽発表会では、近隣の小学校の児童を前にオリジナルのお囃子を発表した。(写真5、6)



写真5 音楽発表会の壮行会の演奏



写真6 音楽発表会での演奏の様子

演奏を聴いた児童からは「太鼓や鉦、リコーダーの音色がそろっていて上手でした。」「それぞれの学級オリジナルの旋律が聞いていておもしろかったです。」と好評で、称賛を浴びていた。

(2) 6学年図画工作科「わたしの大切な風景」

①検見川神社を描く活動

本校の6年生は毎年検見川神社を題材に絵に表している。今年度は図画工作科「わたしの大切な風景」の学習において、検見川神社を描く学習を行った。

本題材は自分にとって大切な風景を見て感じたことから、思いに合わせて用具を選び、形や色、構成の美しさなどを考えながら工夫して表すことをねらいとしている。指導計画は以下の通りである。

時配	学習内容
1	・自分の生活や身の回りを見つめ、大切な風景を思い浮かべる。
2 3	・検見川神社の境内を散策し、感じたことや表したいことを見付け、その表し方を構想して、下絵を描く。
4 5 6	・検見川神社から感じたこと、表したいことを見付け、遠近感や色の濃淡に気を付けて着色する。
7	・友達とお互いの作品を鑑賞し合い、感じたことや考えたことを伝え合う。

検見川神社の社殿は中・東・西神殿の三社から成り、現存する社殿の歴史は古く、その起源は江戸時代末期までさかのぼる。このような由緒ある

建造物である検見川神社を描くことを通して、児童の地域アイデンティティを醸成できるのではないかと考えた。

児童の多くは、初詣や夏祭りなどで何度も検見川神社を参拝しているため、神殿を目にしている。しかしながら、絵を描くために改めて社殿を観察すると、「よく見ると木が複雑に組まれている。」

「釘を使わずに建てられているなんてすごい。」と、屋根の構造や軒裏の木材の重なり複雑さに児童は驚いていた。境内を自由に散策して感じたことをもとに、気に入った社殿や周りの自然の様子などを、構図を工夫しながら描き表した。(写真7)

絵を描き上げた児童からは、「地域のシンボルである検見川神社を観察し、実際に見たままに描き表せるように頑張りました。」という声が聞かれた。児童は学習によって、地域の伝統的な建物の一つである神社のすばらしさに触れ、その価値を再認識するとともに、検見川神社への親しみが増すきっかけになった。



写真7 検見川神社を写生している様子

②絵をかく会での校内展示

本市では、絵をかく会という取り組みを行っている。絵をかく会とは、各学年の初めに全校が一斉に絵をかくことで、図画工作に対する興味や関心を高めたり、一人一人のよさを理解し合ったりすることをねらいとしている。6年生は検見川神社の絵を出展し、それぞれの教室前の廊下に展示した。(写真8)

展示期間内には、学年や学級ごとに作品を鑑賞する時間を設けた。6年生の作品を鑑賞した他学年の児童からは、「(背景の)木の枝の感じや木の光の当たり具合が素敵な絵でした。検見川神社は

自慢だと思いました。」「迫力がある絵でした。検見川の歴史がつまった神社だから、大切にしようという気持ちになりました。」という感想が聞かれた。このように、地域の伝統的な建造物を絵画の題材にすることは、描いた子にとっても絵を鑑賞した子にとっても地域への愛着を増す手立てになることがわかった。



写真8 絵をかく会での展示の様子

(3) 金管クラブによる例大祭での演奏

①金管クラブ「フレンズ」

本校は、金管クラブが開設されている。フレンズという名称で長く活動をしている本クラブは、4～6年生の希望者が集まり、トランペット、アルトホルン、トロンボーン、ユーフォニアム、チューバの5種類の金管楽器とパーカッションから成る楽団である。現在では、70名以上の部員で活動をしている。(写真7)



写真7 フレンズの練習の様子

児童らは、クラブ長や各パートリーダーを中心に、日々練習に励んでいる。異学年の交流を深めながら、一つの目標に向かって進んでいく楽しさを味わうことをねらいとして活動している。

②例大祭での演奏

フレンズには、年に数回演奏をする機会があり、その一つが検見川神社の例大祭である。祭りの中日、商店街の一角に設置された仮殿に祀られた神輿の前で、フレンズの児童らは校歌やポップスなどを演奏する。新型コロナウイルス感染症の流行により、数年間途絶えていた演奏の機会が令和5年より復活した。地域の方々も祭りを盛り上げるフレンズの演奏を待ち望みにしている。

例大祭に向けて、夏休みは毎日のように練習が行われた。今年は入部して間もない4年生も演奏するため、どの子も時間を惜しまず真剣に練習していた。



写真8 例大祭での演奏後の集合写真

例大祭当日、児童は暑さに負けずこれまでの練習の成果を十分に発揮することができた。演奏を終えた児童らは、家族や友達、地域の方々からの大きな拍手に包まれて、達成感でいっぱいの表情をしていた。6年生の児童は「皆が見ている中での演奏はとても緊張しました。今年は4年生も参加したので、楽器の割り振りなど大変なことも多かったけれど、今まで先輩が教えてくれたように優しく教えるようにしました。」「家族や友達と遊びに行っていた例大祭で演奏することは、とてもいい経験になりました。私が担当するパーカッションは観客との距離が近いので緊張しましたが、たくさんの人が拍手をしてくれて嬉しかったです。」という声が聞かれた。地域の行事の中で自分の頑張りを発揮できる場があることは、児童の成長を促すとともに、地域とのつながりを感じるよい機会になることがわかった。

4 研究の成果と課題

「検見川の地域を愛する子供」に関する2つのアンケート結果は以下の通りである。(表3)

(表3) 保護者による学校評価アンケート結果

内容項目	R5年度後期	R6年度前期	R6年度後期
検見川の子供たちが参加できる行事の情報は家庭に届いている。	3.39	3.49	3.38
子供たちは参加できる地域の行事に参加している。	2.29	2.40	2.30

※数値は4段階評価

結果からわかるように、令和6年度において、「子供たちは参加できる地域の行事に参加している」という項目については、前期に比べて後期は0.1ポイント下がっている。これは、本校の学区で行われる地域の一大行事が検見川神社の例大祭であり、そのため児童の行事への参加率も夏の方が高くなってしまうことが原因として挙げられる。一方、R5年度後期とR6年度後期を比べると、家庭に届いている情報量に対して児童の参加率が上がっている。このことから、地域の行事に参加する児童は年々増えていると考えられる。行事に参加する児童が増えることで、児童の地域への愛着は増していくだろう。

よって、今後も児童が例大祭と関わる機会を維持していくとともに、年間を通して地域と関わり続ける手立てを考えていく必要がある。

5 おわりに

3つの実践を通して、学校の教育活動を通して、児童が地域素材に触れることによって、地域への理解を促し、地域への親しみをもつ児童が増えた。児童の地域への愛着形成を促すために、地域の象徴ともいえる検見川神社を教材として学習に活用したり、祭りに金管クラブが参加したりすることは有効であることがわかった。

検見川神社の歴史は古く、これからこの地域の人々と共にあり続けるだろう。だからこそ、検見川神社を地域素材として効果的に活用する方法を模索し続けることは、地域と共に生きる学校づくりにつながると考える。

生成AIは中学校の日常をどう変えるか？

～Gemini API とプロンプトエンジニアリングによる教員業務の再構築と生徒の学びへの影響～

習志野市立第一中学校
教諭 濱 優 貴

1. はじめに—多忙な現場から見えた光明—

現代の教育現場においては、教員の多忙化が深刻な課題として認識されている。文部科学省の「教員勤務実態調査」（令和4年度）によれば、中学校教員の1週間あたりの平均労働時間は約57時間に達しており、生徒一人ひとりと丁寧に向き合う時間や、質の高い教材研究を行うための時間の確保が困難な状況にある。私自身、日々の業務に追われ、本来最も時間を割きたい生徒との関わりや授業準備が十分にできないというジレンマを常感じてきた。このような背景の中、新型コロナウイルス感染症の拡大を契機として教育デジタルトランスフォーメーション（DX）の推進が加速しており、その中で人工知能（AI）技術、特に生成AIの教育現場への活用に大きな期待が寄せられている。

私は、一人の公立中学校教員として、いかにして生徒と向き合う時間を増やし、教育の質を高めることができるかという問題意識を常に抱いてきた。この課題解決の手段として生成AIの可能性に着目し、本研究に取り組むことにした。本研究の目的は、Google の提供する生成AIである Gemini API や、AI への指示を工夫するプロンプトエンジニアリングといった技術を戦略的に活用することにより、教員の日常業務の劇的な効率化と授業改善や生徒指導といった教育活動の質的向上を実現する具体的な実践事例を報告し、その実践を通じて得られた効果と今後の課題を明らかにすることで、学校の実態を踏まえ、明日の教育を考える上での一助となることを目指すものである。私は Google for Education 認定トレーナーおよび AI 関連資格（AI+Edu fellow 等）取得者としての専門的知見を活かし、勤務する公立中学校での実践、検証を行った。

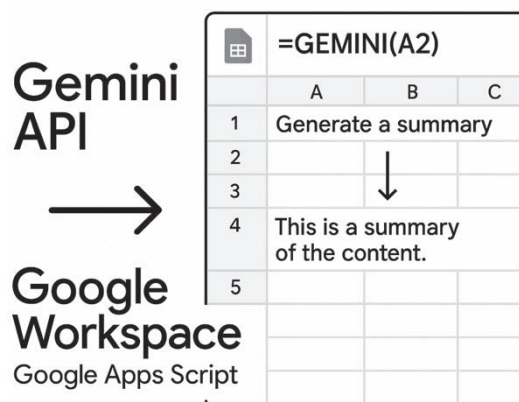
2. AI 導入への道—手探りの挑戦と小さな工夫—

私の勤務校は、必ずしも AI 活用に積極的な風土ではなかった。教員間には、新しい技術への期待よりも、操作の煩雑さや効果への疑問、さらには個人情報保護への

懸念といった声が少なからず存在した。しかし、増え続ける業務を前に、新たな手段を模索しないわけにはいかない。そこで、専門的な知識や高額な費用をかけずに導入できる Gemini API に目を付けた。日常的に使う Google スプレッドシート上で AI の支援が得られれば、現場の負担を減らせるのではないか。そんな思いから、まずは個人的な研究として AI 導入の第一歩を踏み出したのである。

この研究では、Google AI Studio から API キーを取得し、Google Apps Script（GAS）を使って、スプレッドシートと Gemini API を繋ぐ仕組みを自作した。GAS の記述は、私自身も試行錯誤の連続であったが、生成AIにコード作成を手伝ってもらったこともあった。具体的には、スプレッドシートの特定のセルに指示（プロンプト）を書き込むと、別のセルにAIが考えた文章が表示される「Gemini 関数」を開発した。これは、あたかもスプレッドシートにAIアシスタントが常駐するようなイメージで、教員が特別なスキルを必要とせずに利用できることを目指した。

（スプレッドシートと Gemini API の連携フロー）



3. 実践の記録—AI はこう使った—

試みは二つの方向で進めた。一つは日々の校務を効率化すること、もう一つは授業や生徒指導といった教育活動そのものを豊かにすることである。

3.1. 校務効率化—AI が生み出した「時間」—

(1) 道徳のフィードバック作成—10 時間が 3 時間に、そして質も—

道徳の授業後、生徒たちは Google Forms で自分の考えや感じたことを記述する。以前は、この一人ひとりの記述に目を通し、それぞれの考えを尊重しつつ、個別の言葉を返すのに、クラス全体で平均 10 時間近くを費やしていた。週末に持ち帰って作業することも少なくなく、次の授業準備に影響することもあった。そこで、Gemini 関数を活用。生徒の記述をプロンプトの一部とし、「この生徒の記述（題材：〇〇、振り返り：△△△）を読み、その素晴らしい点と、今後の成長のためにどのような言葉をかけますか。記述内容を具体的に引用しつつ、150 字以内で記述してください。」と AI に問かけると、「A さんの『友達の意見も大切だと分かった。以前は自分の意見ばかり主張していたが、これからは周りの声にも耳を傾けたい』という振り返りは、内省が深まっている証であり、とても尊いですね。次は、その気持ちを実際のグループワークなどで意識的に行動で示してみると、新しい発見があるかもしれませんよ。」といった、生徒の記述に寄り添った、温かみのある文案が数秒で生成された。もちろん、AI の文章をそのまま使うわけではない。A さんの個性や最近の様子、授業中の発言などを思い浮かべながら、「最近頑張っている部活動のチームワークと結びつけて励まそう。」

「あの時の少し遠慮がちな表情を思い出して、もっと自信を持っていいと伝えよう。」などと加筆修正を加え、血の通ったフィードバックに仕上げた。AI が骨子を作ることで、私はより生徒の心情に深く踏み込んだコメントを考える時間を得られたのである。

道徳の振り返り

生徒の回答に合わせた具体的なフィードバック

生徒の回答	AI の回答
私は、友達と遊ぶことが大好きです。でも、友達と遊ぶときは、友達のことを思いやることも大切です。	友達と遊ぶことが大好きなことが伝わってきます。友達と遊ぶときは、友達のことを思いやることも大切ですね。友達と遊ぶときは、友達のことを思いやることも大切ですね。
私は、友達と遊ぶことが大好きです。でも、友達と遊ぶときは、友達のことを思いやることも大切です。	友達と遊ぶことが大好きなことが伝わってきます。友達と遊ぶときは、友達のことを思いやることも大切ですね。友達と遊ぶときは、友達のことを思いやることも大切ですね。
私は、友達と遊ぶことが大好きです。でも、友達と遊ぶときは、友達のことを思いやることも大切です。	友達と遊ぶことが大好きなことが伝わってきます。友達と遊ぶときは、友達のことを思いやることも大切ですね。友達と遊ぶときは、友達のことを思いやることも大切ですね。
私は、友達と遊ぶことが大好きです。でも、友達と遊ぶときは、友達のことを思いやることも大切です。	友達と遊ぶことが大好きなことが伝わってきます。友達と遊ぶときは、友達のことを思いやることも大切ですね。友達と遊ぶときは、友達のことを思いやることも大切ですね。
私は、友達と遊ぶことが大好きです。でも、友達と遊ぶときは、友達のことを思いやることも大切です。	友達と遊ぶことが大好きなことが伝わってきます。友達と遊ぶときは、友達のことを思いやることも大切ですね。友達と遊ぶときは、友達のことを思いやることも大切ですね。
私は、友達と遊ぶことが大好きです。でも、友達と遊ぶときは、友達のことを思いやることも大切です。	友達と遊ぶことが大好きなことが伝わってきます。友達と遊ぶときは、友達のことを思いやることも大切ですね。友達と遊ぶときは、友達のことを思いやることも大切ですね。
私は、友達と遊ぶことが大好きです。でも、友達と遊ぶときは、友達のことを思いやることも大切です。	友達と遊ぶことが大好きなことが伝わってきます。友達と遊ぶときは、友達のことを思いやることも大切ですね。友達と遊ぶときは、友達のことを思いやることも大切ですね。
私は、友達と遊ぶことが大好きです。でも、友達と遊ぶときは、友達のことを思いやることも大切です。	友達と遊ぶことが大好きなことが伝わってきます。友達と遊ぶときは、友達のことを思いやることも大切ですね。友達と遊ぶときは、友達のことを思いやることも大切ですね。
私は、友達と遊ぶことが大好きです。でも、友達と遊ぶときは、友達のことを思いやることも大切です。	友達と遊ぶことが大好きなことが伝わってきます。友達と遊ぶときは、友達のことを思いやることも大切ですね。友達と遊ぶときは、友達のことを思いやることも大切ですね。

(2) 通知表所見—AI との二人三脚で、多面的な成長を記述—

通知表の所見作成も、AI と二人三脚で取り組んだ。生徒の自己評価や活動記録、私の観察メモ、各教科担当からの情報などをスプレッドシートに集約。これらの

情報を組み合わせ、「この生徒（性格：明るく協調性がある、得意教科：音楽、課題教科：数学、部活動：吹奏楽部パーカッション担当、係活動：学級委員）について、一年間の成長が分かるように、肯定的な視点から 200 字程度の所見を作成してください。学習面、生活面、特別活動での具体的なエピソードを盛り込んでください。」といった形で、詳細なプロンプトを作成。Gemini 関数で、「明るく協調性があり、常にクラスの雰囲気を和ませる存在です。音楽の授業では持ち前の表現力を発揮し、特に合唱では周囲をリードしました。課題であった数学にも粘り強く取り組み、以前よりも問題解決への意欲が高まりました。吹奏楽部ではパーカッションを担当し、練習に真摯に取り組む技術を向上させました。学級委員としては、行事の企画運営でリーダーシップを発揮し、クラスの意見をまとめる調整力も見せました。持ち前の探求心と周囲への配慮を活かし、次のステージでも大いに活躍してくれることを期待しています。」といった、多角的な視点からの所見文案を AI に作らせた。文体も「である調」や「ですます調」など指定できる。これを原案に、私が生徒の顔を思い浮かべながら言葉を磨き、一人ひとりの個性が輝くような、血の通った最終的な所見を完成させた。作業時間は従来の 5 分の 1 程度にまで短縮され、年度末の膨大な業務の中でも、比較的余裕を持って取り組むことができた。

調査票の所見

肯定的に「である...」

高校向け

中学生

200

タイムスタンプ	性別	学年	部活動	担任	生徒の自己評価	先生からのコメント
2024/09/25 10:24:02	男	1	吹奏楽部	田中先生	明るく、協調性がある。音楽の授業では積極的に参加し、合唱でもリードしていた。	明るく、協調性がある。音楽の授業では積極的に参加し、合唱でもリードしていた。

=TEXTJOIN(" ",true,C7:G7)&"などの特徴を持つ"&\$G\$2&"の"&\$A\$2&"を"&\$C\$2&"、"&\$E\$2&"、"&\$H\$2&"文字程度で書いてください

所見作成画面

Google for Education

明るい性格で誠実な生徒である。学業では社会と国語を得意とし、学級委員としてクラスを円滑にまも上げた。また、吹奏楽部では熱心に取り組む、東関東大会で金賞を受賞するほどの成果を収めている。市立船橋高校の吹奏楽部への強い志望を持っており、本人の積極性と真面目さを考慮すると、部活動と学業の両立が十分に期待できる。

3.2. 教育活動の充実—AI が広げた「視点」と「可能性」—

AI の能力を最大限に引き出すためには、AI への指示、すなわち「プロンプト」の設計が極めて重要となる。どのような言葉で、どのような情報を与え、どのような役割を期待するかによって、AI の出力の質は大きく変わる。本研究では、教育活動の質的向上を目指し、特定の役割（ペルソナ）や



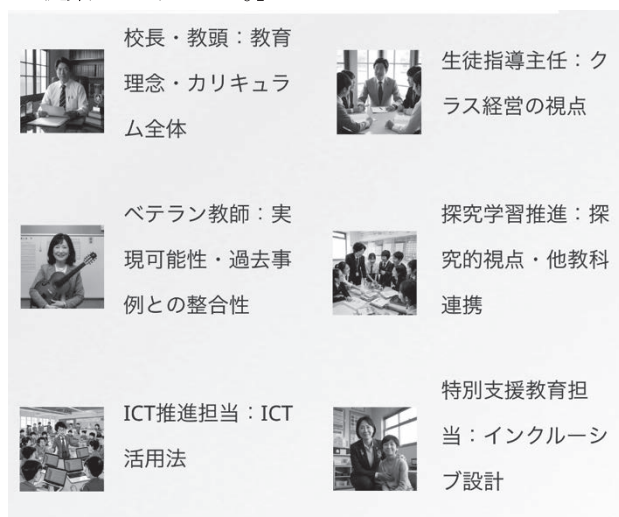
思考プロセスをAIに与える「プロンプトエンジニアリング」の技術を活用した。

(1) 授業改善プロンプト—AIが音楽科の専門家チームに、そして新たな教材も—

私は音楽科の教員である。学習指導案の作成は、自身の経験や限られた資料に頼ることが多く、時に自己完結的になってしまうという課題を感じていた。より多角的で質の高い学習指導案を作成するため、AIに複数の専門的視点を持つ「ペルソナ」を設定し、具体的なフィードバックを求めた。

例えば、2年生の合唱指導（楽曲「〇〇」）の学習指導案を作成した後、AIに対し次のようなプロンプトを入力した。

「以下に示す6人のペルソナの視点で、授業の改善策を提案してください。」



(図2: AI ペルソナによる音楽科授業分析のイメージ)

これらのプロンプトに対し、AIは、「導入部分で、生徒の興味を引くために、現代のポップスで同じテーマを扱った楽曲と比較させ、歌詞に込められた普遍的なメッセージについて生徒に考えさせるのはどうでしょうか。」「グループワークでは、各パートの役割や表現のポイントについて話し合わせ、その結果を発表する時間を設けることで、主体的な学びを促せます。その際、評価規準を事前に示すことが重要です。」「ICT活用としては、作曲者自身が演奏している歴史的な映像資料をYouTubeで視聴させ、当時の演奏様式や作曲者の思いに触れさせるのは効果的です。また、オンライン楽譜サイトで、異なる時代の演奏を比較試聴させることも、楽曲解釈の多様性を理解する上で有益でしょう。」といった、具体的で実践的なフィードバックを生成した。これら

の多角的な視点からの助言は、自分一人では思い至らなかった新たな気づきを与えてくれ、授業の質を大きく向上させる可能性を感じることができた。

(2) 校外学習しおりプロンプト—AIによる多角的チェックで安全・充実の行事へ—

校外学習や修学旅行といった行事計画や「しおり」の作成は、多岐にわたる情報を網羅し、かつ安全面や教育的配慮を徹底する必要がある、非常に神経を使う業務である。引率教員の役割分担、緊急時の連絡体制、アレルギーを持つ生徒への対応、訪問先の危険箇所や避難経路の確認、そして各活動の教育的意義の明確化など、考慮すべき点は無数に存在する。従来は、担当者が作成した原案を、複数の教員や管理職がそれぞれの視点からチェックし、修正を重ねるという時間のかかるプロセスを経ることが多かった。

そこで、この業務の効率化と質の向上を目指し、AIに多様な校内役職のペルソナ（教頭、生徒指導、養護教諭等）を設定してフィードバックを求めるプロンプトを活用し具体的な改善提案をAIに求めた。

AIからのフィードバックには、「緊急連絡先として、現地の警察署や消防署の電話番号だけでなく、最も近い総合病院の連絡先と地図も明記すべきである。」「食物アレルギーを持つ生徒の宿泊先での食事メニューについて、具体的な対応内容を事前に確認し、しおりにもその旨を記載することで、保護者の安心に繋がる。」「班別行動の際、各班にリーダーと安全係を明確に指名し、それぞれの役割をしおりに記載することで、生徒の責任感を高めるとともに、安全意識の向上も期待できる。」といった、具体的かつ実践的な指摘が含まれていた。これにより、計画の初期段階で潜在的な問題点を発見し、手戻りを減らしつつ、より安全で教育的価値の高い行事計画を効率的に作成することができた。

(3) 生徒指導プロンプト—AIと考える次の一手、そして記録の補助も—

生徒指導、特に生徒間のトラブル対応は、その対応が個々の教師の経験や力量に大きく左右され、時に対応に迷いが生じるという課題があった。初期対応の適切さが、その後の問題解決に大きく影響することも少なくない。本実践では、より客観的で多角的な視点から対応策を検討する支援ツールとしてAIを活用した。

具体的には、発生したトラブルの概要（例：「休み時

間にAがBの悪口を言い、Bが泣いてしまった。Aは『冗談のつもりだった』と言っている。周囲には他の生徒もいた。』)をAIに入力し、「生徒指導提要」を参考にしつつ、「この状況において、Bの心のケアを最優先としながら、Aに対しては自身の言動の不適切さを理解させ、再発防止に繋げるための対応策を、直接指導型、仲介型、環境調整型、外部連携型の4つのアプローチからそれぞれ具体的に提案してください。各アプローチのメリット、デメリット、そして具体的な声かけの例も示してください。」と指示した。

この際、AIに論理的かつ多角的な思考を促すため、Chain-of-Thought (CoT) Prompting (思考の連鎖を明示的に生成させる手法) や Tree-of-Thought (ToT) Prompting (複数の思考経路を探索・評価させる手法) といった高度なプロンプトテクニックの導入も試みた。

AIは、「【直接指導型】Aに対し、Bの気持ちを想像させ、自分の言葉が相手を傷つけたことを理解させる個別指導を行う。メリット:Aの深い反省を促せる。デメリット:Aが反発する可能性。声かけ例:『A君、Bさんがどんな気持ちになったか想像できるかな?君の言葉が、相手にとってどれだけ重いものだったか一緒に考えてみよう。』」「【仲介型】教師がファシリテーターとなり、AとBが対話する場を設ける。メリット:相互理解を深められる。デメリット:感情的になり、解決に至らない可能性。…」といった形で、複数の対応アプローチとそれぞれの具体策、メリット・デメリット、さらには具体的な声かけの例までを整理して提示してくれた。これにより、特に経験の浅い教員であっても、多様な選択肢とその背景を理解した上で、状況に応じたより適切な判断を下すための一助となることを期待した。さらに、事後の記録作成においても、AIに「上記の対応経過を、生徒指導記録として簡潔にまとめてください。」と指示することで、客観的な記録の原案を得ることができ、記録業務の負担軽減にも繋がった。

4. 実践の成果と考察—AIは教育現場に何をもたらしたか—

4.1. 「時間」と「心」の余裕—教員の働き方の変化と課題—

AIの導入は、私の仕事の進め方を大きく変えた。道徳のフィードバック作成時間は約3分の1、平均10時間から3時間へ、通知表所見作成時間は従来の約5分

道徳の振り返り フィードバック作成時間:

平均10時間 → 約3時間!

一人ひとりに向き合ったフィードバックをじっくり考えて書くことができて、授業準備にゆとりができました。

5年目教員



の1へと劇的に短縮された。校外学習のしおり作成にかかる時間も、AIに校内の様々な役職の視点からチェックさせることで、約3分の1に削減できた。単に作業時間が減っただけではない。以前は夜遅くまでかかっていた仕事の日中に終わらせるようになり、精神的な余裕が生まれた。この余裕は、新たな教材研究に取り組む意欲や、生徒一人ひとりとじっくり関わるためのエネルギーにも繋がったと感じている。

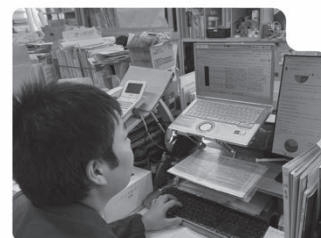
同僚の先生は、「AIでこんなに楽になったと聞いて、最初は半信半疑だった。でも、実際に通知表の所見作成で試させてもらったら、本当に時間がかからなくて驚いた。これで少しは早く帰れるかな。」と話していた。

しかし、校内全体でAI活用が積極的に進んだわけではなく、私の試みを知る一部の教員が関心を示した、という程度に留まっているのが現状である。新しい技術への抵抗感や、操作習得への時間的・心理的ハードル、そして何よりも日々の業務に追われて新しいことに取り組む余裕がない、といった現場の課題も浮き彫りになった。

通知表所見作成時間:

5分の1に短縮!

時間短縮だけでなく、表現の幅も広がり、より質の高い所見を作成できるようになりました。心に余裕ができたことが一番嬉しいです!



4.2. 教育の質への波及効果—生徒たちの変化の兆しと音楽科での手応え—

創出された時間は、生徒と向き合う活動や教材研究に充てることができた。AIの助けを借りて多角的に検討した音楽の授業は、生徒の反応も変わってきたように感じる。2年生の器楽合奏の授業で、AIから「各楽器の特性を活かしたアレンジのアイデアを生徒自身に考えさせ、それをグループで共有し、試行錯誤する過程を重視してはどうか。例えば、主旋律をどの楽器が担当するか、対旋律をどう加えるか、リズムのパターンをどう変えるかなど、具体的な問いかけをしてみると良い。」

という提案を受けた。従来の一斉指導中心の進め方から、生徒主体の活動を取り入れた結果、普段は控えめな生徒 C さんが「この部分の旋律を、鍵盤ハーモニカで軽やかに演奏したら曲の雰囲気がもっと明るくなると思う。ギターでキラキラした音を重ねるのはどうかな。」と積極的に意見を述べ、クラス全体でそのアイデアを試す場面が見られ、生徒たちが主体的に音楽を創り上げていく喜びを感じている様子が伺えた。これは、AI による多角的視点が、結果的に生徒の創造性や協調性を引き出す一助となった例と言える。

AI が生成したフィードバックに対し、生徒 D さんは「先生が私の歌の良かったところ（例：声がよく通っていて、歌詞の気持ちが伝わってきたこと）を具体的に褒めてくれて嬉しかった。苦手な部分（例：高音部分の音程が少し不安定なところ）も、どうすれば良くなるか（例：息継ぎの場所を工夫する、口の開け方を意識する）アドバイスをもらえたので、次の練習で試してみたい。」と振り返りシートに書いていた。AI が下書きをしたとはいえ、最終的には私が手を加えた言葉である。しかし、AI のおかげで一人ひとりの演奏や歌唱に対して、より具体的で丁寧な対応ができるようになったことが、生徒の音楽への意欲や技能向上に繋がったのかもしれない。

4.3. AI 活用の光と影—忘れてはならないこと、そして倫理観—

AI は強力なツールだが、万能ではない。その限界とリスクを常に意識する必要がある。AI の生成物はあくまで「下書き」であり、教育的な判断や責任は全て教師が負う。例えば、AI が生徒の音楽活動の所見として「E さんはリズム感がやや乏しいですが、努力はしています。」と生成してきた場合、その表現が生徒の自己肯定感を損なうことにならないか、慎重に吟味し、「E さんは、より正確なリズムで演奏できるようになるために、現在熱心に、そして着実に力をつけています。」と言い換えるなどの配慮が不可欠だ。言葉一つで生徒の心は大きく動くことを、教師は決して忘れてはならない。

ハルシネーションと呼ばれる、AI がもっともらしい嘘をつく現象にも注意が必要だ。音楽史上の出来事や作品解説について AI に尋ねた際、事実と異なる情報が提示されることもあった。情報の真偽は、必ず複数の信頼できる資料（専門書、学術論文、信頼性の高いウェブサイト等）で確認する。個人情報や著作権の扱いも、細

心の注意を払った。生徒の作品や演奏を AI に入力する際には、その範囲や目的を明確にし、必要な許諾を得るなどの倫理的な配慮も重要となる。これらの AI リテラシーは、教師自身が継続的に学び続け、常にアップデートしていく必要がある。

5. おわりに—AI と歩む、これからの教育、そして音楽教育の未来—

この研究と実践は、生成 AI を活用して業務を効率化し、教育の質を高められる可能性を示した。特別な予算や専門家がなくても、既存の ICT 環境と教師の創意工夫があれば、AI は教育現場の力強い味方になり得る。開発したプロンプトや GAS のコードは、他の学校でも応用できるだろう。（2 ページ QR コード参照）

今後の課題は、この試みを、より多くの教員が共有し、活用できるような仕組みづくりである。そのためには、成功事例の共有や研修の機会、そして、AI に対する正しい理解と、それを前向きに活用しようとする校内文化の醸成が不可欠である。特に音楽科においては、AI を作曲や編曲の支援ツールとして活用したり、生徒の演奏を分析してフィードバックを得るためのツールとして活用したりするなど、さらなる可能性が考えられる。

生徒たち自身が、AI を賢く使いこなす力を育むことも、これからの教育の重要な使命だ。AI を単なる「答えを出す機械」ではなく「自分の考えを深め、新しいものを創り出すためのパートナー」として捉えられるように導きたい。音楽教育においても、AI を創造的な表現活動を支援するツールとして位置づけ、生徒の個性や感性をより豊かに育むための活用法を模索していく必要がある。

生成 AI は、まだ発展途上の技術である。しかし、その可能性は計り知れない。教師が AI と上手に関わり、その力を教育に活かしていくことで、子どもたちの未来はもっと豊かになる。私はそう信じている。今後も、AI と教育、そして愛する音楽教育のより良い関係性を模索し、生徒たちの心に響く実践を続けていきたいと考えている。

【参考文献】文部科学省（2024）

『教員勤務実態調査（令和 4 年度）【確定値】概要版』
https://www.mext.go.jp/content/20240404-mxt_zaimu01-100003067-1.pdf

学習意欲を高め「伝える力」を伸ばす指導と評価

～ルーブリックの提示と振り返りを通して～

流山市立東小学校

教諭 平田

彰

1 はじめに

(1) 研究の背景

これからの予測困難な時代において、児童が自らの人生を切り拓いていくためには、主体的に学ぶ姿勢を身に付けることが重要である。そのために、学校教育において、知識や表現力を身に付けさせるだけでなく、学習意欲を高め、自ら学び考える児童を育成するための指導と評価が求められている。本校でも、学校教育目標に「進んで取り組み、学びを高め合う児童の育成」と掲げているように、全教職員で自ら進んで学ぶ児童の育成を目指している。

しかしながら、本校の児童の主体的に学ぶ姿勢には課題があることが、調査結果より明らかになっている。令和5年度全国学力・学習状況調査の質問紙調査、質問33「授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」では、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と肯定的に回答した児童の割合が71%だった。全国平均である78%よりも7ポイント低い数値となっており、本校に勤務している教職員も進んで学ぶ児童を育成するために、どのように指導すればよいか、悩んでいる現状である。

そこで、本研究では外国語科の授業を中心に、知識や表現力を身に付けさせながらも、児童の学習意欲を高めるために、指導と評価の改善を図りたいと考えた。

(2) 主題設定の理由

本研究では、外国語科「話すこと（やり取り）」の学習において、単元の学習到達目標に基づき作成した評価基準を、単元の初めの段階でルーブリックとして児童に提示し、指導プロセスの中で基準に応じ学習状況を振り返らせる指導を行う。この指導が、児童の外国語科の学習に対する意欲を高められるか、そして、児童の「伝える力（英語運用能力）」を伸ばすことができるか、を検証する。

本研究における「ルーブリックの提示」とは、「単元の学習到達目標に基づき作成した評価基準・評価目的

を、児童がわかりやすい表現を用いながらルーブリックにまとめ、内容とゴールを授業者と児童で理解し、共有すること」とする。単元の学習到達目標と、その評価基準であるルーブリックを、授業者と児童で共有することによって、授業者は指導内容や目的をより明確に意識しながら授業を展開できるのか。また、学習者はゴールを見据えて、学習状況を振り返りながら、深い学びへとつなげることができるのか。こうした課題の解決を研究動機とし、ルーブリックを提示するというアプローチが、主体的に外国語科を学ぼうとする児童を増やし、英語で「伝える力」を伸ばすための指導改善につながると考え、本主題を設定した。

2 研究の概要

(1) 先行研究

鈴木(2011)は、ルーブリックを提示し、評価基準・評価目的を児童に具体的に示すことによって、学習の動機づけを高めたり、児童の適切な学習を方向付けたりする効果があると明らかにしている。また、小林(2018)は、評価基準・評価目的をルーブリックにまとめ、単元の学習を行う前に学習者に示すことにより、生徒のスピーキング力や学習意欲を高める効果があると明らかにしている。

しかしながら、鈴木の実践は実験的な学習教室で行われたものであり、小林の実践も対象が中学校第1学年の生徒に限定されていて、児童を対象に行われていない。2つの実践は、研究の参加者が限られている、という課題がある。ゆえに、本研究では小学校外国語科において実践に取り組み、指導の効果を検証する。

(2) 研究仮説

小学校外国語科「話すこと（やり取り）」の学習において、児童にルーブリックを提示し、基準に応じて学習の状況や達成度を振り返らせる指導によって、児童の主体的に学習に取り組む態度及び「伝える力（英語運用能力）」を高めることができるだろう。

(3) 方法

① 参加者

本研究における参加者は、本校の第5学年の児童93名、第6学年の児童96名とする（令和6年度時）。

② 実践と検証の概要

実践と検証は以下の手順で行い、児童の質問紙調査、児童の振り返りの記述と「伝える力（英語運用能力）」の測定を検証の対象とした。

- ア 外国語科「話すこと（やり取り）」領域における単元の学習到達目標を基に、第5学年、第6学年、それぞれの単元についてルーブリックを作成する。
- イ 参加する児童を対象に、事前質問紙調査と事前英語運用能力の測定を行う。英語運用能力の測定については、「話すこと（やり取り）」領域における既習単元の成績を基に、授業者が児童を上位（A）・中位（B）・下位（C）にグルーピングし、それぞれのグループごとに6名の児童を抽出する。
- ウ 先述の単元において、第5学年・第6学年それぞれの児童を対象に、実践授業を行う。
- エ 単元を指導する過程で、児童に学習の状況や達成度を振り返らせ、学びの様子や変容、気づきを文章で記述させる。記述した文章は、児童間でも共有できるようにする。
- オ 検証授業の1週間後に事後質問紙調査と事後英語運用能力の測定を行い、結果と変容を検証する。

(4) 実践の詳細

① 実践授業

本研究における実践授業は、本校の第5学年及び第6学年の児童を対象に、以下の単元で令和6年度の6月～7月にかけて行った。第5学年の実践授業は、筆者が行い、第6学年の実践授業は、ふだん外国語科の授業を担当している第6学年の教員が行った。

- ・第5学年 東京書籍 *NEW HORIZON Elementary English Course 5 Unit3*
- ・第6学年 開隆堂 *Junior Sunshine 6 Lesson3*

② ルーブリックの作成と提示

実践授業を行った各単元で、学習到達目標に基づくゴールとルーブリックを作成し、児童に提示した。以下の図1は第5学年、図2は第6学年で作成したルー

ブリックである。

Goal 友だちや先生のことをもっと知るために、できることやできないことを伝え合うことができる。

Stage1	友だちや先生ができること・できないことを、的確に素早く聞き取り、伝え合い、自分の気持ちも表現できる。
Stage2	1人で、友だちや先生と、できること・できないことを伝え合うことができる。
Stage3	1人で話したり聞いたりするのは自信がないけれども、先生や友だちの助けがあれば伝え合うことができる。
Stage4	友だちや先生と、できること・できないことを伝え合うのはサポートがあっても難しい

図1 第5学年 Unit3 ルーブリック

Goal クラスの友だちのことを知るために「理想の誕生日のスケジュール」について、尋ねたり、答えたりすることができる。

1級	友だちや先生の「理想の誕生日のスケジュール」について、必要な情報を的確に素早く聞き取り、はっきりと尋ねたり答えたりして伝え合い、自分の気持ちも表現できる。
2級	友だちや先生の「理想の誕生日のスケジュール」について、必要な情報を聞き取り、尋ねたり答えたりして伝え合い、自分の気持ちも時には加えながら表現できる。
3級	1人は自信がないけれども、先生や友だちの助けがあれば、尋ねたり、答えたりして伝え合うことができる。
4級	先生や友だちの助けがあっても、尋ねたり、答えたりして伝え合うのは難しい。

図2 第6学年 Lesson3 ルーブリック

本研究では、小学校英語教育研究会(2024)で示されている実践例を参考にしながら、単元の学習到達目標を基に、児童がわかりやすい表現を用いてルーブリックを作成した。ルーブリックは4つの段階で作成し、段階をどのような言葉で表現するかも、児童の学習意欲をより高めるために工夫している。第5学年では「Stage」、第6学年では「級」と表現した。このように作成したルーブリックを児童一人ひとりに配付し、

ふだんの授業で児童が使っているフラットファイルに直接貼付させ、単元全体を通して児童自らルーブリックを確認しながら、学習に取り組んだり、振り返りを行ったりできるようにした。

(5) 検証の詳細

① 質問紙調査

事前・事後の質問紙調査により、指導によって児童の学習意欲を高めることができたか、の検証を定量的に行うことができたようにした。質問紙の設問内容は以下のア～エの4つとし、それぞれ4件法（4 そう思う 3 まあまあそう思う 2 あまり思わない 1 思わない）で回答させ、理由も記述できるようにした。

ア ルーブリックは、英語で自分の思いを伝える力を高める役に立つと思いますか？

イ ルーブリックを授業の前に見ると、ゴールが明確になり、英語でもっと伝えたい、という気持ちになりますか？

ウ ルーブリックを再確認しながら「振り返り」をすると、自分ができたところとできなかったところが明らかになり、自分の英語での発話に役立ったと思いますか？

エ ルーブリックを見て「振り返り」をすると、英語でもっと伝えたい、という気持ちになりますか？

② 「伝える力（英語運用能力）」の測定

「伝える力（英語運用能力）」の検証のために、グループごとの抽出児童に対して、テーマに沿って授業者と1分間英語を使って会話させ、token（総語数）を測定した。テーマは単元の学習内容に基づき、授業者が設定し、第5学年は「できることやできないことを伝え合おう」、第6学年は「日常生活について伝え合おう」とした。同じテーマで、単元の指導を始める前と、終了後で実施し、児童一人ひとりの発話内容は、児童の保護者の許諾を得た上で録音した。その後、録音した内容を文字起こし、token を測定した。

③ 振り返りシート

児童が本研究の手立ての1つである振り返りを行えるようにするために、「振り返りシート」を作成した。単元全体を通して、授業終了5分前を目安にシートを配付し、児童に直接記述させながら、振り返りを行えるようにした。また、シートはファイルに綴じ、前時

に記述した内容も、児童自ら確認しながら記述できるようにした。以下の図3は、実際に実践授業で児童に配付した「振り返りシート」である。

① ルーブリックを見ながら、今日の授業をふり返りましょう。Yesに○がついたら、答えるのは終わりです。

	質問	○をつけましょう
Stage1 (1級)	自信をもって正しくはっきり話せそうですか？	Yes No
Stage2 (2級)	「間違いかも」と思うけど、なんとか話せそうですか？	Yes No
Stage3 (3級)	単語だけになっても英語らしく話せそうですか？	Yes No
Stage4 (4級)	助けがあってもうまく話せなさそうですか？	Yes

② 上の Stage(級)にあがるために、どうしたらよいと思いますか？

図3 振り返りシート

④ 半構造化面接

質問紙調査において、各質問に対し事前は1、事後は4と回答する等、2ポイント以上大きな変容が見られた児童に対して、授業者と半構造化面接（インタビュー）を実施し、変容した理由を児童自身がどのように認識しているかを確かめた。面接は、単元の指導が終了してから、約1週間後に行った。また、面接の内容は児童の保護者の許諾を得た上で録音し、分析した。面接を行い、ルーブリックの提示と振り返りの指導が、児童の主体的に学習に取り組む態度及び「伝える力（英語運用能力）」を高められるかを、質的に検証できるようにした。

3 検証結果

(1) 質問紙の検証結果

質問紙調査の結果を基に、児童の主体的に学習に取り組む態度の変容を定量的に明らかにした。ア～エの4つの質問に対して4件法で回答した結果を、それぞれ4点・3点・2点・1点と数値化し、以下の表1、表2に、結果の平均値と有意な変容であるかを確かめるために行ったt検定の結果をまとめた。

表1 第5学年 質問紙調査の検証結果
第5学年(N=94 n=93)

	事前 平均(SD)	事後 平均(SD)	t(93)	p (両側)
ア	3.28(0.76)	3.58(0.59)	4.03	**
イ	2.88(0.90)	3.43(0.76)	6.40	**
ウ	3.06(0.84)	3.47(0.71)	4.54	**
エ	2.86(0.95)	3.39(0.81)	6.05	**

* $p < 0.05$ ** $p < 0.01$

表2 第6学年 質問紙調査の検証結果
第6学年(N=99 n=96)

	事前 平均(SD)	事後 平均(SD)	t(96)	p (両側)
ア	3.25(0.83)	3.26(0.59)	0.12	有意差なし
イ	2.81(0.99)	3.00(1.06)	2.13	*
ウ	2.98(0.87)	3.18(0.86)	2.27	*
エ	2.72(1.00)	3.03(0.95)	3.06	**

* $p < 0.05$ ** $p < 0.01$

t 検定の結果、第5学年と第6学年のどちらにおいても、ほとんどの設問で有意な変容が認められた。よって、児童にルーブリックを提示し、学びの状況や達成度を振り返らせる指導は、児童の主体的に学習に取り組む態度を高める効果がある、と定量的に明らかにすることができた。

(2) パフォーマンステストの検証結果

「伝える力(英語運用能力)」の変容を測るために行ったパフォーマンステストの結果を以下のグラフにまとめた。上位(A)・中位(B)・下位(C)それぞれのグループの平均値の変容と、有意な変容であるかを確かめるために行ったt検定の結果をまとめている。

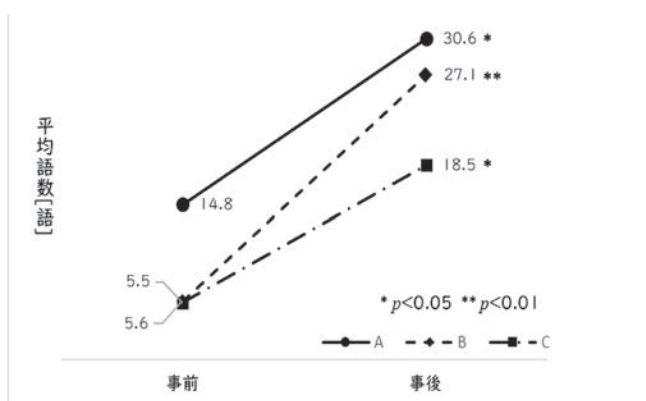


図4 tokenの変容とt検定の結果

グラフからわかるように、既習単元の習熟度に関係なく、全てのグループで有意な変容が認められた。

また、本検証の対象者の中で、最も大きく変容した第5学年A児童が行った、パフォーマンステストの記録を以下の表3に示す。A児童は事前のtokenが5だったの対し、事後では28と大きく増加した。事後の記録からも「Can you〜?」や「How about you?」といった、本単元で身に付けるべき表現を正しく用いて、授業者とやり取りできていることがわかる。

表3 第5学年A児童のパフォーマンステスト記録
(token 事前 5 → 事後 28)

【事前】 教師(teacher)	児童(student)
Hi	Hi
Can you play soccer?	(無回答)
Can you play basketball?	No.
I can play basketball.	
Do you like Takoyaki?	Yes.
Can you play the piano?	わかんない
Thank you.	Thank you.
【事後】 教師(teacher)	児童(student)
Hi	Hi
Can you play the piano?	No, I can't. How about you?
Yes, I can. I like the piano.	
Can you run fast?	Yes, I can. How about you?
No, I can't.	Oh, I see.
Thank you.	Can you swim fast?
So-so ... Yes, I can. How about you?	Yes, I can.
No, I can't. I don't like cooking. How about you?	Can you cook?
	No, I can't.

以上の結果から、提示されたルーブリックを基に学びの状況や達成度を振り返らせる指導は、児童の「伝える力(英語運用能力)」を高めるのに有効である、と定量的に明らかにすることができた。

(3) 振り返りシートの検証結果

① 記述内容の変容と考察(第5学年)

先述のtokenが大きく増加した第5学年のA児童が記述した振り返りシートの内容を示す。A児童は、「上

の Stage にあがるために、どうしたらよいと思いますか？」という質問に対して、第1時は「努力する。」のみ記述していた。その後、第4時では「自分からできることやできないことをまちがってもいいから自信をもっていう。」と記述できるようになった。特に、第4時では振り返りシートの基準に示されている「自信をもって」を自ら確認して記述していると考えられる。ゆえに、A 児童は振り返りシートを用いて、学習を振り返る活動により、どのように学習に取り組むかを、自らより具体的に考えることができるように変容した、と捉えられる。

② 記述内容の変容と考察 (第6学年)

第6学年のB 児童は「上の級にあがるために、どうしたらよいと思いますか？」という質問に対して、第2時の振り返りシートに「言って練習する。」と記述していた。その後、第7時では「声を出しながら、自分の原稿を言う。」と記述していた。また、B 児童は質問紙の設問エ「ルーブリックを見て『振り返り』をすると、英語でもっと伝えたい、という気持ちになりますか？」で、事前は「1 思わない」と回答していたが、事後は「4 まあまあ思う」と回答していた。事後の回答理由を尋ねると「次の時間に（自分のよくないところを）直そうという気持ちになる」と答えていた。ゆえに、B 児童は、自分の力を伸ばすために振り返りを生かし、練習の仕方を具体的に考えるように変容した、と捉えられる。

(4) 半構造化面接の検証結果

① 抽出児童の変容 (第5学年)

第5学年のC 児童は、質問紙のアの設問に回答した数値が事前は1、事後3と変容した。変容した理由を確かめるために、本児と面接を行った。本児に「なぜ変わったのか？」と尋ねると「(ルーブリックが) 必要だと思ってきたから。」と答えた。更に「なぜ必要だと思ったのか？」と尋ねると「発表とかに役立つと思った。」と答えた。回答内容から、本児がルーブリックの必要性を見だし、どのように役立てればよいかを自ら考えることができるように変容した、と捉えられる。

② 抽出児童の変容 (第6学年)

第6学年のD 児童は、質問紙のイの設問に回答した数値が事前は1、事後4と大きく変容した。変容した

理由を確かめるために、本児と面接を行った。本児に「変わった理由は？」と尋ねると「やっているうちに(ルーブリックの) 上を目指したいと思った。」と答えた。また、本児は授業の中で、授業者の指示と関係なく、自ら単語の発音練習を行っていた。その理由を尋ねても「上を目指したいと思ったから。」と答えた。ゆえに、ルーブリックを提示するというアプローチによって、本児は主体的に学習に取り組む態度が高まり、どのように学習すればよいか、を自ら考えて実際に行動できるように変容した、と捉えられる。

4 研究成果

小学校外国語科「話すこと(やり取り)」の学習において、児童にルーブリックを提示し、基準に応じて学びの状況や達成度を振り返らせる指導が、児童の主体的に学習に取り組む態度及び「伝える力(英語運用能力)」を高める、と明らかにすることができた。

5 おわりに 今後の課題

本研究を通して「話すこと(やり取り)」の領域でのルーブリックの提示と振り返りの有効性を示すことができたが、他領域で有効性を示すことはできていない。今後も実践を積み重ね、ルーブリックの提示と振り返りの有効性を幅広く明らかにし、小学校外国語科における「学びに向かう力、人間性等」の指導と評価の一体化の実現を目指していきたい。また、他教科の授業においてもルーブリックの提示や振り返りが有効であるかを確かめ、指導と評価の改善を積み重ねていきたい。本研究の成果を生かし、今後も学校全体で、自ら進んで学ぶ児童の育成を目指していく。

6 参考文献

鈴木雅之(2011)．「ルーブリックの提示による評価基準・評価目的の教示が学習者に及ぼす影響—テスト観・動機づけ・学習方略に着目して—」『教育心理学研究』59, 131-143.

小林翔(2018)．「ルーブリックの提示順序がスピーキング力・学習意欲に及ぼす効果—中学1年生のインタビュー活動を通して—」『茨城大学教育実践研究』37, 139-154.

小学校英語評価研究会(2024)．『デジタル時代における小学校英語 Can-Do 評価尺度活用マニュアル〜学びを支援する単元をつなぐ Can-Do 評価試案』, 1-7.

定時制の課程の実態に則した「総合的な探究の時間」の取組

～プレゼンテーションをととして生徒の「生きる力」を育む～

千葉県立木更津東高等学校定時制

教諭 戸 張 誠 也

1 はじめに

本校定時制の課程は、現在は1～4年次で97名の生徒が在籍している。

重点目標として『「なれる」自分から「なりたい」自分へ～あなたのその夢、全力でサポートします～』を掲げ、基本的な生活習慣と思いやりの心を育み、責任感とモラルを重んじる実践力のある人材の育成を目指している。重点項目は「学ぶ力の育成（分からないことが分かり、それを伸ばす）」「常に向上心を持ち、考え抜いて行動する生徒の育成」「進路実現により将来を生き抜く力の育成」「人間力の育成（対話を通じた人間関係構築力の育成）」と定めている。

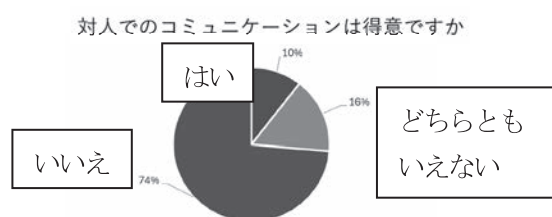
2年次より「普通コース」と「商業コース」に分かれ、「普通コース」では、普通科目を中心に基礎知識を広げ、「商業コース」では、社会人として必要なビジネスマナーを中心に学び、「簿記」や「情報処理」などの資格を取得することができる。

2 主題設定の理由

（1）高校生のコミュニケーション能力の低下

現在、少子化や核家族化、地域社会との希薄化、SNSの普及など、様々な要因が複合的に影響し、対面して人と接する機会が減っていることや、内向的な傾向が強まっていることなどが指摘されており、高校生のコミュニケーション能力の低下が問題視されている。

該当年次の生徒（※男9、女10）が1年次の1学期時にアンケートで「対人でのコミュニケーションは得意ですか」との質問に対し、「はい」と回答割合は10.5%、「どちらともいえない」と回答割合は17.7%、「いいえ」と回答割合は73.6%であった。



【図1】 該当年次のアンケート結果

高校生のコミュニケーション能力は、将来の人間関係や社会生活に大きな影響を与えるため、早期からの対策が重要であり、学校や家庭、地域社会が連携し、コミュニケーション能力を向上させるための取組を進める必要があると考える。また、本校の重点項目を達成するために、着目したのがプレゼンテーションで得られる資質である。プレゼンテーションでは、相手に内容を理解してもらうために、相手の目線に立って話し、内容を簡潔かつわかりやすく説明する必要がある。相手の反応を見て、状況に合わせて柔軟に話を進めることも重要である。これらの経験を通じて、相手との意思疎通能力や、自分の考えを効果的に伝える力の向上が期待できる。そのため本研究ではプレゼンテーションを通じて、自らの考えを他者に発信する情報発信能力の向上により、対人でのコミュニケーション能力に変化が生じるかを研究する。

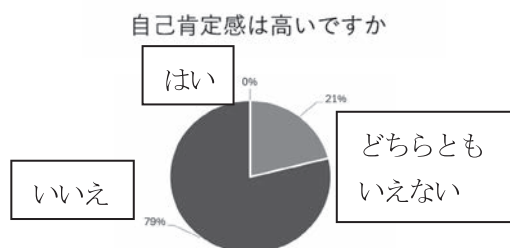
（2）学校の実態

本校に在籍している生徒は、義務教育段階で特別支援学級に在籍していた者や、様々な理由で不登校を経験した者が大多数である。そういった経緯から、例年「プレゼンテーションの資料を作成し、発表する」といった試みは、対人トラブルの可能性や資料作成の進捗状況から、実施を嫌煙する教員も多いのが現状である。その中で、実際に情報機器を用いてプレゼンテーションを実施し、生徒自身が苦手としている取組を行うことで「自分にもこんなことができた」「こんな資料を作成できた」などの自信（自己肯定感の向上）にも繋がり、心情に変化が生じるかを研究する。また、それに伴って研究の結果から、他の教員が少しでも「定時制でもプレゼンテーションを取り入れた授業を展開してみよう」というきっかけになればと考えている。

（3）自己肯定感の欠如

該当年次の生徒（※男9、女10）が1年次の1学期時にアンケートで「自己肯定感が高いですか」との

質問に対し、「はい」と回答割合は0.0%、「どちらともいえない」と回答割合は21.0%、「いいえ」と回答割合は79.0%であった。



【図2】 該当年次のアンケート結果

本校の生徒に限らず、現在日本の子どもたちの自己肯定感は、諸外国の子どもたちと比べて低いということが、過去の様々な調査結果から明らかになっている。国立青少年教育振興機構が、平成27年8月に日本・米国・中国・韓国の高校生を対象に行った調査によると、日本の高校生の自己肯定感は4ヶ国中最下位である。子どもたちの自己肯定感を育むことは、子どもたちが学校や大学を卒業した後、自らの意思で学習する際の学習に対する動機づけとなることや、ありのままの自分を受け入れる、他人と協調できる、様々な困難を乗り越えることができるなど、グローバル社会において子どもたちに必要な資質を育むうえでも重要である。また、千葉県教育委員会が掲げるウェルビーイング向上の一環としても、自己肯定感の向上は必要不可欠である。そのため、プレゼンテーションを通じて新たなことに挑戦をした（人前で何かを伝えることができた）という自信や成功体験を経験することで、生徒の自己肯定感にどのような変化が生じるのかを研究する。

（4）少人数教室ならではの取組

プレゼンテーションは、全日制の1クラス40人規模のような学級では、1人1人の発表をクラス全員が傍聴する機会が取りづらいのは現状である。しかし、定時制のような少人数クラスであれば、各班の発表をクラス全員が傍聴することができ、実態に則した充実した環境で実施ができると考えた。

3 研究の仮説

これらの視点をふまえ、本校生徒の実態に沿った体系的な総合的な探究活動をととして生徒自身の考えをまとめ、他者に分かりやすいように発表をすることで

生徒の自信となり、自己肯定感の向上や情報発信能力の向上が期待でき、本校の生徒にとって最も重要な「生きる力」として養うことができるのではないかと考えた。また、不登校の経験から対人でのコミュニケーションの減少、学校生活での成功体験の欠如などがアンケート結果の要因であると考えた。

4 目的

（1）コミュニケーション能力・自己肯定感の向上

コミュニケーション能力の向上や自己肯定感の向上である。コミュニケーションが苦手な生徒達が級友と協力して1つの資料を作成し、人前で発表することでどのような心情の変化がみられるのかを2年間として検証する。

（2）系列毎のテーマの探究による互いの学び合い

最終的には複数の系列テーマから自ら探究したいテーマを選択し、そのテーマについて自ら主体的に探究しながら、他者に分かりやすいように伝える能力を養う。また、同年代の他者の発表を聞くことで、多種多様の系列に対して興味関心を得られるか検証する。

（3）修学旅行への興味関心の促進

3年次に実施予定である修学旅行に対しての興味関心を促し、修学旅行を経験できる環境を設定するためにも、修学旅行参加率が70%を超えるかを検証する。本校定時制では前述でもあり、対人でのコミュニケーションや集団行動が苦手である生徒が多く在籍しており、規定の参加率を満たせず、今年度で修学旅行未実施である年数が10年目となる。千葉県教育委員会の修学旅行の目的にもあるように、学校の枠を超えて社会に出るためのルールを学び、知識を広げ、集団行動をととして個人として成長を促し、国内や海外の歴史や文化など、学校以外の場所で集団生活をととして社会性を養い、様々な体験をととして学習を深める非常に重要な機会であるため、本年度で修学旅行に対しての興味関心を高め、参加率が70%を超え、生徒達が修学旅行を経験できる環境をつくることが重要であると考えた。

5 研究内容

（1）1年次での取組

ア コンセンサスゲームで学ぶ集団発想法

該当年次の生徒の特長は大きく分けて「自分の意見ばかりを主張してしまう」「自らの意見を発言できない」であった。そこで、1年次の1学期より、段階的に集団発想法について学ぶことが必要であると考えた。そのため、ブレインストーミングやKJ法などを、コンセンサスゲームを通じて意見を集約する方法を実践した。(図3、図4参照)



【図3左】コンセンサスゲームで意見を出し合う様子

【図4右】コンセンサスゲームで使った教材

コンセンサスゲームの内容

班員の乗った宇宙船が、月で不時着してしまいました。あなたは300km離れた陽のあたっている月面上にある母船とランデブーする予定でした。しかし、荒っぽい着陸で、あなたの小宇宙船は壊れ、宇宙船の中の設備もほとんど壊れてしまいました。残されたものはリストにある10の品物だけです。あなたの船員の生死は、母船に戻るかどうかにかかっています。そのために、陽のあたっている月面上での300kmの旅のために必要な品物を選ばなければなりません。あなたの仕事は、10の品物を生存するための重要度順にランクをつけることです、一番重要なものに1という数字を振ってください。2番目に重要なものには2という数字を…。このようにして、1～10までの重要な順に数字を振ってください。

マッチ	ウイスキー
懐中電灯	20Lの水
ライフル	宇宙用照明弾
携帯暖房機	注射器の救急箱
50kgの酸素	FM受信送信機

特にブレインストーミングでは、「本名で呼び合う」「全員が発言する」「他者の意見を絶対に否定しない」「正解・不正解ではなく、多くの考えを発表する」「多数決で決めない」という5つの項目を重視することで、生徒同士の考えや意見の出し合い方を学び、「ここは自分の意見を言っている場所だ」「自分の意見ばかりとおしてはいけない」という気づきを重要視しながら授業を

実施した。その結果、文化祭の決め事では、ホームルーム長が主体となり、2～4人程の班に別れ、ブレインストーミングを活用しながら意見を集約し、議事運営を行うなど、学級活動の際にも変化が伺えた。

イ 教科横断的な学びの実施

1年次の3学期で、総合的な探究の時間の授業だけでは十分な資料作成方法や作成時間が確保できないと考え、情報Ⅰの授業との教科横断的な学びを実施した。Powerpointの使用方法、及びWordでのアンケート作成、Excelでアンケートの結果をグラフや図にまとめる方法などを学びながら、資料の作成を行った。

ウ プレゼンテーションの実施

(ア) テーマ探究

1年次3学期の総合的な探究の時間及び情報Ⅰの授業で実践する系列別テーマ探究について紹介する。

社会問題について	・気になる社会問題について1つ選択し、探究する。
修学旅行について	・自分達が行きたい修学旅行先のプランを立てる。行先は問わない。

このテーマ設定の背景は、4目的のイ、ウで述べたとおりである。今回は1学期で学んだ集団発想法を活用するといった観点や、複数人で同一のテーマの探究を行うことで、集中力やモチベーション等の持続に繋がると考え、2～4人の複数人で構成される班で実践した。指導上、重要視したのは以下の項目である。

- ・なぜそのテーマを選んだのかを明確にする。
- ・ブレインストーミングの発想法を用いて、建設的な話し合いを行う。
- ・相手にとって分かりやすい説明、資料とはどのようなものかをしっかり話し合う。
- ・どうしても人前で話せない場合は、当日の機材操作補佐に専念する。
- ・資料作成は、必ず全員が作成に携わることとし、1人2枚以上のスライドを作成すること。
- ・情報Ⅰで学んだWordを用いてアンケートの作成を行ってもよいこととする。



【図5】各々考えた修学旅行プランを提案する様子

エ 実践における考察

重要視した項目については、常に机間巡視をしながら生徒達の取組状況を把握し、適宜支援を行う必要性があった。また、アンケートについては、自分たちで Word を使ってアンケートを作成し、その集計結果を Excel を用いてグラフ化することで、情報Ⅰとの教科横断的な学びの実施ができると考える。

オ 他教員による多面的角度からの助言

より多くの教員にプレゼンテーションの内容を確認してもらい、話し方や物事の伝え方、教科の専門的知識の観点からの助言も重要であると考え、事前にプレゼンテーションを実施する日を教員に周知し、プレゼンテーション当日には授業公開を実施した。

【図6左】 社会問題について取り上げ発表する様子



【図7右】 校長先生からの講評を真剣に聞く様子

担任だけでなく、多くの教員から多面的角度から助言をもらうことで、生徒にとって自己肯定感の向上に繋がったと考えている。

(2) 2年次での取組

ア プレゼンテーションの実施

(ア) テーマの探究

主な探究テーマを3つ出題し、その中から1つを選び、探究活動を行った。

テーマ	内容
SDGs の探究	SDGs について、17 の目標から1つを選び、プレゼンテーションを行う。 複数の目標を選ぶのは禁止。
大阪・京都の探究	「大阪・京都」の魅力について述べるのではなく、何か1つのテーマを決め、プレゼンテーションを行う。 例 たこ焼きの特徴、歴史など 旅行プランの列挙等ではないことに気をつける。
小論文 面接の探究	・面接の仕方、小論文の書き方、コツについてプレゼンテーションを行う。 ・高校から就職、進学にあたり、今から何を準備しなくてはいけないのかなどを調べ、プレゼンテーションを行う。 ・進学するにあたり、推薦制度などについて調べ、プレゼンテーションを行う。

このテーマ設定の背景は、4 目的のイ、ウ で述べたとおりである。今回は、1 年次に実施した班の構成方法ではなく、1～4 人と、1 人班の枠を設けた。理

由としては、自ら主体的・計画的に資料作成に挑みたいという意見もあったためである。班の人数を統一しない理由は、個々の能力に応じて差があるため、学び合いの場を設ける一環としても、班の人数については断定的にせず柔軟に対応できるようにするためである。

(※プレゼンテーションの資料を作成するにあたり、重要視した項目については、1 年次の時のものと変わらないため省略する。)

各班の探究した内容は以下のとおりである。

班	テーマ探究の内容
A 班 (1 人)	SDGs 目標 14 「海の豊かさを守ろう」で解決すべき問題と現状とは
B 班 (3 人)	意外と知らないたこ焼き事情
C 班 (1 人) ※外国籍生徒 (1 人)	SDGs 目標 1 No Poverty (貧困をなくそう)
D 班 (1 人)	小論文って何?
E 班 (4 人) ※外国籍生徒 (1 人)	SDGs 目標 13 CLIMATE CHANGE
F 班 (2 人)	面接で気をつけたいこと
G 班 (1 人)	履歴書について
H 班 (1 人)	小論文について
I 班 (2 人)	SDGs 目標 2 なぜ人々は飢えるのか



【図8】 班員とともにテーマ探究に努める様子

イ 実践における考察

重要視した項目については、1 年次の項目に加え、Google Form を活用したアンケートの作成方法など、新たに情報機器を活用して情報を収集する方法を取り扱った。また、生徒の自己肯定感の向上を促すためにも、資料作成時の声掛けや、プレゼンテーション後のアフターフォローが教員としての最重要資質であると考えられる。

ウ 他教員による多面的角度からの助言

1 年次時同様、多面的角度からの助言による生徒達の専門的知識の向上、及び自己肯定感の向上を図るため、プレゼンテーション当日には他教員が参観できるよう授業公開を実施した。

5 成果

(1) Google Form を使用したアンケートの実施

D 班の生徒は、小論文について調べていたが、テーマを探究する中で、「入試や試験で実際に小論文を経験したことのある先生方に勉強法などを聞いて、それをまとめたものとグラフにして皆に発表したい」という意思があった。そのため、生徒自ら Google Form を活用して先生方に対してのアンケートの作成し、その URL を QR コード化して Word に貼り付け、プリントを作成した。そして、そのアンケートを定時制の教員だけではなく、全日制の教員の協力も得て約 40 名近くの教員にアンケートを実施した。

【図9左】実際に生徒が作成したプリントの内容

【図10右】「Google Form」のアンケートの内容

(2) 教員からの助言による生徒達の心情の変化

「SDG's」について調べていた A 班の生徒に対し、プレゼンテーションを見た理科の教諭から、「生物基礎の授業で扱ったマイクロプラスチックの内容がしっかりと盛り込まれており、分かりやすく感銘を受けた」といった講評があり、A 班の生徒は、プレゼンテーション後に感じたことを以下のように綴っている。

授業で行ったプレゼンテーションで、自分が調べてまとめた内容について、先生から「とてもわかりやすかった」と褒められたのです。自分の考えを言葉にして人に伝えるのは苦手だと思っていたので、その言葉は心に深く残りました。人前で話すのは緊張しましたが、資料を工夫したり話す順番を考えたりして準備を重ねたことが、きちんと伝わったのだと感じられて本当に嬉しかったです。努力してきたことが、誰かに認められるというのは、こんなに力になるのかと思いました。

【図11】 プレゼンテーション後の生徒の感想



【図12】 A 班の生徒が作成した資料の一部

以上の結果から、担任だけでなく、多面的角度からの助言の有用性は高いと実感した。また、プレゼンテーション後に生徒達に実施したアンケートの結果について、一部を紹介する。(図13参照)

以前は、自分の意見が相手の負担になったり、対立に繋がるのではと不安で、発言をためらうことが多かった。しかし、互いの意見を出し合い、納得できる形に調整してから取り組む方が、結果的に作業がスムーズに進むことを実感しました。また、ただ否定するのではなく、「どこをどう改善すればよくなるか」という視点で伝えることで、相手も受け入れやすくなり、建設的なコミュニケーションができるようになりました。

情報を効率的に伝えることができるようになり、自己表現力やコミュニケーション能力の向上により自分の考えやアイデアに自信をもって発言することができるようになりました。

自分の考えや伝えたいことをまとめ、それを資料という形にして人前に立ち、皆に伝えるという貴重な経験を学生のうちにでき、今後に生かせる糧になってとてもよかった。

【図13】 アンケートの一部を抜粋したもの

(3) 該当年次の修学旅行参加率の結果と今後の取組

修学旅行の参加率だが、結果として既定の参加率を上回り、修学旅行に対して、生徒達の興味関心を得ることができたと感じている。10年ぶりの修学旅行の実施となるため、修学旅行の事前学習において、本研究で得た経験を活かし、「生きる力」の伸長を目指した充実した探究の時間としての取組を行っていききたい。

6 まとめ

本研究をとおして、アンケートの結果や、プレゼンテーション後の学校生活における対人でのトラブルの減少などから、4 目的ア、イ、ウ で掲げた内容を概ね達成できたと考えている。

本研究より、生徒一人一人の実態を教員が把握し、それに沿った十分な支援を行うことが必要不可欠ではあるが、本校の掲げる重点目標である『「なれる」自分から「なりたい」自分へ』にもあるように、個々の「挑戦心」を軸とした授業展開の重要性を改めて実感した。今後も今回の研究の経験を活かし、生徒の「生きる力」の伸長を目指し、私自身の「挑戦心」も絶やさず、邁進していきたい。

【参考文献】

(1) 次世代へ光り輝く「教育立県ちば」プラン

千葉県教育委員会

(2) 第2章 千葉県教育の目指す姿

千葉県教育委員会

獎 勵 賞

『ジャンボ! 菅野っ子』の育成に向けて

～変化の激しい21世紀をたくましく生き抜いていく子どもたちを目指して～

市川市立菅野小学校

校長 松 永 裕 思

1 はじめに

本校は、昭和32年4月真間小学校より分離をもって開校とし、今年度は創立68年を迎える。学校は市川市の西部に位置し、さらには近隣に私学があり学園地区でもある。近くには真間川が流れ、自然環境にも恵まれている。JR市川駅から京成線を超えて学校に至る道路が2本あるが、交通量に対して道幅が狭く、交通事故の危険性があるので、安全教育の徹底を要する。さらに学区の中央部を南北に東京外環道路が2018年に開通したため、学校・家庭・地域が協力して見守りを強化している。保護者は会社員が多く、子どもの教育に熱心で、学校教育に対する関心は非常に高い。

2 学校教育目標と子どもたちの実態

学校教育目標は、学校の中で最重要目標であり、誰もが頭に入れ歩んでいくことが大切だと考える。

しかし、教育の職に就きながらも私は小中学校時代の学校教育目標を何一つ覚えていない。自分の意識も足りなかったのだが、子どもにとって印象に残る言葉でなかったことは確かである。

学校教育目標は、実態に合っていることが大切であるが、さらに学校職員はもちろんのこと子どもたち全員、そして保護者や地域の方までにも覚えていただけるものであることが、目標達成に近づく一歩だと考える。

そこで、本校に着任した初日に職員から本校の子どもたちの良さ・課題を教えてもらうことにした。

全職員からのアンケートからは、温かい保護者や地域に生まれ、真っすぐに優しい子ども像が浮かび上がってきた。さらに学力もしっかりついていることがわかった。令和6年度の全国学力学習状況調査では、全国平均を国語・算数とも大きく上回っていた。

反面、このような恵まれた環境であるが故に、挨拶も含めて主体性に欠ける面と心の弱い面が課題であることがはっきりした。

そこで、「心も体もでっかく育て!」「人として大きな人になれ!」の思いを込めて、『ジャンボ! 菅野っ子』とした。さらに変化の激しい21世紀をたくましく生き抜いていくためには、自分にかかわるすべての人・もの・こととともに生きていくことが不可欠である。そこで、これまでの本校の学校教育目標「共に生きる」を副題として掲げた。

学校教育目標は、合言葉として挨拶にも活用している。始業時に毎日各教室を回っているが、いつも「ジャンボ!」と声をかけながら教室を訪ねる。子どもたちからも元気な声で「ジャンボ!」と返ってくる。

本校の子どもたちは、大人になっても学校教育目標を間違いなく覚えているであろう。

3 社会的背景から

2030年頃にはIoT(Internet of Things)やAI(Artificial Intelligence)等をはじめとする技術革新が一層進み、社会や生活を大きく変えていく超スマート社会(Society 5.0)の到来が予想されている。労働人口の相当規模がAIやロボット等に代替できる可能性が指摘される一方で、少子高齢化が進み技術革新に伴ってグローバル化の加速が予想されている。

また、予想もしていなかった新型コロナウイルスの蔓延もあった。今年度の6年生は入学式が6月となり、学校生活でも様々な制限がある中で成長してきた子どもたちである。

このような先行きの見えない21世紀を生き抜いていくためには、子どもたち自らが課題を見つけ、解決方法を探り、主体的に生き抜いていく力が大変重要になってくる。

4 「ジャンボ! 菅野っ子」の育成に向けて

「ジャンボ! 菅野っ子」とは、どんな姿なのであろうか。

それは、変化の激しい先行きの見えない21世紀において、予期せぬことが起きたとしてもくじけず、仲間

と力を合わせて課題を一つ一つ解決していく姿だと考える。

では、どのようにしていけば育つのだろうか。

まずは、子どもたち一人ひとりを取り巻く環境が重要であることは確かである。

「子どもたちの最大の教育環境は、目の前の教師自身の姿である。」と常に考えている。

若年層教員が増加している昨今、若年層教員を育てる教育環境は校長の姿であろうとも考える。

私の理念は、「自分は今、子どもたちに何ができるのか。」「できることは何でもやる！」である。

そんな思いを多くの教員がもち、日々の取り組みを活性化させたい！

そして、学校の中でできる限り体を動かし、豊かな体験をすることやいのちと触れ合う経験をさせること、人と人のふれあいを数多く作ること、そして、主体的に取り組む機会を数多く作ることによって自己肯定感を育み、たくましさや備えた子どもたちを育てていきたいと考えた。

(1) **すがのパラダイス**

本校は、駅近でありながら敷地も広く、畑や田んぼを作ることにも可能である。

私が本校で担任をしていた約



【すがのパラダイスの看板とすいか畑】

25年前に作った田んぼと畑が残っており、田んぼは5・6年生が米作りに挑戦する場となっている。畑は当時ガソリンスタンドからいただき学級みんなで運んだタイヤで囲われているが、ここ何年も活用された形跡はなかった。

この畑で全校の子どもたちが味わえるすいかを作ろうと考え、6年生に名前と看板の図柄を考えないかと相談してみた。

そこで提案されたのが「すがのパラダイス！」であった。子どもたちの楽園をイメージした。



すいか畑を作ること【休み時間には多くの子が集まった】

を全校に宣言し活動を始めたところ、休み時間には様々な学年の子どもたちが集まり、夢を描きながらみ

んなで畑作りをした。

初めての挑戦で、本当にできるのか不安も大きかったのだが、各学級が水やりをし、大切に育てた結果、なんと富里のすいかに負けるとも劣らずの大きな甘いすいかがたくさん実った。

600名を超える子どもたちなので一人分はわずかであるが、全校の子どもたちと味わうことができた。



【すいかの収穫】

さらに校長室前にはぶどう棚を作り、デラウェアを育てた。



【ぶどうの実り】

もいって根を出させ4年かけて育てると立派な実をつけることも、見せることができた。

6年生の卒業直前には、校内で育てたさいまいもを中心にして、卒業企画第1弾「焼き芋パーティー」を実施する。卒業を控えた6年生限定のものである。



【実をつけたパイナップル】

ダイオキシンの問題もあり、街中で焚火をすることはなくなってしまったが、火は大昔から人の生活を豊かにしてきた大切なパートナーである。そんな思いも感じてほしくて校庭で焚火をして焼き芋を作っている。その美味しさと言ったら、言葉では表せないほどである。



【卒業前の6年生と焼き芋パーティー】

そのほかにもラズベリー、ブラックベリー、ブルーベリー、いちご、と、食べられる果物を実らせ、熟し

ていれば休み時間にも食べてよいことを伝えている。

大地の恵み、自然への感謝の心を育んでいきたい。

(2) 蚕の飼育 (いのちからの学び)

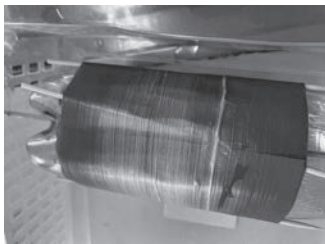
本校の校庭には、たくさんの種類の木が生えている。その中には桑の木も数本ある。25年前は、子どもたちが休み時間に桑の実を食べていたが、校長として着任した際は誰もその存在すら知らなかった。桑の実が熟すとおいしいことを教えるとたちまち広がった。



【蚕に群がる子どもたち】

校長室で育てることにした。興味をもった子どもたちが毎日訪れるようになり、初めはさわることでもできなかった子が、手のひらにのせ慈しむように観察していた。

そして繭ができたとき、5年生の学級から、繭から絹糸を紡ぎたい！と声があり、挑戦が始まった。ペットボトルを利用し糸まきを自作した。



【つやのある絹糸】

つぎのようないのちへの感謝と感動の思いが綴られていた。

【子どもの振り返りより】

- ・蚕の糸をどんどん取っていくと、蚕の中がすけてきました。その糸が全部なくなるとさなぎが見えてきてびっくりしました。
- ・蚕の糸はとても細くて長いことがわかりました。職人の人はこれをずっとやっていてすごいなと思いました。
- ・まゆを巻いていくとつやが出てきて、とてもきれいでした。

さらに、桑の木があるということは、蚕を育てられるということである。

そこで、大学の学園祭でいただいた蚕を校



【自作の糸巻き器で巻き取り】

つやがあり、輝いている絹糸が巻かれていった！

どのように活用していくか、現在模索中である。

子どもの感想には、

- ・かいこのいのちなので、糸を大切にしたいです。
- ・まゆから糸をとるということは、命をいただくということなのでとても緊張した。
- ・これからもごはんなど食事に使われている動物に感謝をしようと思った。

さらに、市川市では絶滅してしまった国蝶「オオム



ラサキ」を幼虫から育て羽化させることに成功し、きれいな成虫を見せることもできた。

ほかにもニジイロ

【羽化したオオムラサキ】

クワガタの成虫と幼

虫の展示、カブトムシの幼虫(現在は羽化して成虫)、オタマジャクシ、ナナフシ、めだか等を校長室前で育て、いのちにふれる体験をさせている。休み時間の校長室は子どもたちで満ちあふれている。

(3) English Day

今の子どもたちが大人になるころには、グローバル化ははるかに進行し、ジャンボ！菅野っ子の中にも世界を股にかけて活躍する人材がたくさんいるであろう。

そのためには、英語の力はもちろん、人とかわるコミュニケーション力の育成が何より大切だと考える。

そこで、全校の子どもたちに英語を身近に感じてほしい！英語の表現力・コミュニケーション力を身につけてほしい！と願い、「English Day」を設定した。市内の中学校で活躍しているALTの先生に本校に集まっていた。

1年生への「大きなかぶ」の英語バージョンでの読み聞かせでは、お話を知っていることもあり、大いに盛り上がった。

さらに、ALTの先生によるゲ



【「おおきなかぶ」の読み聞かせ】



【大きなアクションのALTの授業】

ームやクイズ、体を存分に使ったダンス等も盛り込み、当日は1年生から6年生まで英語に触れる一日を満喫した。

(4) **地域の方々による生き方教室**

人との関わりは、心の成長に欠かせないものである。

どの学校の地域にも、生き方を学びたい方がたくさん住まわれている。

例年1年生の「昔遊び」の体験では、声をかけさせていただくと40人を超える方々が集まり、それぞれの遊びのコーナーで子どもたちを楽しませてくださる。

6年生のキャリア教育では、10以上のブースができ、子どもたちの興味関心のある仕事について実物や映像を交えて教えてくださる。

さらに、一昨年より地域の方に各学級または学年に入っていただき、生き方を学ぶ「生き方教室」を実施している。

講師の先生も多様である。

生き物や自然に詳しい自然博物館の学芸員さん、墨絵の先生、絵手紙の先生、語り聞かせの先生、etc。

授業後は、指導して下さった先生にお礼の手紙を書き感謝を伝えた。



【絵手紙の先生による授業】

毎日一緒に学ぶ先生とは違った視点で、あるものを考え、生き方を貫いている方々からの学びは、心に残るものとなる。

日頃の授業とは一味違う学びができ、何より人との関わりがありがたいと感じられる時間となっている。

(5) **新体力テストでの取り組み**

本校の子どもたちの学力は、全国学力学習状況調査や他学年の学力テストでも全国平均を大きく上回り、高い状況にある。

反面体力面は課題であり、新体力テストの種目でも多くの種目が平均を下回っている。

さらに、5・6年生が取り組む千葉県及び市川市の運動能力証

R6 体力テスト (6年生) 去年の6年生と勝負だ!!

	男子			女子		
	全国	千葉県	菅野小	全国	千葉県	菅野小
身長 (cm)	149.48	149.98	149.57	148.66	149.86	149.58
体重 (kg)	21.63	22.38	20.67	19.48	20.04	23.04
握力 (kg)	36.61	38.82	35.78	41.14	43.19	41.83
50m走 (秒)	45.51	45.84	44.20	42.15	42.98	44.52
30m走 (秒)	57.46	57.27	56.02	45.08	42.93	44.77
50m走 (秒)	8.44	8.77	8.79	9.26	9.21	10.24
50m走 (秒)	16.61	17.03	16.78	15.41	15.61	16.81
50m走 (秒)	25.39	24.57	19.31	15.22	15.25	12.54

【廊下へ貼りだした目標】

では、令和5年度の受証率は37%であり、市内でも低い結果であった。

そこで、令和6年度は受証率50%越えを目標とすることとした。

手立ては以下の3点である。

①個人が持っているタブレットに昨年の自分の記録をまとめ、取り組む前に1年前の自分をどれだけ超えられるかと明確な目標を持つ。

②教室前の廊下に、全国・千葉県・昨年度の菅野小の子どもの平均値を表示し、昨年度の自分の記録を意識しながら、目標を持つ。

③秋にも挑戦する機会を設ける。

結果は、なんと受証率69%、市内でもトップであった。

これは、一つの取り組みをする際に、どんな手立てを打つか、どんなはたらきかけをするかによって子どもたちの成長は大きく変わることを物語っている。

改めて私たちの役割、そして責任の重さを実感した。

(5) **「伝え合う力」**

本校の研究のテーマは「伝え合う力の育成」である。国語科の学びを通して育成を図っている。教科での学びは、日常生活につながるものであってほしい。

そこで、卒業を目前に控えた6年生に休み時間を利用して「未成年の主張」をしないかとはたらきかけた。

多くの人の前で注目を浴びて一人で話することに初めは参加を迷う子も多くいた。しかし、自分の殻を破って卒業前に仲間や在校生へメッセージを伝えたいという6年生が多く名乗り出た。

多くの仲間や下級生の前で思いを込めて語った。その内容は、「仲間への熱い思い」「担任の先生への感謝」

「自分の夢」「新しい車を開発して社長になる!」etc。それぞれに思いがこもった素晴らしいメッセージであった。



【仲間の前で語る姿】

5 好奇心に火をつけろ!!!

私の取り組みは、子どもたちや教職員の好奇心に火をつけるためである。

好奇心に火が付くと誰もが自ら動き、時間も忘れる。

そんな姿を求めて、今年度は5年生に仕掛けた。

5年生の総合的な学習のテーマを「竹」にしようと担任と話し合い決めた。

では、子どもたちが竹に興味関心を持つにはどんなはたらきかけをすればよいかと試行錯誤した。

出した答えは、5年生の登校時、階段を上って教室へ向かうとする際に担任の先生たちが目の前で「流しソーメン」を食べているという出会いである。

子どもたちの反応は予想通り、いや予想を上回って「ずるい!」「自分たちも食べたい!」の声が轟いた。

1時間目に急遽学年全員と総合の授業を展開した。

子どもたちの思い願いを聞きながら「何のために?」「なぜ?」と目的を確認した。

そこには、「竹」に着目している意見もあり、今後は楽しみになった。その後の子どもたちの行動は、目を見張るものがあつた。

学区内で竹が生えている家を一軒一軒訪ね、竹をもらえないか交渉し、市が所有する土地に竹を見つけた子は市役所に連絡し、切らせてもらいたいと願い出た。



その結果、市の所有する竹を自分たちの手で切り、学校に運んだ。

また、学年みんなの思いを共有するために何度も話し合いを重ね歩んできた。

そして、仲間と力を合わせ、大きな壁を乗り越えて5年生全員で

【夢の実現・流しソーメン】「流しソーメン」を実現させた。

当日は、喜びに満ち溢れていたが、何よりここに辿り着いた過程に大きな意味があり、成長した時間である。「夢に向かってひたむきにがんばる姿」があつた。

【子どもの振り返りより】

・竹での流しソーメンは貴重な体験でした。最初ではできないと思っていたけれど活動していくうちに自信がつき真剣に取り組めるようになり、楽しくなりました。
・途中であきらめそうになっても粘り続ける力、率先して行動する力、チームワークを結成する力、思考力が身についたと思います。

これらは人生において大切な力であり、流しソーメンで人生が一步進んだと思います。

6 成果と課題

着任以来「いのちあるものに感動し、大切にすることが出来ますか。」と問いかけてきた。

令和6年度の6月の児童アンケートでは、「そう思う。」「ややそう思う。」の肯定的評価は、74%であつた。

それが、12月に実施した結果は、なんと95%である。

Q:いのちあるものに感動し、大切にすることが出来ますか?

	令和6年6月	令和6年12月
肯定的評価	74%	95%
否定的評価	26%	5%

感受性の豊かな子どもたちは、やはり本物の体験があつて何かを感じ、成長する。

可能な限り本物に出会う場面を多く持たせてあげたい。

しかし、校長の立場で子どもたちにかかわる時間は限りがある。担任を巻き込んでともに歩んでいくことが大きな成果につながると感じた。

7 おわりに

私が初任のときの子どもたちは、もうすぐ50歳を迎える。そのときの子どもと大人になって出会ったとき「あのとき先生がこう言ってくれたから、今の自分がある!」と言われた。

私は全然覚えていなかったが、幼い子どもの心には強く残ったようである。

毎日接している子どもたちに何気ない言葉を数えきれないほどかけているが、私たちの言葉がどれだけの重みがあるのか改めて実感した。

校長になった今でも、「こんなはたらきかけをすると、子どもたちはどんな反応をするだろうか?」と常に考え、ワクワクしながら多くの挑戦をしてきた。

もちろん期待に反してあまり反応がなかったこともある。しかし、予想を超えるほど大きな反響があり、主体的な行動につながる場面を多く見てきた。

子どもたちのよりよい成長に少しでもかかわれていたら本当にありがたいと思える瞬間である。

私たち教師の仕事は「未来を創る仕事」である!

友達と共にスポーツの楽しさを味わうことのできる児童の育成

～子どもたちと共に思考力・判断力・表現力を育む授業づくり～

野田市立岩木小学校

校長 角田 敏雄

1. はじめに

本校では、「力を出し合って学び合える児童の育成～笑顔あふれる岩木小～」を教育目標に掲げている。この目標のもと、児童が互いの良さを認め合い、関わり合う中で子どもたち一人一人が学びを深めていく『協働的な学び』の実現を目指している。この姿は、体育科においても極めて重要である。

体育科の教科目標は次のように示されている。「体育や保健の見方・考え方を働かせ、課題を見つけ、その解決に向けた学習過程を通して、心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を育成することを目指す。」つまり、体育科においても、単なる個人の運動技能の習得にとどまらず、子どもたち一人一人が主体的に自己の課題を捉え、解決していく力を育成することや生涯にわたる健康的な生活を実現するための素地を養うことが求められている。

そこで、本校の体育の学習でも、単なる運動技能の向上だけでなく、友達と共に考え、自ら課題を発見し、他者と関わり合いながら課題を乗り越える体験を通して、「思考力・判断力・表現力」といった資質・能力を育成することを目標に設定した。体育の学習の中様々な運動やスポーツの場面において、友達と関わり合いながら、自らの良さや課題に気がついたり、仲間と共に運動やスポーツをすることの楽しさを共有したりすることを可能にする授業づくりこそが、本研究の根幹である。

2. 研究主題設定の理由

(1) 教育の変化と体育科の新たな役割

平成29年告示の学習指導要領では、「変化の激しい社会を主体的に生きる力の育成」が重視されている。体育科においても、運動技能の習得にとどまらず、健康やスポーツに対する見方・考え方を育て、生涯にわたって心身の健康を保持・増進し、豊かなスポーツライフを実現することが求められ、児童の年齢、性別、体力や技能の程度、障害の有無を問わず、すべての児童が運動やスポーツの楽しさを実感し、共有できる授

業づくりが求められている。加えて、野田市では令和5年4月1日、「健康スポーツ文化都市」を宣言し、元気で明るい家庭、夢のある住みよいまちの実現を目指している。これらの背景を踏まえ、本校では研究教科を体育科とし、児童が生涯にわたって運動やスポーツの楽しさを味わえるような、スポーツライフの基礎づくりの実現を目指すこととした。

(2) 本校児童の実態と課題

令和4年度の新体力テストや児童の体育に関する実態調査アンケートの結果から、本校児童は体育に対して比較的肯定的な意識をもっている。「体育の授業は楽しい」と回答した児童の割合は、男子76.6%（全国比+3.2%）、女子68.9%（全国比+9.6%）であり、全国平均を上回っている。ただし、男女間で意識の差があり、女子の割合がやや低い傾向にある。

一方で、「体育が楽しくない」と感じている児童の回答理由として、「運動が苦手だから」、「運動をするときに友達に迷惑をかけてしまうのが心配」、「自分のペースに合った練習ができない」など体育の学習に対する不安や不満が挙げられている。また、「運動やスポーツが好き」と答えた児童の割合は88.1%と高いが、全国比では-4.3%と下回っており、運動への意欲には個人差が大きいことが示唆される。

さらに、新型コロナウイルス感染症による活動制限の影響により、日常的な運動時間の減少や体力差の拡大といった課題も明らかとなった。週あたりの運動時間が1日平均60分以上ある児童とそうでない児童の間には、体力合計点に大きな差が見られている。

また、全国学力・学習状況調査の児童質問紙では、「自分にはよいところがある」と答えた児童の割合は76.1%で、全国平均を3.2ポイント下回っており、自己肯定感の低さが課題となっている。体育科においても、児童一人一人に自己の成長や達成感、友達と共に運動やスポーツをすることの楽しさを味わわせるための活動の工夫が必要である。

これらの実態を踏まえ、運動能力の差や運動に対する苦手意識、男女差、自己肯定感の低さの課題解決を

目指し、令和6年度の研究主題を以下のように設定した。

研究主題

友達と共にスポーツの楽しさを

味わうことのできる児童の育成

～子どもたちと共に

思考力・判断力・表現力を育む授業づくり～

この研究主題のもと、体育科において「協働的な学び」の視点からの授業改善を図り、すべての児童が友達との関わり合いの中で、自らの課題と向き合い、仲間と支え合いながら、運動の楽しさと達成感を実感できるような教育の実現を目指していくこととした。

(3) 教員の若年化と教員同士の学び合いの工夫

令和6年度の校内研究を進めるにあたって、研究体制の構築も重要であると考えた。本校では、近年、教員の若年化が進み、若手教員の育成のための研修や支援の必要性が高まっている。しかし、ベテラン教員の減少による指導者の不足、働き方改革に向けた業務改善など様々な課題に直面し、若年層教員育成のための機会をあまり多く作ることができない状況にある。そのような中でも、教員は絶えず研究と修養に励み、その職責の遂行に努めなければならない。そこで、校内研究を通して、教員が日常的に学び合う体制の基礎を作り、児童によりよい教育を行うために、教員全員で取り組んでいく意識を共有すること。また、校内授業研究会の中で「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実と「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、児童一人一人の実態を把握し、学びの様子を丁寧に検証することを繰り返し行い、教員一人一人が日々の学習指導の中で、自らの授業実践を振り返り、検証、改善をしていける教員の姿を目指すこととした。また、教員同士の繋がりを広げていくことで若手教員の課題を共有し、様々な課題解決に向けて多くの教員がサポートしていけるような校内体制をつくることも本研究の目的とした。

3. 研究の目的と主な取り組み

(1) 目的

- ・体育の学習を通して、友達と関わり合いながらスポーツの楽しさを実感できる児童を育成する。
- ・友達と共に運動やスポーツをする活動を通して、児童一人一人が自己の成長や課題に気づき、課題解決に向かって、自ら考え、判断し、表現できる児童を育成する。

- ・校内研究、研修の組織編制の仕方や校内授業研究会の進め方を工夫することで、教員の授業改善への意識を高め、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実と「主体的・対話的で深い学び」の実現を図る。

(2) 主な取り組み

①子どもたちと共につくる授業（思考・判断・表現）の実現

単元のめあてを子どもたちと共に設定し、児童一人一人が友達と関わりながら、課題設定をし、主体的に学びを振り返るような授業展開を目指す。

②運動が苦手（嫌い）な子どもたちへの指導・支援（小さじ一杯の工夫）

運動が苦手な子どもたちに対する支援の方法やルールの設定の仕方など、運動が苦手な子どもたちもそうでない子どもたちも全員が楽しんで体育の学習に取り組めるような手立て（小さじ一杯の工夫）を用意し、子どもたち同士で話し合わせながら、それらを選択させたり、発展させたりしながら実践させる。

③体育カードの作成

児童の実態に応じて、ICTなども活用しながら毎時間の振り返りをしっかりと記録させ、自己の成長や学びの様子を可視化させる。

④ふりかえりの設定

自分の成長だけでなく、友達の成長も認め合えるような振り返りを行う。その中で、クラスの全員がもっと楽しく運動（スポーツ）を行うために必要な課題を見つけ、それを解決するための方法を考えさせ、次時に繋げられるようにする。

⑤縦研グループ研修の充実

校内授業研究会及び校内研修を行う際に、経験年数や担当学年を超えて、様々な立場の教員が共に学び合う機会にするために、教員を縦割りの小グループに分け、その中で意見を出し合いながら校内研究・校内研修を進めていけるようにする。

⑥授業研究会に向けた教材研究、指導案検討、事後検討会の設定の工夫

児童一人一人の実態を大切に単元づくりを目指し、授業展開クラスの子どもの様子を教員全員で把握し、その中で、よりよい授業を目指した教材研究、指導案検討、事後検討会を行う。様々な立場の教員が共に学べるように縦割りの小グループを作り、その中で話し合いを進めることとした。また、授業参観の際

には、それぞれの小グループに一人ずつ観察児童（焦点を当てる児童）を決め、その児童の学びの様子をグループ全員で共有することで、より具体的に授業についての検討を行う。

4. 研究の実践内容

（１）児童主体の単元目標の設定・思考の可視化

単元初回に、子どもたちが主体となって「単元のめあて（ゴール）」を話し合いながら設定させた。

チームごとにチームや個人のめあてを決め、友達と共有しながら学習を進められるようにした。



《写真1：児童が「体育カード」に振り返りを書いている様子》

ICT も活用し、自分たちの動きをタブレットで動画撮影し、それぞれの良さについて話し合いながら、課題発見と次時への改善に生かすような活動を行った。



《写真2：ICT を活用したフォーム確認場面（タブレットで動画を確認する児童）》

（２）運動が苦手な児童への「小さじ一杯の工夫」

みんなが楽しむためのルールについて話し合い、児童の様々な考えを取り入れながら、それぞれの運動（スポーツ）特性に応じた楽しさを児童全員に味わわせる工夫をした。また、運動の場や使用する用具の選択なども児童に行わせた。

ルールの理解が難しい運動（スポーツ）についてはルール説明の教材を工夫したり、教員が実際にその運動やスポーツを行っている動画を作成したりすることで、単元の導入で運動が苦手な児童にも、「やってみよう」と思わせられるような工夫を行った。



《写真3：児童にバレーボールのルールを説明するために単元の導入で使用した教材》

例）「ソフトバレーボール」の学習で、子どもたちと話し合いながら、児童にとって習得が難しいサーブレシーブはワンバウンドや一度キャッチすることも可としたり、全員がボールに触れるように、1チームの人数を3人に変更したりした。

例）「ポートボール」の学習では、自分たちでコートの方広さを決めたり、ボールが怖くて苦手な児童が多いことからボールの硬さや大きさを子どもたちが選んだりできるようにした。

（３）体育カードの活用と振り返りの質の向上

1人1枚の「体育カード」を毎時間記入し、単元を通しての自己や友達の成長を記録したり、次時への課題を話し合うための材料にしたりすることで、児童たちの「協働的な学び」に繋がるようにした。



《写真4：体育カード記入例》

（４）教員同士の協働・授業研究の充実

授業づくりの視点を共有し、体育の学習に対する指導観を教員全員で統一した。また、子どもたち一人一人を大切にするという視点から、子どもたちの実態を教員間で丁寧共有し、具体的な手立てについて話し合うことを重視した。また、校内授業研究会の中で、本単元の手立てが子どもたちにとって有効なものになっていたかについて、実際の児童の学びの様子を中心に話し合うことで、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現を目指した協議会を行った。そこから出された様々な意見をもとに更なる授業改善への意欲を高

められるようにした。



《写真5：授業研究協議会の様子》

例) 授業学年(6)年 単元名「ボール運動 ネット型・ソフトバレーボール」		授業者() ○○先生
児童の主な学習活動	観察児童の学びの様子 (友だち同士の関わり等)	教師の関わり
授業者の挙げた 課題に対する 解決方法 (黄)	観察児童の様子 周りの友達との 関わり (青)	良い点・成果 工夫されていた 点 (桃)
グループで話し合いながら、 本時の流れに沿って、 付箋を貼っていきます。		新たな手立て 指導・支援 自分だったら… (緑)

《表1：研究協議会で使用した授業参観シート》

経験年数	協議会終了後に先生方から出された意見
1年目	本時のめあてや単元の目標について、自分たちの言葉で話していてとても前向きに活動する姿がとても印象的だった。自分もこんな授業をしてみたい。
2年目	運動が苦手な子どもたちが、どんなところでつまずいてしまうのか、今までなかなか予想することができなかったが、丁寧に児童を観察したり、先生方と話し合ったりする中で、運動が嫌いな子どもたちがどんなことを考えながら活動しているのか、どんな支援や手立てが必要なのか様々なことを考えることができた。
16年目	子どもたちの言葉を引き出す先生の言葉がけがとても勉強になった。クラスの子どもたちから、全員で決めるという意思が伝わってきた。

5. 令和6年度 体育科研究実践における成果のまとめ

(1) 全体を通して見られた成果

令和6年度は「友達と共にスポーツの楽しさを味わうことのできる児童の育成」を研究主題として、特別支援学級および全学年での実践に取り組んできた。各

学年の実践から見てきた大きな成果として、まず挙げられるのは、運動や体育に対する肯定的な意識の向上である。アンケート結果や日々の児童の姿から、「体育が楽しい」「運動が好き」と感じる児童が多く見られ、肯定的な回答がどの学年も90%を超え、ほぼ100%に近い学年もあった。特に、児童同士の関わりを促進するチーム活動や話し合い活動、振り返りを通じて、思考力・判断力・表現力の育成にもつながった。

また、「全員が参加できる体育」への工夫と実践が全体を通して行われていた点も重要である。ルールの簡素化や、運動が苦手な児童にも活躍の場があるゲーム設計、ICTを活用した振り返り、視覚的な支援など、児童の実態に応じた多様な手立てが取り入れられた。こうした「小さじ一杯の工夫」が、主体的な学びを引き出し、児童一人一人の運動への意欲や達成感につながっていた。

(2) 特別支援学級での成果

特別支援学級では、これまで取り組んだことのない「モルック」という競技を導入し、色分けによる視覚的支援やルールの柔軟な設定を行うことで、児童の主体的な参加を促した。チームで活動する中で、応援の言葉や友達への声かけが増え、「ぼかぼか言葉」など前向きな言語表現も育成された。また、クラスや学年を越えてチーム編成することで、多様な他者との関わりも促進された。

(3) 低学年(1・2年)の成果

1年生では、学習カードを活用し、目標意識を持って運動に取り組む姿が見られた。技ができたことを記録したり、色を塗って達成感を味わったりすることで、児童のモチベーションが高まり、学級の一体感も醸成された。アンケートでは、「体育がとても楽しい」と回答する児童が学期ごとに増加した。

2年生では、体づくり運動の中で、児童が自分たちで遊び方や場の工夫を考える活動を重ねた。「どうすれば運動が楽しくなるか」を考えながら取り組む姿が増え、「体育は楽しい」と答える児童が9割以上に達した。教師の指示だけに従うのではなく、自ら創意工夫する経験が、学習への主体的な関わりを引き出した点が大きな成果である。

(4) 中学年(3・4年)の成果

3年生では、年度初めに実施した意識調査をもとに、運動への苦手意識を持つ児童にも配慮した授業づくりを進めた。動画教材や導入の工夫によって学習への意

欲が高まり、単元のゴールを児童と共有することで、協働的な学びが実現した。グループ活動や試合形式の授業では、すべての児童が主体的に関わる姿が見られ、仲間からの声かけや助け合いの場面が多く見られた。

4年生では、研究授業に向けて表現運動の教材研究を深め、ICT や学習カードを活用しながら、児童が自ら動きを創造・発展させる授業が展開された。グループでの話し合い活動を通じて、自分の思いや表現を伝え合う力が伸び、「お互いの良さを認め合う」体育の実現に近づいた。表現運動で得た経験は、音楽発表会や学校行事にもつながり、学年全体での自己表現力の向上が感じられた。

(5) 高学年(5・6年)の成果

5年生では「みんなが楽しめる体育」をテーマに、運動が得意な児童も苦手な児童も参加しやすいようなルールづくりが行われた。ティーボールやテニピンなどでは、教え合い・協力し合う工夫が随所に見られ、ルールを自分たちで考えることで学習への主体性も高まった。また、運動の過程を分解して自己課題を設定し、動画を用いて振り返る取り組みは、児童の思考力の育成にもつながった。

6年生では、学年全体で「小さじ一杯の工夫」を意識した実践を進め、ネット型や器械運動において、ICTを活用した振り返りや学習カードを通じて、児童が自らの成長を実感できる場面が多く見られた。「体育が楽しい」と答える児童は約9割に達し、振り返りや話し合いに取り組む児童も増加した。体育の学びを通して学級の人間関係も改善され、運動を通じた心の育ちも実感された。

6. これからの学校教育に求められる課題

現代社会において、子どもたちを取り巻く環境は大きく変化しており、学校教育には、より柔軟で実効性のある対応が求められている。体育科においても、単なる運動技能の向上だけでなく、友達と共に学び合い、自己の課題に向き合いながら考え・判断し・表現する力を育成することが必要である。本研究における取り組みを通じて見えてきた今後の教育における重要な課題は以下の3点である。

第一に、「すべての児童が参加しやすい学びの場づくり」である。児童の体力差、性差、得意・不得意、発達段階の違いをふまえた授業デザインが今後ますます求められる。体育に限らず、教科横断的に「誰一人取り残さない」教育を実現するためには、授業のユニバ

ーサルデザイン化が不可欠である。

第二に、「自己肯定感と他者受容のバランスのとれた育成」である。調査結果からも、一定数の児童が自己の力に自信をもてずにいることが示唆された。体育の学習は、自分の成長を実感できる機会でもあり、また仲間からの励ましや協力を通して、社会的スキルや自己肯定感を育てる場でもある。学校全体での体験活動や協働的な学びを通じて、自己と他者を認め合う力を育てていく視点が重要である。

第三に、「教員同士の学び合いを軸とした組織的な授業改善」である。学びの質を高めていくためには、教員が日々の実践を振り返り、他者と協働しながら授業を改善していく文化を学校内に根付かせることが必要である。若年層の教員が増える中、世代を超えて実践を共有し、共に学び合う校内研修の在り方、授業研究会の工夫、縦のつながりを意識した指導体制の確立が今後の課題として挙げられる。これからの教育は、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実の中で、一人一人の子どもたちの可能性を引き出すことが求められている。体育科の実践を通じて得られた気づきや手ごたえを、他教科や学校全体の教育活動にも波及させ、未来を生きる子どもたちの「生きる力」の育成につなげていくことが必要である。

7. おわりに

本研究は「友達と共にスポーツの楽しさを味わうことのできる児童の育成」を目指し、体育科を中心に、特別支援学級を含めた全学年で年間を通した実践を積み重ねてきた。その中で、運動に対する肯定的な意識の向上、友達との関わりを通じた思考力・判断力・表現力の育成、「小さじ一杯の工夫」による誰もが参加できる体育の実現など、様々な成果が見られた。

特に印象的であったのは、児童一人一人が友達との学び合いを通じて自己の良さに気づき、自信をもって運動に取り組む姿である。体育という教科が持つ「体を動かす楽しさ」だけでなく、「心を育てる力」「人とつながる喜び」に改めて注目し、体育科が担う教育的役割の大きさを再認識する一年となった。

また、校内研究を通して教員同士が日常的に学び合い、自らの授業を見つめ直す機会が増えたことも、本校の教育力を高める大きな一歩となった。今後も本研究の成果と課題をもとに、児童の実態に応じた授業改善を継続し、すべての児童が安心して学び、成長できる学びの場をつくっていきたい。

児童が自ら計画して進んで学ぶ力を育む取組

～単元内自由進度学習を通して～

千葉市立大木戸小学校
校長 浅田 康成

1 研究概要

(1) 問題の所在

学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善について示されている。また、授業改善の具体的な方法として、「個別最適な学び」について「指導の個別化」と「学習の個性化」に整理されており、児童生徒が自己調整しながら学習を進めていくことができるよう指導することの重要性が指摘されている。本校においても、研究や研修等において教職員に伝達している。

しかしながら、このような学習の必要性を感じながらも、実際の授業においては今まで通りの一斉授業が展開されている。その授業は理解が速くより応用的な学習ができる児童と学習に躓いている児童には丁寧な支援が行われていないのが現状である。つまり、一人一人に合った学習が行われていないのである。

また、本校は各学年1学級（最大16名）、全校児童85名の小規模の学校である。各学級の人数が少なく、生活面、学習面において教師の指導がと通りやすいメリットがある。負の側面として、児童が多くの場面で、教師の指示を待って学習や活動を行う状態になっていることがある。

そこで本校では、「自分（たち）で考え、学習・行動・解決できる児童の育成」を学校経営の重点として示した。教職員が現状を理解し、その改善のためにどのようなことが必要なのか、どのように手立てを講じていけば児童の主体的な学びを実践できるかを考えさせたい。限られた時間の中で教師が新しい授業形態を研究したり、その実践の結果を確かめたりすることが難しい実態がある。

そこで、指導的な立場の職員がモデルを提示することで、教師の「自分もやってみよう」という意欲化を図るとともに、実践を通して児童の変容を確かめたいと考え、本主題を設定した。

(2) 研究の目的

必要な学びを児童自身が判断し、実行できることが望まれる。その教育方法の一つ「単元内自由進度学習」を実践することを通して、授業の具体と児童の姿を明らかにする。また、モデルを示すことによって、教師の授業改善への意識を高める。

(3) 研究の方法（事例研究法）

- ・対象 5年生（11名） R6年11月
- ・授業担当：算数（教務）、国語（教頭）

2 授業実践

★学習ガイダンス★

資料1

学習ガイダンス

国語「国語が教えてくれること・自然環境を守るために」 算数「円と正多角形」

名前（ ）

学習を進める上でのポイント

- ① 自分に合った学習の仕方は何か、毎時間考えて取り組みましょう。
- × 9月も友達と一緒にやろう ○ 練習問題だから一人でやってみよう
- 少し難しいから、○○に教えてもらいながらやろう
- 静かな中の方が集中して取り組めそうだな
- ② 「わかったら」はぜひにしません。
- 「わからない」は「できるよになる」チャンスです。わかるようになるために
- 「どこで聞ける」「友達に聞く」「先生に聞く」「動画を見る」「デジタル資料を見る」など、自分から「わからない」を「わかる」にできる努力をしましょう。
- ③ 「プリント」は必ず行いましょう。（教科書の内容をもとにした大切な学習です）
- ④ 「教科書」「スマートレクチャー」は、プリントを進める上でわからない場合は参考にしましょう。
- ※練習問題などがある場合は、自分の進み具合に合わせて問題数を選んで行いましょう。
- ⑤ 「問題ドリル」は、進み具合に合わせてページを選びましょう。
- ⑥ 学習で使ったものは、使い終わったら元の場所へもどしましょう。
- ⑦ 2教科、国語10時間・算数8時間の計18時間で行います。
- ⑧ 「ここまでは終わらせよう」までは必ず終わらせるように計画表をもとに取り組みしましょう
- ⑨ 学習計画を立てますが、早く進んでもおそくなってしまっても構いません。毎時間、計画を見直しながら、学習に取り組みしましょう。

※ 学習計画の例

	じくくりコース	1教科ずつコース	さくさくコース
1時間目	国語	算数	算数
2時間目	国語	算数	算数
3時間目	算数	算数	国語
4時間目	算数	算数	国語
5時間目	国語	算数	算数
6時間目	国語	算数	算数
7時間目	算数	算数	国語
8時間目	算数	国語	国語
9時間目	国語	国語	算数 有難問題
10時間目	国語	国語	算数 有難問題
11時間目	算数	国語	算数 有難問題
12時間目	算数	国語	算数 有難問題
13時間目	国語	国語	算数 有難問題
14時間目	国語	国語	国語 有難問題
15時間目	算数	国語（算数）有難問題	国語 有難問題
16時間目	算数	国語（算数）有難問題	国語 有難問題
17時間目	国語	国語（算数）有難問題	国語 有難問題
18時間目	国語	国語（算数）有難問題	国語 有難問題

月	日	曜	1時間目	2時間目	3時間目	4時間目	5時間目	6時間目
11	14	木	社会	国語	理科	外国語		
11	15	金	家/体	算数	図書	理科	総合	図工
11	16	土	国語 自由進度②	わくわく	学習参観	算数 自由進度③	外国語	
11	19	火	算数 自由進度③	国語 自由進度③	家庭科	道徳		
11	20	水	音楽	算数 自由進度③	理科	国語 自由進度②	体育	社会
11	21	木	社会	国語☆ 自由進度③	理科	外国語	算数 自由進度②	総合
11	22	金	家/体	算数 自由進度③	図書	理科	総合	図工
11	25	月	国語 自由進度③	体育	社会	算数 自由進度③	外国語	委員会
11	26	火	算数 自由進度③	国語 自由進度③	家庭科	道徳	音/図	
11	27	水	音楽	算数 自由進度③	理科	国語 自由進度③	体育	社会
11	28	木	社会	国語☆ 自由進度③	理科	外国語	算数 自由進度③	総合
11	29	金	家/体	算数 自由進度③	図書	理科	総合	図工

国語と算数を同時に進めるため、「学習を進める上でのポイント」と学習計画を児童に伝えた。

(資料1参照)

(1) 算数「円と多角形」(8時間扱い)

① 整備した学習環境と効果

ア ひとまとまりに手引きシート

「単元内自由進度学習の手引き」「円と正多角形学習の手引き」「学習計画表」「単元全体の振り返り」をひとまとまりにして、1時間目のオリエンテーションで説明し、単元全体の学習の流れを児童と共通理解した。(資料2参照)

資料2

単元内自由進度学習の手引き
～算数「円と正多角形」～

名前()

◇ 計8時間で行います。「ここまでは終わらせませう」までは必ず終わらせるように計画を立てましょう。計画から早く進んでもおそくなくてもかまいません。学習計画表の「ふりかえり」と次の時間の「計画」は残り5分になったら記入します。毎時間、活動を見直しながら、計画を立てましょう。

◇ 「わかったらいい」はしません。「わからない」は「できるようにする」チャンスです。「1人できるところ考えよう」「友達に聞く」「先生に聞く」「教科書を見る」など、自分から「わからない」を「わかる」に変える努力をしましょう。

◇ 「プリント」はお手引き。終わったらすぐに提出しましょう。先生のつけを待たずに先に進んでもかまいません。もどくところは先生に聞いてもらいます。「教科書」は、プリントを進める上でわからない場合は参考にしましょう。

◇ 「算数ドリル」は、進み具合に合わせてページを選びましょう。

◇ 「チェックテスト」は毎回でも受けられますが、合格は満点です。先に進んでもよいですが、あとで合格してもらいます。ドリルなどでよく理解してから行いましょう。

◇ 学習で使ったものは、使い終わったら元の場所へもどしましょう。

学習の場

児童会室	5の1教室 ①チェックテスト	多目的室 ②発展学習 ☆1～☆5	ホール ③発展学習 ☆6	図書
廊下				

※チェックテストは、円がいれはむすに行いたいので、5の1教室の廊下で行います。
※☆6は、発展の準備があるため、ホールで行います。
※他の学習は、児童会室・5の1教室・多目的室・ホールなどの場所で行ってよいです。

R7.1月 単元内自由進度学習 1

算数「円と正多角形」 学習の手引き

目標

◎正多角形の意味や性質について理解し、作図することができる。
◎円の直径から円周を求めたり、円周から直径を求めたりすることができる。
◎円や正多角形の性質の作図の仕方を書きとる。
◎円周率をみいだしたり、円周や直径の求め方を考えたりしている。
◎正多角形の作図の仕方や円周率のよさに気づき、生活や学習にいかそうとしている。

学習の流れ

学習内容	プリ	教科書	算数	備
①ガイダンス 学習の計画を立てる。				
②正多角形の意味や性質を調べる。	A	194～195		
③円の中心のまわりの角を等分して正六角形・正五角形・正八角形をかく。	B	196		
④コンパスを使って正六角形をかく。正六角形・正八角形をもとに模様をかく。	C	197		
★チェックテスト① プレテスト → 先生に提出する				
⑤円周の意味を知り、円周と直径の長さの関係を調べる。	D	198～199		
⑥円周と直径の関係を調べ、円周率を求める式を理解する。	E	200～201		
⑦円周率を使って、円周や直径を求める。	F	202		
⑧円周は直径に比例することを調べる。	G	203		
⑨「学びのまとめ」 → ノートに行う		204		
★チェックテスト② プレテスト → 先生に提出する				
ここまでは全員終わらせませう				
★発展問題★				
☆1 ドリルパークで復習しよう				
☆2 正多角形のきき方をもとにして、模様をかく				
☆3 いろいろな正多角形をかく ・中心のまわりの角を分けて、正五角形や正三六角形をかく ・分度器を使わず、正八角形や正五角形をかく				
☆4 円周率の求め方を考えよう ・円周と外周に多角形をかくと調べる ・ピュウの針を縫って調べる				
☆5 円周率を調べる ・10桁まで ・30桁まで ・100桁まで				

資料3

学習計画表

日	計画	進捗状況	振り返り
1			
2			
3			
4			
5			
6			
7			
8			

R7.1月 算数「円と正多角形」 3

単元全体の振り返り

●目標に対しての振り返り

番号	振り返り	達成度
1	正多角形を作図し、正多角形であることを説明することができた。	3.55
2	円周率が「約3」であることを理解し、直径や円周を求めることができた。	3.73
3	正多角形や円周率の理解を深めるために、様々な学習に取り組むことができた。	3.64

●単元内自由進度学習に対する振り返り

番号	振り返り	達成度
4	「ここまでは終わらせませう」までが終わるように計画を立てられた。	3.09
5	授業残り5分になったら、「ふりかえり」と次の時間の「計画」を記入できた。	2.55
6	毎時間、活動を見直ししながら計画を立てられた。	3.18
7	自分から「わからない」を「わかる」に変える努力をした。	3.64
8	学習で使ったものを使い終わったら、元の場所へもどせた。	3.91

●ワークテストの達成度

番号	ワークテスト	達成度
9	ワークテスト 知・理	87.3
10	ワークテスト 思・判・表	61.8

R7.1月 算数「円と正多角形」 4

また、「学習計画表」の「計画」「振り返り」を毎時間書き、提出するようにした。さらに、「単元全体の振り返り」を単元末に行い、自分の振り返り、以後の学習に生かせるようにした。「単元全体の振り返り」の集計(資料3・4参照)を見ると、番号1～3の「単元の目標に対しての振り返り」と番号7～8の「単元内自由進度学習の振り返り」において4点満点中3.5点以上の平均値だった。算数の目標や単元内自由進度学習における学び方を児童が理解しながら学習を進められたので、一人一人が学びの達成感を得られたことにつながったと考えられる。

資料4

		平均
◆単元の目標に対しての振り返り		
1	正多角形を作図し、正多角形であることを説明することができた。	3.55
2	円周率が「約3」であることを理解し、直径や円周を求めることができた。	3.73
3	正多角形や円周率の理解を深めるために、様々な学習に取り組むことができた。	3.64
◆単元内自由進度学習に対しての振り返り		
4	「ここまでは終わらせませう」までが終わるように計画を立てられた。	3.09
5	授業残り5分になったら、「ふりかえり」と次の時間の「計画」を記入できた。	2.55
6	毎時間、活動を見直ししながら計画を立てられた。	3.18
7	自分から「わからない」を「わかる」に変える努力をした。	3.64
8	学習で使ったものを使い終わったら、元の場所へもどせた。	3.91
◆ワークテストの達成度		
9	ワークテスト 知・理	87.3
10	ワークテスト 思・判・表	61.8

イ 教科書に準拠したプリントと自分の理解
を自分自身で確かめられるチェックテスト
(資料5 参照)

教科書を見ながら、自力で進められるプリント
を準備した。チェックリストは満点を取るまで繰
り返し行うようにした。 資料5

プリント D 名前()

①円の周(まわり)のことを といいます。

ア 円周を書きなぞりましょう。

イ 正六角形のまわりの辺の長さを、直径の()倍です。

ウ 正六角形のまわりの辺の長さは、直径の()倍です。

エ 円周は直径の()倍より少し長いです。

オ 円周 > 直径 × ()

②円周率マシンを使って、4cm～8cmの円の円周を調べよう。

直径 (cm)	4	5	6	7	8
円周 (cm)					
円周÷直径					

③どんな大きさの円でも、 は同じ数になります。

この数を といいます。

円周 = ×

円周率はふつう を使います。

円周 = ×

言葉で聞かれたら…
公式を聞かれたら…
使い分けが大切！
計算するときは…

児童の理解
が不十分に
なりそうな
部分には、
スモールス
テップで解
けるように
問題を工夫
した。

チェックテスト① 点数 / 6

名前()

①辺の長さがすべて等しく、角の大きさもすべて等しい多角形を()といいます。

②下の図形は、辺の長さも角の大きさもすべて等しいです。なんという図形でしょうか。

③分度器を使って、正五角形をかきましょう。

④かいた図形が正五角形であることを説明しましょう。
矢印を使ったり、数値を書き入れたらいい説明しよう。

⑤コンパスを使って、正六角形をかきましょう。

⑥かいた図形が正六角形であることを説明しましょう。
矢印を使ったり、数値を書き入れたらいい説明しよう。

単元の目標
の「説明で
きる」を達
成できるよ
うに説明を
記述する問
題を設定し
た。それに
合わせてプ
リントの問
題も工夫し
た。

「教科書を見れば答えが書いてある、解き方がわかる」と児童が理解することで、「自分でじっくり考える」姿を引き出すことができた。また、チェックテストが途中にあることによって、自身で理解の不十分を感じたり、合格するためにプリントや教科書を振り返ったり姿が見られた。



ウ 理解を深める発展学習

早く学習が進んだ児童のために発展学習を6つ準備した。単元の内容に合わせて「正多角形を一刀切りでつくろう」「幾何学模様をかこう」「コンパスだけで正五角形をかこう」「身近なもので円周率をたしかめよう」「円周率を覚えよう」「ビュフォンの針実験をたしかめよう」を準備し、ただの時間の帳尻合わせではなく、活動を通して正多角形や円周率の理解が深まるようにした。

「単元の目標の振り返り」の中の「正多角形や円周率の理解を深めるために、様々な学習に取り組むことができた」という項目があったこともあってか、発展学習に進んで取り組む姿が見られた。

② 児童の振り返り

◆「わからない」を「わかる」に変えるためによかった学習方法は何ですか？

- ・教科書を見る6
- ・じっくり考える5
- ・先生に聞く5
- ・友達に聞く5
- ・まちがいの理由を考える1
- ・プリントを見返す1

→「先生・友達に聞く」という回答がそれぞれ5人ずつあったが、「自分でわからなかったら」という条件付きで回答している児童がほとんどだった。授業での実際の様子と合わせて考えても、自力で考えている姿を多く見ることができた。

◆単元内自由進度学習を通して、できるようになったこと、ついた力は何ですか。

- ・自力で理解を深める力7
- ・活動を見直して、計画を立てる力5
- ・時間配分を考えながら学習する力4

◆単元内自由進度学習を通して、今後、つけたい力は何ですか。

- ・自力で理解を深める力7
- ・活動を見直して、計画を立てる力3
- ・時間配分を考えながら学習する力1

→上記2つの質問項目の回答については、「自力で理解を深める力」「活動を見直して、計画を立てる力」「時間配分を考えながら学習する力」に集約することができた。単元内自由進度学習での目指すべき学び方をがしっかりと理解していることが見取れる。一方、「単元全体の振り返り」の「単元内自由進度学習の振り返り」の番号4～6の項目については、他に比べて得点が低かった(資料4 参照)。学習の調整力は継続的に高めていく必要を感じた。

③ 全体を通して

欠席をした子は4時間で全ての内容に取り組んだ。自力で行えるプリントを作成したこともあり、遅れを自力で取り戻せる子には個別支援を行う必要がなかった。時間が足りない子には、個別に支援を行ったが、プリントを一緒に考えていったので、あまり時間はかからなかった。また、複数の部屋を準備はしたが、ほとんどの時間を自教室で学習していた。

児童にとっても受動的な時間がほとんどなく、能動的に活動している時間が長いので、集中して取り組んでいる様子が多く見られた。また、振り返りや計画の時間も十分に取ることができた。

ワークテストの達成度（資料4参照）を見ると、「知・技」88.2%、「思・判・表」61.8%と「思・判・表」の達成度に課題が残った。思・判・表における目指す姿があいまいだったことが一因と考える。目指す姿に応じて課題を考えていく必要を感じた。一方、「知・理」の習得にとって十分に効果があると感じた。また、「主体的に学ぶ態度」の育成をするために大きな可能性を感じた。事前の教材準備については大変な部分はあるが、その分、授業時間内や単元内での授業準備はほとんど行わないで済み、児童の見取りをしっかりと行うことができるという大きなメリットがある。単元を見通して、学習を構成することは授業を行う上でとても大切なことだと改めて感じた。

今回、学習が上手く進んだ背景には、体育や総合で調整しながら学習を進める授業をしっかりと行ってきたことと、先に国語で単元内自由進度学習を行ったことがあると思う。一過性で終わらずに、継続して組織的に行えるようにしていく必要性を感じた。

一方、この単元内自由進度学習がベストの方法ではなく、従来の一斉指導にもたくさんのメリットがある。目標に向かって、よりよい指導方法や学習方法を選択できるようにしていきたい。

(2) 国語「固有種が教えてくれること 自然環境を守るために」(12時間扱い)

最初、「これで合っていますか」とか、意見文を書くときに「何枚書けばいいですかと質問する児童がいた。児童は、自分で正解（自分で考える）を出すのではなく、教師が求めるものを正解と思っているのだと知り、驚くとともに反省させられた。

① 整備した学習環境と効果

ア 学習の見通しをもつ（ガイダンス）

ガイダンスで、丁寧に学習のねらい、進め方を説明。表中の①②を全体で行い、単元の目標、ゴールを伝え、見通しをもたせた。（資料6・7参照）

目標

- ◎筆者の説明の工夫をさがしながら読み、その工夫がどのような効果をもたらしているか考える。（①～⑥）
- ◎「固有種が教えてくれること」で学んだ、資料の効果をいかして、（①～⑥）
- 関心のある環境問題について考えたことを生かして書く。（⑦～⑬）

資料7

学習の流れ ^①			
学習内容 ^②	教科書・掲示物 ^③	提出物 ^④	場 ^⑤
○ガイダンス 学習の見通しをもつ ^⑥	教P158,159,160 ^⑦		5-1 ^⑧
① 通読する 問いをもつ ^⑨			
初めて知ったこと・興味をもったこと・資料を用いることの効果について考える。 ^⑩			5-1 ^⑪
② 伝えよう 文章構成を確認する。 ^⑫			
自由進③ 伝えよう 文章の要旨をまとめる。 ^⑬	掲示物 ^⑭	ノート提出 ^⑮ ドリル15 ^⑯	⑪
④ ふかめよう 資料の効果を考える。 ^⑰	掲示物 ^⑱	ノート提出 ^⑲	⑪
⑤ まとめよう 資料の効果にふれながら、自分の考えをまとめる。 ^⑳	掲示物 ^㉑	ノート提出 ^㉒ ドリル16 ^㉓	⑪
⑥ ひろげよう 筆者の説明の工夫の効果について、伝える。 ^㉔			5-1 ^㉕
自由進⑦ 環境に関する図書を読む どちらの進め方でもよい ^㉖			⑪
・③～⑤を一気に進めて、⑦ ^㉗			
・③+⑦ ④+⑦ ⑤+⑦ 並行読書 ^㉘			⑪
⑧ 問いをもつ 自然環境を守るために、どんな環境問題があるか、解決したいものは何か。 ^㉙			
⑨ 参考「家庭での節電に取り組もう」(p163)、「統計資料の読み方」(P165)を読む。 ^㉚			5-1 ^㉛
自由進⑩ 統計資料を集めて、自分の考えをもつ ^㉜	教科書P165 ^㉝	▽意見文提出 ^㉞	⑪
⑪ 文章の構成を考える。 ^㉟	② 教科書P163 ^㊱	▽意見文提出 ^㊲	⑪
⑫ グラフや考えを用いて、考えを書く。 ^㊳	④ 教科書P163 ^㊴	▽意見文提出 ^㊵	⑪
⑬ 書いた文章を友達と読みあおむ。 ^㊶			5-1 ^㊷
学習の場所 ^㊸	一斉授業は、5-1 教室 自由進度学習は、5-1 教室の自席か多目的室で学習を行う。 ^㊹		
提出物 ^㊺	・自由進度学習では、学習時間の終わりに学習したノートや意見文等を提出 ^㊻ ドリル15,16は⑥の学習の前までに提出。 ^㊼ ・学習計画表は、毎時間提出 ^㊽		
学習の調整 ^㊾	⑥、⑨、⑬の学習日に合わせて、自分で、学習内容を調節する。 ^㊿		

○資料の効果等について、補足が必要だと感じたので、授業開始時に一斉授業を行い、ポイントを押さえた。ヒントコーナーに掲示物を追加した。また、表中④の学習を個人でやっており、ノートを確認しても理解はしていた。進度によっては表中⑨に入っている児童もいたので、表中⑥の⑨の内容と⑨の内容を一緒に行った。⑨以降の学習「意見文」のモデル文を提示し、資料の効果について確認した。



○利用すると思われる資料は、ギガタブで写真を撮り、クラスのフォルダに格納した。印刷が必要な場合は教師が行った。今回は以下の理由により PC を使わず、図書資料のみとした。

- ・調べ学習がねらいではない
- ・時間に制限がある
- ・テーマが決まっている
- ・図書資料を見比べ、どの資料を使うか検討させたい。



意欲的に学習できるように、教科書に参考図書として載っている本を購入した。図書館指導員に協力してもらい、環境の本、統計資料の本を準備した。統計の資料はあまり用意できなかった。

② 児童の振り返り

◆単元内自由進度学習を通して、できるようになったこと、ついた力は何ですか。

- ・調整力がついた
(今はこれが終わってないから、次はこれをやろうと自分でできるようになった。)
- ・自分で考えて行動する力がついたと思う。
- ・自分で物事を進めて、自分を中心にして考えることができる力がついたと思う。
- ・時間の配分を決める力がついたと思う。
- ・先生に何でも聞かないこと (少し自立)
- ・「時には自分の力でもできるんだ」と思った。
- ・自分で考える力、計画性が身についた。
- ・分からないことも友達と話し合ったりして解決することもあったので、自立力も付いた。
- ・自立する力がついた。
- ・自分で進め方を決めて、進めたい。
- ・学習配分を自分でできるようになった。
- ・自分で計画したり先を見て考えたりすること
- ・先生に聞かなくても、たくさん書けた。

◆単元内自由進度学習を通して、今後、つけたい力は何ですか。

- ・文章をわかりやすく書く力をつけたい。
- ・文章を詳しく書く力をつけたい。
- ・文章の構成をもう少しよくして、文を書きたいです。

- ・前より自分で文章をかくことができるようになった。
- ・資料を文章に生かす力が付いた。
- ・時間を気にして行動する力を付けたい。
- ・先生にあまり聞かず自分で考えて行動することです。
- ・学習の手引きを見て、自分で確認する。
- ・切り替える力を付けたい。
- ・自己調整力をつけて、時間通りに進めていきたい。
- ・決めたことを必ず守る力
- ・時間を気にしながらやりたい。
- ・友達と余計な事を話してしまった。もう少し自分のことに集中したい。
- ・文章をわかりやすく書く力。
- ・文章の構成をよくして文を書きたい。
- ・くわしく書く力を付けたい。
- ・自分の力で長い文を書きたい。

③ 全体を通して (児童の様子)

自教室の隣に机・いすを準備し、教室でも多目的室でもどちらで学習してもよいこととした。自教室で学習する児童は、1名。他10名はこちらで学習していた。自由に座っていたが、それぞれ自分の課題をやっていた。時々、相談する様子も見られた。児童が座る場所は、自由にしたが、定位置に座っている児童がほとんどだった。一斉授業は、自教室で行った。人数も少なく、教室も隣同士だったので、机間巡視も特に問題なかった。担任の協力もあり、同様に机間巡視をしてくれ、児童の質問に答えてくれたり、国語の時間外にサポートが必要な児童の支援をしてくれたりした。

3 終わりに

今まで、一斉授業で多くの時間を学んできた児童にとって、今回の「単元内自由進度学習」で新しい学びの経験となった。教務や教頭がまず、市のセンターで「単元内自由進度学習」を研修してきて、それを持ち帰り、学校で実践し担任に提示した。そして、実践者、担任が、この学習方法に「主体的に学ぶ態度」の育成を図る大きな可能性を感じた。担任の中にも自分でも実践できるよう、今年度は市のセンターで研修を受講する者も出てきている。

学習に限ることなく、学校教育活動全体にも児童が主体的な態度で取り組むことができるように実践を進めていきたい。

ふるさとに誇りと愛着をもち、生き生きと挑戦できる児童の育成

～命の授業とキョントンメン作りの実践を通して～

勝浦市立総野小学校

校長 矢代 庸 一

1 はじめに

本校は、千葉県南部、勝浦市の山間部にある全校児童50人の小規模校である。学区には、豊かで美しい自然が残されており、多種多様な動植物が生息している。しかし、児童数の減少から令和8年4月に勝浦小学校との統合が決定している。

そのような中、学校教育目標は、「生き生きと挑戦する児童の育成～ふるさとに誇りと愛着をもち、積極的に他者と関わることを通して、自己存在感を育む～」としている。本校児童は、まじめで、礼儀正しく、思いやりのある子供たちである。しかし、自分から進んで物事に取り組んだり、他者と積極的にコミュニケーションをとったりすることが苦手な児童が多い。児童が、様々なことに生き生きと挑戦できるようにするには、自分に自信をもつことが必要であると考え。

そこで、自分たちが生まれ育った地域に誇りと愛着をもつことが、積極的に他者と関わり、自己存在感を高めていく一助となると考える。

2 研究の経過

本校は、令和3年度から5年度まで千葉県教育委員会から福祉教育推進校の指定を受けていた。本校では、福祉教育の目標を「地域とつながり、地域から学ぶ過程を通して、主体的に学習に取り組む児童を育成する」とし、今年度も継続的に取り組んでいる。身近な生活課題について、「なぜ」「どうして」といった疑問から始まり、子供たちに地域の一員として、「自分はどうすべきか」と判断させる。他人事ではなく自分事として学びをつなげていくことで「主体的に考え、行動する力」を育むことに結びつくと考え、実践に取り組んできた。重点目標は以下のとおりである。

- 地域の中で様々な人と関わりあって、生活していることに気付くことができる。
- 地域のよさや課題に気付く、よりよい生活を目指すことができる。
- 地域との交流や体験活動を通して地域に対する理解を深め、共に幸せな生活を送るための工夫をすることができる。

その活動の中で、子供たちが勝浦市の抱えている課題として、猟師の話を手掛かりに、有害鳥獣の問題について何とかしたいという思いをもった。そこで、自分なりの解決策を考え、主体的に学習に取り組むことを目的とし、継続的に「命の授業」を実施して3年目になった。

1年目2年目は、猟師をしている講師を招き、勝浦市では、有害鳥獣が、年間5,000頭以上捕獲されるが、ほとんど利活用されていないことを学んだ。

実物の毛皮や頭骨に触らせてもらったり、鹿の角や骨を使ったキーホルダーを作ったりすることで関心をもち、有害鳥獣と共存していくための方法を考えた。

3年目の本年度は、有害鳥獣として、近年千葉県で急増している（勝浦市でも同様）キョンに限定して考えていくことにした。さらにはキョントンメン（キョンの肉を使ったタンタンメン）作りに取り組むことによって、キョンとの共存について考え続けていくことの大切さに気付かせていきたい。

また、本年度の食育教育については、感染症も落ち着き、勝浦市食生活改善会や千葉県調理師会勝浦支部と協働した調理実習を全学年で計画した。

さらには、令和6年度は、4年生と5年生が複式学級であり、海洋教育パイオニアスクールプログラム「勝浦弁当を作ろう」で実践報告する予定になっている。計画は以下のとおりである。

表1 食育教育実施計画

実施時期	学年	協力機関
6月中旬	1年	栄養教諭
内容 講話	「赤・黄・緑の3つを食べよう」 親子給食	
6月下旬	2年	栄養教諭、食生活改善会
内容 講話	「元気モリモリ野菜パワー」	
実習	「育てた野菜をおいしく食べよう」 フライパンピザ 親子調理	
10月上旬	4・5年	食生活改善会、大原高等学校
内容 講話	「勝浦の水産業について」	
実習	「勝浦弁当を作ろう」 カツオの串揚げ（カツンカツ）	

10月下旬	3年	栄養教諭
内容	講話「おまめのはなし」 ～生命のもと・元気のもと～ 栄養教諭と会食	
11月下旬	5・6年	食生活改善会、猟師
内容	講話「命の授業」 実習「ジビエ肉の活用」 勝浦タンタンメン（キョンタンメン）	
12月上旬	4・5年	食生活改善会、養護教諭
内容	講話「海の恵みひじきについて」 実習「勝浦弁当を作ろう」 ひじきの磯煮	
12月中旬	1・3年	千葉県調理師会勝浦支部
内容	講話「一人できる朝ご飯」 実習「おにぎり作り」 親子調理	
2月上旬	4・5年	食生活改善会
内容	実習「かつうランチをつくろう」 発表「かつうランチプロジェクト」 市長、教育長、学校教育課長、観光課、 保護者参観	

3 研究の目標

命の授業とキョンタンメン作りの実践を通して、ふるさとに誇りと愛着をもつことによって自己存在感を高め、様々なことに生き生きと挑戦できる児童を育成する。

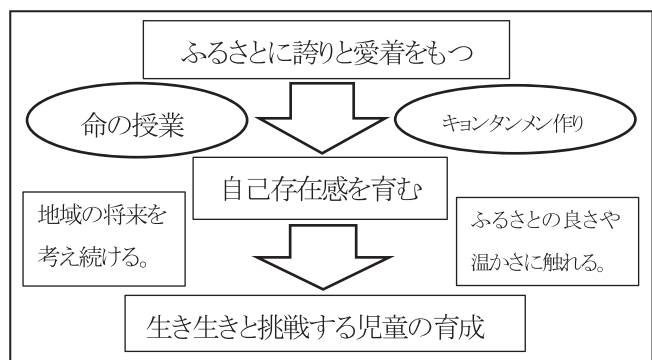


図1 学校教育目標との関連

命の授業を行って、キョンを殺すべきか殺さないべきか真剣に考える中で、結論は簡単に出せないことに気付く。しかし、今後も考え続けていくことが今の自分たちにできる地域への貢献であると捉えさせる。

そこにキョンタンメン作りを加えることで地域の食材を生かすことや地域の方や保護者との関わりを通して、地域のよさや家庭の温かさに気付き、自己存在感を育んでいきたい。それによって学校教育目標である「生き生きと挑戦する児童の育成」を図っていく。

4 研究の実際（5年生4名、6年生15名）

（1）命の授業 11月29日（金）2校時

① 猟師の話

まず、キョンの剥製を触って、大きさや毛並みについて実感させる。体長は大きくなく（47～70 cmで）、毛並みもよくしっかりした毛で覆われていることに気付いた。目はクリッとして愛らしく感じたようである。



キョンの剥製を観察する子供たち

次にキョンが急増した理由について説明があった。中国や台湾に生息していたが勝浦市内の動物園で飼われ、それが野生化して勝浦市はもとより千葉県内で急増している。千葉県の気候が中国や台湾に似ており、餌となる木の葉や果実がある人里付近を好んで生息しているためと言う。

さらには、多発するキョンの被害について説明があった。水稻、豆類、芋類、野菜、果樹、特用林産物、花壇の花にまで被害が出ている。また、キョンの鳴き声は特徴的であることから周辺住民から苦情が多い。自宅周辺道路に自動車にはねられているキョンの死骸を頻繁に見かけると言う。

最後に令和4年に勝浦市内で1年間に捕獲したキョンの数は1,991頭であるが、そのうち利活用された頭数は0である。キョンの肉は中国では、低タンパク高カロリーで大変高価であると言う。



キョンについて説明する猟師

②「殺すべきか」「殺さないべきか」

これらの情報を得た子供たちに、「キョンを殺すべきか」「殺さないべきか」を質問した。

過去2年間でも、子供たちに有害鳥獣に対して、同じように質問し、考えさせてきた。対象の子供たちは異なるが、動物にも命があり、命を奪うことには抵抗があるようである。「有害鳥獣は殺すべきではない」という児童が多く、有害鳥獣と人間の共存の方法を考えていた。「動物園を作って捕獲した有害鳥獣を飼う」「動物の生息地と人間の生活圏の間に柵を作って棲み分けをする」という意見が出された。



キョンを殺すべきと考えた理由を発表

本年度は、19名全員が「キョンを殺すべきである」に手を挙げた。子供たちは、キョンは人間の生活に害を及ぼす有害鳥獣であることは家庭や地域でも聞かされており、キョンの被害に苦しんでいる人があることを実感している。さらには、昨年度の実践で鹿肉のソーセージを試食しており、ジビエ料理の存在についても知っている。また、鹿の骨で作ったストラップも作成し、大切にしている子も多い。そのため、キョンは殺すがその肉や骨、毛皮を有効活用していくことが望ましいと判断したのである。

その後、参観していた保護者に意見を求めると「全員がキョンを殺すべきと判断したことに驚いた。キョンも命あるもの。簡単に殺していいのか。」と発言した。



参観していた保護者からの意見を聞く

それを聞いた子供たちは、自分たちの考えをもう一度見つめ直したようであった。数名の子は、改めてキョンを殺していいのか自問自答して答えに迷っているようであった。

(2) キョントンメン作り 11月29日(金)

3・4校時

① 調理実習

勝浦市食生活改善会や栄養教諭の協力を得て、キョンの肉を使ったタンタンメン作りに取り組んだ。材料は、ニラ、玉ネギ、キョン肉、麺、ニンニク(すりおろしたもの)、豆板醤、粉末スープである。子供たちは、保護者が見守る中、ニラをざく切りにし、玉ねぎをみじん切りにした。フライパンに油をひいてニラと玉ネギを炒め、火が通ったあとキョンの肉を入れた。キョンの肉はスライスであったが火が通るとバラバラとひき肉のように細くなっていっただ。途中、キョン骨スープの味見をしたが、比較的あっさりしていたが、癖のある油のおいを感じた子もいた。



食生活改善会の方と一緒に調理

次に鍋のスープを火にかけ、ニンニク(すりおろしたもの)、豆板醤を入れ、煮立つとあらかじめ茹で上げていた麺を入れ、完成である。

発砲スチロールの器によそい、親子で会食である。親子で囲むテーブルは笑顔に溢れ、和やかな雰囲気であった。キョンの肉はラム肉のような味に感じた。



保護者と一緒に会食

② キョンタンメンを食べた感想

食べ終わった後、子供たちに感想を聞くと、「キョンの肉が思っていたよりおいしかった。」「友達と協力できてよかった。」「家でも作ってみたい。」という感想が多かった。しかし、保護者から「今日の命の授業を通して本当の『いただきます』『ごちそうさま』の意味がわかった。」という感想が聞かれ、子供たちはハッとしたようであった。



保護者の感想を聞く子供たち

③ 授業後の子供たちの判断

命の授業とキョンタンメン作りを終えたあと、子供たちの考えを調査した。キョンを殺すことに賛成か反対か、解決策の人数を集計すると表2のようになった。

表2 授業後の子供たちの判断 (人)

判断	解決策	人数
賛成	高価で売れる国に輸出 ジビエ料理、工芸品 食べる分だけ殺処分 絶滅させる	12
反対	キョンを捕獲、原産国へ返す 施設保護 森の環境整備	2
両方	有効活用 ジビエ料理、海外へ輸出 キョンを捕獲、原産国へ返す 施設保護 森の環境整備	5

子供たちの判断は、やはりキョンを殺すことに賛成が12人(67%)と多いが、反対や判断がつかず賛成と反対の両方の考えが7人(33%)と増加した。

これは、保護者のキョンも生き物であって簡単に命を奪ってよいのかという発言にもう一度自分の考えを見つめ直し、キョンとの共存を模索し始めた子とキョンタンメンを調理・試食した結果、おいし

かったことから、ありがたく命をいただくことが動物に報いることに繋がるという考えをさらに強くもった子がいたためと考える。賛成の中には、食べる分だけ殺すという考えも出てきた。

子供たちは、被害の実態や猟師や保護者など様々な立場から多面的多角的な考えを聞き、その中で何が一番多くの人たちが納得できる方法なのか公正に判断しようとしていた。身近な地域の問題に真剣に向き合っていた結果であると考ええる。

(3) 考察

① 子供たちの活動に対する情意面の分析

児童の振り返りの感想からキーワード分析によって分類し、それに基づいて児童の情意面の変容を類型化したのが表3である。

表3 振り返りからの情意面の分析

複数回答 (人)

分類	項目	児童標記例	人数
生き生きと挑戦する	態度化	～していくことが大事だ。	15
	行動的興味	これから頑張ってみよう。 ～を願う。	9
	深化	もっと詳しく知りたい。 考えたい。	1
ふるさとに誇りと愛着	感動	～は素晴らしかった。	12
	満足	うれしかった。よかった。	2
	興味	～は面白かった。驚いた。	3
	部分理解	～は分かった。	19

部分理解、興味、満足、感動の段階をふるさとに誇りと愛着をもつ子供たちの現れと捉えたと、部分理解「～が分かった」が19人全員であった。講師の話や友達の意見を聞いて多くの知識を得て、キョンの問題について理解を深めたことが分かる。

興味「～は面白かった。驚いた。」は3人である。キョンの剥製を見てキョンを間近で観察できたこと、今まで知らなかったキョンの生態について知ったこと、勝浦の人がキョンを殺すが利活用してよかったことに大きな驚きをもって興味が高まったようである。

満足「うれしかった。よかった。」は2人である。今日の学習を通して今まで知らなかった多くのことを知ることができたことや今日の学習でキョンの問題について考えるきっかけとなったことにとっても満足したようである。

感動「～は素晴らしかった。」が12人おり、キョンタンメンがとてもおいしかったことや保護者と一緒

に会食ができてとてもうれしかったようである。キョンの問題を考えると共に、地元の食材を生かした料理を味わうことや家族とのふれあいを通して自分たちの住む地域のよさが再認識されたと考える。

また、深化、行動的興味、態度化の段階を生き生きと挑戦する子供たちの現れと捉えると深化「もっと詳しく知りたい。考えたい。」が1人、「猟師が営む施設に行って、もっと野生動物について調べたい。」と発展的な課題をもった。

行動的興味「これから頑張ってみたい。～を願う。」が9人、今日学んだことをこれからの生活に生かしていきたいやこれからキョンと人間が共存できる未来を探したい、キョントタンメンをこれから家庭でも作ってみたい、これから食事のときには、動物の命に感謝して、「いただきます。」「ごちそうさま。」を言っていきたいと将来に向けて自分の生き方に考えが及んだようである。

態度化「～していくことが大事だ。」が15名おり、キョンを殺すべきか殺さないべきか判断したことに対して、改めて自分の考えを書いている。これは、自分がこうしていきたいという態度化の現れと捉えられる。有害鳥獣の問題に主体的に取り組もうとする態度が養われてきている。しかし、これは結論の出る問題ではなく、今回の授業をきっかけとしてこれからも模索し続けていくことが必要であると考える。

さらには、次のように自分たちが住む勝浦市について考えている子もいた。

○キョンは日本固有の動物ではないけど、私たちに身近な動物なので、よい方法見つけて、人間もキョンもキョン以外の動物も安心して棲める勝浦市にしたい。

○キョンが食べ物を求めて、人里に近づくのなら、勝浦市の森や山の環境を整備して、キョンが暮らしていけるように変えていきたい。

○動物たちが暮らせる場所を作って、自然を守りながら動物がたくさんいても大丈夫な勝浦市をつくりたい。

動物との共存を前提に勝浦市について考えることは、自然豊かなふるさとに誇りと愛着をもっている現れであると考え。自分たちの手で将来に向かってよりよい勝浦市を考え続けていくことが自己

存在感にも結びつくと考える。

このことから、命の授業とキョントタンメン作りの実践を通して、ふるさとに誇りと愛着をもつことは、自己存在感を高め、様々なことに生き生きと挑戦できる児童を育成するために有効であると考えられる。

5 成果と課題

(1) 成果

命の授業とキョントタンメン作りの実践を通して、ふるさとに誇りと愛着をもつことは、自己存在感を高め、様々なことに生き生きと挑戦できる児童を育成するために有効であることが検証できた。

今後は、来年度も実践を継続し、キョンの問題についてみんなで考えていかなければならないことに気付かせ、地域や関係機関に発信していく活動に取り組ませていきたい。

(2) 課題

これだけの実践を行うためには、担当者の強い熱意と外部協力者との人間関係が必要であり、継続していくためには実施のための専門的な知識や経験、手法や情報の継承が必要である。

6 おわりに

今回の実践にあたっては、猟師の講師、勝浦市役所市民課、千葉県調理師会勝浦支部や勝浦市食生活改善会の皆様、栄養教諭、保護者等、多くの方々の協力のおかげで大きな成果があったと考える。

また、養護教諭、教頭、5・6年担任を始め本校職員が組織的に学校教育目標の達成に向けて、カリキュラムマネジメントを意識して実践にあたった成果であると考え。

このような素晴らしい実践ができたことに校長として感謝の気持ちでいっぱいである。



できあがった「キョントタンメン」

若手教師の授業研究力の向上を目指した中堅教師の支援

～ 伴走者としての働き～

松戸市立松ヶ丘小学校
教諭 村岡 大地

1 主題設定の理由

『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について～「新たな教師の学びの姿」の実現と、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成～（答申）（2022）において、新たな教師の学びの姿が4つ示された。この答申の中には、「個別最適な学び、協働的な学びの充実を通じて、「主体的・対話的で深い学び」を実現することは、児童生徒の学びのみならず、教師の学びにも求められる命題である。」という記述があるように、教師自身こそ自ら主体的に目標を設定し、学びを振り返りながら日頃の授業改善に励む姿、つまり学び続ける姿勢が必要であると考え。

しかしながら、教師に求められる期待は大きくなり仕事の負担も膨らみ、学ぶ機会が減少したり、研修などの機会があっても学びに意欲的に取り組めなかったりする状態がある。また、経験豊かな教師の大量退職の時代を迎え、教師の年齢構成や経験年数構成も大きく変化している。このような現状の中で、中堅教師として若手教師の日頃の授業改善のために支援できることはないだろうかと考え、本研究を構想するに至った。本研究においては、特に学習指導面における支援について考える。

そこで着目したのが、各学校で行われている授業研究である。日本の伝統的な授業研究は、「レッスンスタディ（Lesson Study）」と呼ばれ、教師教育の優れた手法として国際的に高く評価されている。

鹿毛（2017）が「授業研究とは授業という営みを支える営みであると同時に、教師の日常に埋め込まれた教師の専門的な学びを促す「しかけ」であり、それが機能することで一人ひとりの教師の授業づくりがサポートされる」と述べているように、本来授業研究とは、同僚教師との学び合いの場でもあり、教師個人が授業を研究し、改善する力を高めていく場でもあるといえる。

しかしながら、その授業研究の過程において、若

手教師は自分自身の力を高める学び方ができているだろうか。実際は、「学習指導案検討会は、どんな視点で参加するのか」「授業省察ではどこに着目するか」「協議会后に、授業をどのように変えるのか」等の困り感に溢れているのではないかと考える。

若手教師への支援方法として、研修を設定し、知識を身に付けることが挙げられるが、その知識を実践的知識にするためには、授業の中で実践し、探究していくことが欠かせない。そこで本研究においては、授業研究を通して若手教師が自身の授業を研究し、改善する力を高めることを目的とし、中堅教師の効果的な支援の在り方を考えることとする。本研究は、令和6年度における実践である。

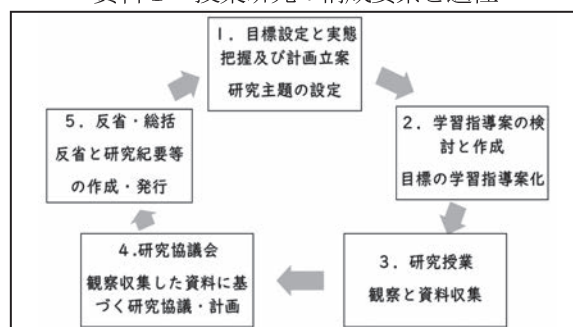
2 研究内容・方法

（1）本研究における授業研究とは

授業研究という言葉は多義的に用いられている。本研究においては、一つの学校内における校内研修としての授業研究という意味で捉える。また、授業研究のサイクルも各学校によって違いがあることだろう。本研究においては、藤井（2017）の考えを参考にしている。（資料1）

授業研究というと、いわゆる「研究授業」や「協議会」のイメージが強いと考える。本研究においては、主題の設定、日頃の授業実践、学習指導案の検討なども授業研究と捉える。

資料1 授業研究の構成要素と過程



（2）研究教科「算数科」

本校は松戸市教育委員会の指定を受けた算数科の研究校である。指定を受けた年数は、令和

6年度で40年目となり、市内の各学校の教師に向けて算数科の学習指導を提案する役目がある。例年11月には公開研究会が行われ、算数科の授業について語り合う機会がある。本校では公開授業研究会も含め、年5回程度の授業研究会が実施されており、学ぶ機会が多い。さらに、算数科の学びは各学年において毎日のように学習指導の機会があるため、算数科を中心に研究を進めることとした。

(3) 研究対象教師

本研究においては2名の若手教師を研究の対象とする。経験年数4年目の男性教師（A教師）と経験年数4年目（講師経験1年含む）の女性教師（B教師）である。この2名と筆者は令和3年度より同僚である。令和6年度においては、A教師とは授業研究における検討チームが同じであり、学習指導案検討や研究授業の協議会などで関わる機会が多い。

B教師とは、授業研究におけるチームは異なるものの、同学年（第5学年）を担当しており、常日頃から関わる機会が多い。（本校は、授業研究会に向けた学習指導案検討をブロックではなく、ブロックや学年を解体したチームで実施）

この2名を対象とした理由は、筆者と関わる機会が頻繁に設定されているからである。令和6年度はA教師もB教師も授業研究の過程における研究授業の授業者には選ばれていない。

筆者は教師生活14年目となり、令和6年度は第5学年の学年主任、研究副主任を務めた。本校においては、令和2年度から令和4年度までの3年間研究主任を務めた。

4 研究の具体的内容

(1) 授業研究の過程と身に付けたい力の明示化

教師の資質能力の向上を目指し、授業研究の機会を設定することは重要である。しかしながら、授業研究のプロセスにおいてどんな考え方や態度で授業研究に臨むべきかを若手教師に明示することは少ないと考える。授業研究を個人の授業を研究する力も高めていく場にするために、鹿毛（2017）や藤井（2017）の考えを参考にし、「授業研究における若手教師が目指す姿シート」をA4サイズ1枚で作成した。シートには、授業研究の過程とその過程において身に付けた

い力を設定した。身に付けたい力は、鹿毛（2008）を参考にし、授業構想力、授業展開力、授業省察力の3つとして、以下のように定義した。

授業構想力…児童の実態を踏まえ、教師の「ねがい」を背景に、授業の目標を明確化し、教育内容を理解し、具体的な教育方法を決定する力
 授業展開力…授業構想を踏まえ、児童を見取り、臨機応変に即興的に対応する力
 授業省察力…授業を具体的な事実をもとに振り返り、再構成する力

さらに、これら3つの力を育成するための具体的な行動規準をシートに明示した。例えば、「研究協議会では代案を述べる」、「授業観察では児童の言動を根拠に手立ての有効性を考える」等である。（資料2、資料3、資料4）

研究授業を含めた授業研究のプロセスを年間で数回しか経験できない現在の状況では、一つの授業研究のサイクルが貴重である。だからこそ、行動規準を明示することで若手教師が見通しをもって授業研究に臨むことができると考える。

資料2 シートの一部（研究協議会 授業省察力）

研究協議会 授業省察力	
知る	参加者の多様な意見を受け入れる。
分かる	多様な見方の中から、児童の姿に基づいて、自分なりに意見を取捨選択できる。
使える	協議会での内容を踏まえ、自分なりの代案を示すことができる。
☆ポイント 児童の表情、ノート、発言、つぶやきに基づいた意見を探る。	

資料3 シートの一部（研究授業の観察 授業省察力）

研究授業の観察 授業省察力	
知る	授業者のしかけによる児童の姿を見取る。
分かる	授業者のしかけと児童の姿を関連させ、児童の事実をもとに手立ての有効性を分析できる。
使える	しかけの有効性を解釈し、自分なりの代案を考えることができる。
☆ポイント 児童の表情、ノート、発言、つぶやきに基づいて考える。	

資料4 シートの一部（研究主題の設定 授業構想力）

研究主題の設定 授業構想力	
知る	児童の実態、研究の背景、研究主題や仮説等で用いられる言葉の意味を知る。
分かる	研究主題の必要性や意義を理解できる。
使える	研究主題を踏まえ、現在の自分自身の実践に落とし込むことができる。
☆ポイント 何を教えるか（教科の本質）、どのように教えるか（方法）、何のために教えるか（目標）、児童の実態を把握できているか考える。	

また、シートには、各過程において目指す行動規準を3つのレベルで例示した。3段階にすることでより詳細に自分の現在地を把握することができる。また、自らの成長も実感することだろう。高いレベルのゴールを示すことはさらなる成長への期待につながるとも考えられる。

(2) シートを用いた目標設定

伴走者として若手教師を支援するためには、若手教師の目標を共通理解する必要があると考え、今までの経験を振り返りながら、令和6年度の目標を筆者との対話の中で設定した。令和6年度の目標は以下の通りである。

A 教師・・・授業の見方を鍛えたい

B 教師・・・自分らしい授業づくりをしたい

シートを用いて目標設定することで、2名の教師の課題が明確に見えてきた。A 教師については授業省察力、B 教師については授業構想力である。A 教師の目標は、授業研究の「研究授業」の過程で支援することとした。B 教師については、より具体的な自分なりのしかけ（武器）を身に付けたいという願いから、同学年の担当であることも考慮し、研究主題の達成を目指して行われる筆者の日々の授業実践を通して支援することとした。漠然と授業研究に取り組むのではなく、年度初めに個人の問題意識や研究テーマを設定する意義は大きいと考える。

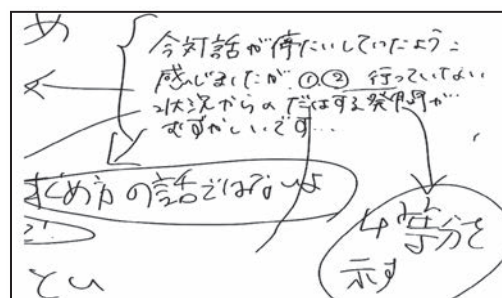
(3) リアルタイムでの授業省察

A 教師を対象にした実践である。A 教師は、「授業の見方」をテーマとしており、A 教師から「授業中に筆者はどこを見て何を考えるのかを知りたい」という願いがあった。そこで、リアルタイムで授業記録を共有することとした。日頃暗黙のままにされている、授業の見取りをオープンにするために、「Microsoft Teams」でチームを設定し、リアルタイムで授業記録を共有することとした。事前に抽出児童を互いに決め、着目ポイントも焦点化した。つぶやき、表情、ノートの記述などを基にした。研究授業を観察しながら、対象児童の様相と教師の働きかけの関連を見取るようにした。資料5は実際の授業記録の一部である。

若手教師が「今話題が停滞していたように感じる」という気付きを得た。実際、授業者は第

5 学年、小数のわり算 ($300 \div 2.5$) の学習において、「小数のわり算ができそう？」と、立式の根拠を問いかけていたが、児童は計算方法を考えていたため対話にズレが生じ、話題が停滞していた。そこで、筆者が「4 等分を示す」(2.5 等分の前に整数を扱うことで 2.5 等分の話につなげる)、「求め方の話ではないよ」(発問の工夫)等の観点から代案を記録した。このように同じ事実を見ているからこそ、その場での臨機応変な対応を共に考察できる。これはリアルタイムならではのよさであると考え。授業は教師の臨機応変な対応の連続である。そのためには、授業中の空気を感じながら、授業を省察していくことが欠かせない。中堅教師がスポーツ中継の解説者のような働きをすることで、若手教師の授業の見方が広がるのではないだろうか。

資料5 授業記録の一部



(4) 動画で学ぶ臨機応変な対応

授業省察力の向上を目指すA教師と授業構想力の向上を目指すB教師を対象にした実践である。時間に余裕のある夏季休業中に短時間(20分程度)の研修を行った。授業の動画を見ながら、気になる場面で動画を停止し、議論を行った。動画については、千葉県教育委員会が制作した「達人の授業解説動画」を参考にした。動画を停止し、「この後自分ならどのように発問する？」と、意思決定させて、学び合った。

A教師には、なぜその発問をするのか、児童のつぶやきや反応を根拠に、考えさせるようにした。B教師には、問題の提示の仕方によって、児童の自力解決の様子が変容することが期待できることをアドバイスした。(3)の実践と同様に、解説者のような働きを心掛けた。

(5) 日頃の授業観察

B 教師を対象にした実践である。隣のクラスの担任であるB教師には、年度当初に常に授業

を観察できることを伝えた。しかしながら、B 教師の空き時間がなくなってしまうことは、結果的に B 教師を苦しめてしまう。そこで、3つのルールを決めた。

- ・いつでも観察してもよい
- ・授業の導入部分や終末部分だけでもよい
- ・宿題の採点など他の業務をしてもよい

また、教室の扉を開け、廊下に机を置くことで、いつでも観察できる環境を整えた。算数科においては B 教師より数時間先行して進め、B 教師の教材研究や学習指導に還元できるようにした。また、単元のポイントとなる重要な点は、「ここは大人でも難しいよ」という発問を合言葉とし、観察する B 教師に伝わるようにした。

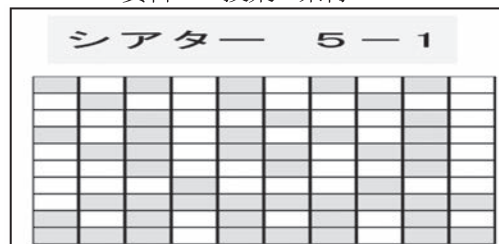
(6) 他者参照を取り入れた授業実践

自分らしい武器を探すことに悩む B 教師は、学年会での会話や働きぶりから、ICT 機器の操作が得意であることが分かった。そこで、B 教師の学びが孤立しないように、筆者自身が ICT と算数を掛け合わせて授業作りにチャレンジすることにした。

令和 6 年 8 月、SKYMENUCloud 新機能として、ライブ公開提出箱が活用できるようになったという情報を得た。この機能はいわゆる他者参照を取り入れたものである。すでに完成された考えや成果物を参照するのではなく、作業途中のものを随時反映できるようになり、児童同士がお互いの思考過程をリアルタイムで参照できるようになった。早速、令和 6 年 9 月に「単位量当たりの大きさ」の単元において、この機能を用いた実践を筆者が行うこととした。架空の劇場を設定し、「ゆったり映画をみる」という目的のもと、座席を児童が選択するという題材である。(資料 5) 座席を選択させ、互いの選択した座席を他者参照することで、単位量あたりの大きさの概念の理解をねらった。本実践は B 教師と学び合いながら授業展開の流れや目標や評価などを考えた。ICT の操作については B 教師、算数科の指導については筆者が主に担当し、互いのよさを生かしながら一つの実践を創り上げた。以上のように、中堅教師が伴走者として先導するだけでなく、若手教師の問題意識や個人の研究テーマに共感しながら、並走することも

重要であると考えた。

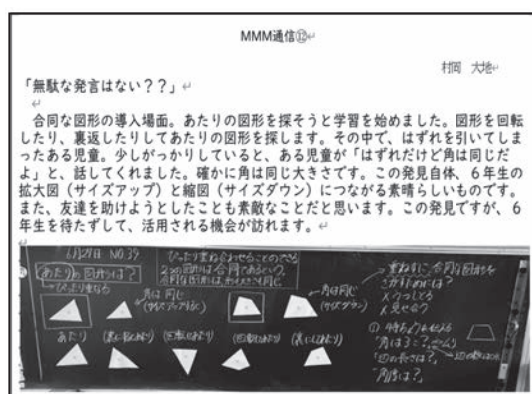
資料 5 授業の素材



(7) その他の取り組み

授業構想力や授業省察力を高めるには、目標（何のために）や内容（何を）についての教材研究も重要であると考えたため、研究便りを発行した。研究便りについては、算数科の学びにおけるポイントや実際の授業における児童の反応などを記述し、紙面で共有した。留意したのは、筆者の失敗を多く掲載したことである。伴走者として、失敗や間違いをオープンにすることで、相談しやすい空気を作ることを心掛けた。また、紙面の内容は筆者の発問や児童の反応を具体的に再現し、黒板の板書も掲載し、イメージしやすい紙面にした。(資料 6)

資料 6 研究便りの一部



これらの (1) ～ (7) の取り組みは、主に前期 (4 月～9 月) に行った。本研究の目的が、最終的には若手教師自身が授業を研究する力を高めることを目指しているからである。また、業務改善の視点からも、やみくもに時間を確保することは意欲の低下につながりかねない。後期は筆者から研修の時間を設定しなかった。

5 分析

研究対象教師のインタビューを基に本研究の成果を検証する。効果的だと感じた実践と理由を調査した。

(1) A 教師

以下 A 教師の回答である。

リアルタイムでの質疑応答が1番効果的であった。先生が授業のどこを見ているのかが分かった。数学的な見方・考え方に限らず、聞き返し方、子供の動かし方や発問など。自分が思っていたことが先生と同じであったときは、自分自身の見方の答え合わせができて、自信がもてた。また、考えにズレがあれば学ぶ機会となった。実際の子供の姿と一緒に共有し、学ぶことができたのが1番よかった。初任の時や2年目のときは、授業のどこを見ていいか分からず、授業省察に困惑していたが、授業のどこに着目したらよいのかが分かった。教材研究を見る視点も変わった。細かい所にも目がいくようになった。授業中の発言の取り上げ方なども、授業中に意識できるようになった。見方が高まることで、一つの授業から得られる情報量が増えたように感じる。

(2) B 教師

以下B教師の回答である。

日頃の授業観察が印象的であった。指導技術を見て学ぶことはもちろん、教材研究を先取りできたので自分の授業に見通しがもてた。教師用指導書では表現されない実際の子供の反応が見られたのもよかった。授業観察のルールも心に余裕がもてたので、安心して観察できた。

また、他者参照を取り入れた授業も参考になった。その実践からヒントをいただいて、自分自身で調べ、落としこんで、チャレンジのきっかけを作ることができた。次への取り組みやすさの壁が下がった。実際の授業での子供の反応もよかった。子供の「もっとやりたい」という気持ちに、タブレットが影響を及ぼすことが分かった。1人で研究しているわけではないので、安心できた。自分自身の選択肢が広がった。

(3) インタビューの考察

A 教師のインタビューから、授業の見方を高め、その見方が授業展開力への自信にもつながっていることが分かる。これは、児童の実際の姿を見て、授業者の手立ての成果を考えたことが要因であろう。リアルタイムによる授業省察の成果ともいえる。通常の研究授業では、それぞれの見取りをその場で共有することはせず、各教師の見取りは暗黙化されている。そのため、

協議会では印象で授業を語ってしまうこともある。だからこそ、同じ事実を基に、中堅教師が若手教師に事実の解釈や考察を解説し、知識を実践的知識へと変容させる授業省察は重要である。B 教師のインタビューから、本研究の実践はB 教師が課題としていた、自分の武器を身に付けることに影響を及ぼしていることが分かる。B 教師が「1人で研究しているわけではない」と語っているように、授業をオープンにし、共通の課題解決に向けて並走し、若手教師を孤立させなかったことが大きな要因であろう。B 教師は、タブレットを用いた実践を複数回繰り返し、その成果を小学校3年目研修の研究報告にまとめた。また、令和7年度においても、実践の幅を広げようと模索している。

6 成果と課題

(1) 成果

若手教師の悩みや思いを把握するためのきっかけとして、「授業研究における若手教師が目指すシート」を使用し、明らかになった悩みや思いを解決するために、視点を共有した授業省察をしたり、共に授業を創り上げる経験をしたりすれば、授業研究のプロセスにおいて、若手教師の授業構想力や授業省察力を高める可能性を示すことができた。

(2) 課題

本研究においては、授業研究を通して若手教師が自身の授業を研究する力を育てることをねらった。しかしながら、どんな力がどの程度身に付いたのか、詳細な分析はできていない。「授業研究における若手教師が目指すシート」を自己の成長の実感につなげることができないか追究したい。

【参考文献】

- ・中央教育審議会 (2022) . 『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について～「新たな教師の学びの姿」の実現と、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成～ (答申)
- ・鹿毛雅治 藤本和久 (2017) . 「授業研究」を創る－教師が学びあう学校を実現するために－. 教育出版.
- ・日本数学教育学会 (2021) . 算数・数学 授業研究ハンドブック. 東洋館.
- ・秋田喜代美 キャサリン・ルイス (2008) . 授業の研究 教師の学習 レッスンスタディへのいざない. 明石書店.

個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を実現する授業の一考察

～自由進度学習と一斉授業形態による問題解決学習を組み合わせた授業デザイン～

袖ヶ浦市立長浦小学校
教諭 高橋 朋彦

I. 主題設定の理由

中央教育審議会が2021年1月に公表した答申「令和の日本型学校教育の構築を目指して」では、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現が求められた。その実践の一つとして自由進度学習が着目され、自立した学び手の育成が目指されている。多様な学びの形が求められる現代において、児童一人ひとりの主体性や思考力を育むことがより一層重要となってきた。

本学級では、従来の一斉授業形態による問題解決学習に取り組み、学力の定着と考えを広げ、深める授業の展開を心がけている。実際に、児童の学力はある程度定着し、思考を広げ、深める成果は一定程度見られるものの、児童は教師から与えられた課題に沿って学習しているので、自分の理解度や興味関心に応じて学び進めるような自立した学び手の育成には至っていない。

一方、自由進度学習は自立した学び手の育成には適しているが、学習が子どもの能力に依存しやすかったり、他者と学びを共有する機会も減ったりし、思考を広げ、深めるという点では十分とは言えない。また、自由に学びを進めることを重視しすぎると、身につけるべき力が十分に定着しないおそれがある。

そこで本研究では、学びに向かう姿勢が育ち始める小学2年生の段階で、主体的に学ぶ力を養うことに大きな意義があると考えた。そのため、2年生「たし算とひき算の筆算」の単元において、自由進度学習と一斉授業形態の問題解決学習を組み合わせた授業をデザインすることで、児童の思考を広げ・深めて学力を定着させつつ、自立した学び手を育て、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を実現する授業を目指した。

II 研究の目的

2年生算数科「たし算とひき算の筆算」の学習において、自由進度学習と一斉授業形態による問題解決学習を組み合わせることで、自立した学び手を育成しつつ、児童の思考を広げ深める授業の実現を図り、その有効性を検証することを目的とする。

III. 研究の内容

1 自由進度学習と一斉授業形態の問題解決学習を組み合わせるイメージ

本研究では、1単位時間の授業構成を工夫し、自由進度学習と一斉授業形態の問題解決学習を組み合わせ、相乗効果をもたらすような授業展開を図った。

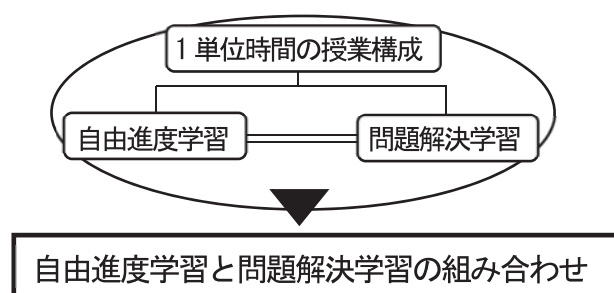


図1 本研究のイメージ

2 1単位時間の授業構成

従来の一斉授業形態による問題解決学習で学習のポイントを共通理解し、考えを広げ・深める授業を展開した上で、適用問題と練習問題の時間を自由進度学習に充て、次のように1単位時間の授業を構成した。

表1 1単位時間の授業構成

	学習内容	
一斉授業 (25)	(1)復習をする (2)素材について知る (3)学習問題を話し合う (4)見通しを持つ (5)自力解決をする (6)比較検討をする (7)まとめをする	考えを 広げ・ 深める 時間
自由 進度 学習 (20)	(1)めあてをつくる (2)学習を進める (3)課題に取り組む <学習形態> ・個人 ・ペア ・小グループ ・個別支援 (4)振り返りをする	主体的に 学びを 進める 時間

1 単位時間の授業は、前半を一斉授業形態の問題解決学習、後半を自由進度学習の時間とする構成とした。

前半では、児童は共通の課題に取り組み、比較検討を通して考えを広げ・深めた。そうしたことで、理解の早い児童は、自分の計画に基づいて主体的に学習を進めることができた。一方で、理解に時間がかかる児童も、一斉授業形態の問題解決学習を通して学習内容を理解し、後半にはじっくりと本時の課題と向き合うことができた。

3 自由進度学習

(1) 児童のめあての設定

本単元で学習する内容にレベルを設定して単元表を作成した。児童は、授業後半に設定された自由進度学習に取り組む際、まずこの単元表をもとにその日の学習のめあてを立て、ワークシートに記入してから、自分に合ったペースで学習を進めていった。

レベル	ないう	ごうかく	先生の ノートチェック
1	学習カード 「たし算のひっさんのノートのかき方」		
2①②	学習カード 「くりあがりある(2けた) + (2けた) のひっさん」		
3	学習カード 「(2けた) + (2けた) のひっさんの一ののくりに0があるたし算のひっさん」		
4	学習カード 「(2けた) + (2けた) の答えの一ののくりに0になるたし算のひっさん」		
5	学習カード 「(2けた) + (1けた) のひっさん」		
6	学習カード 「(1けた) + (2けた) のひっさん」		
7	学習カード 「たし算のひっさんの答えのたしかめ」		
8	きょうかしょ P54 1～5		
9	タブレット学習 ミニ先生 チェックポイント(いったんストップ)		

図2 自由進度学習の単元表

めあて	レベル1/5まですすめる
めあての ふりかえり	レベル1/5までできなかったら
学びの ふりかえり	1をわすれないうちにがんばる

図3 めあてを書き込んだ様子

めあての立て方は、主に次の三つの型に分かれた。

- ・未修の内容にも挑戦し、次々と学習を進める児童
- ・本時の学習に合わせて、学習内容を定着させる児童
- ・前の学習に戻り、じっくりと取り組む児童

授業前半に実施した一斉授業形態による問題解決学習を通して、自分の本単元の学習の理解度を把握できたことで、児童は自分に合っためあてを立てやすくなっていた。

(2) 学習の進め方

ア 問題の取り組み方

児童の自己調整力を高めるために、次の五つの学習ステップをもとに自由進度学習に取り組んだ。

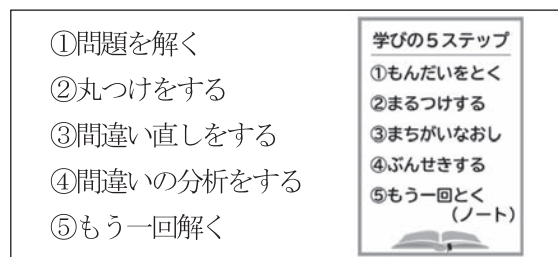


図4 自己調整する力を高める学びの5ステップ

この5つのステップを取り入れることで、子どもは自己調整力を身につけ、「自立した学び手」へと成長することが期待される。自分で丸をつけ、間違いを振り返り、正解するまで再挑戦するという流れを通して、自分の理解度を確認しながら学習を進める力が育つ。また、自分の課題に気づき、それを改善していく過程を通して、学習への前向きな姿勢や粘り強さも養われる。

イ 児童が取り組む問題

児童が自分のペースで学習を進めるためには、取り組むべき問題が明確に提示されている必要がある。しかし、小学2年生という発達段階においては、教科書の範囲を自ら選択して学習に取り組むことは困難であると考えた。そこで、児童が取り組む問題を明確にするため、教科書に記載されている問題をもとに、自由進度学習用のプリントを作成した。

レベル1	レベル2①
①34+12 ②34+13 ③65+31 ④73+25	①34+29 ②49+23 ③17+36 ④64+18

図5 児童の取り組んだプリント

このプリントには、先述した五つの学習ステップにもとづいて取り組ませた。問題を解き終えた児童から順に、丸つけコーナーで解答の自己採点を行い、全問正解していれば次のレベルの問題に進むことができる。間違いがあった場合は、誤答を訂正し、再度ノートに取り組んだ上で、正答を得てから次のレベルに進むという流れとした。



図6 プリントを自己採点する様子

(3) 自由進度学習に取り組む様子

自由進度学習は、児童がどのようなペースで学習を進めているかを授業者が把握しにくい。そこで、本研究では、図 6 のように、児童に自ら取り組んでいる問題の位置にネームプレートをはらせる方法を導入した。これにより、授業者は児童の学習状況を一目で把握できるようになり、支援の必要な児童を速やかに把握することが可能となった。また、児童にとっても、自身の学習の進度が視覚化され、学習の見通しが立ちやすくなり、より意欲的に学習に取り組む姿が見られた。

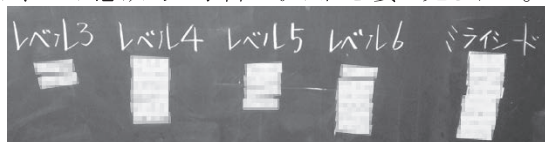


図6 ネームプレートを使って進度を把握する様子

自由進度学習に取り組むと、教室ではさまざまな形態で学習に取り組む様子が見られる。本単元では、児童は次のように学習に取り組んでいた。

ア 個人で問題に取り組む

小学 2 年生という発達段階を踏まえ、問題への取り組みの開始時には、基本的に個別に問題に取り組ませる形態とした。その中で、学習の理解が早い児童は、未修の内容にも意欲的に挑戦し、主体的に学習を進める姿が見られた。一方、多くの児童は、本時の学習に沿ったペースで取り組みながら、着実に学力の定着を図っていた。また、理解に時間を要する児童は、必要に応じて前の学習内容に戻りつつ、一つひとつ確実に理解を積み重ねることができた。

イ T1 による小グループ学習

未修の問題に取り組む中で、自力で解決できず手が止まっている児童が数人見られた。そこで、T1 が「わからない人は集まりましょう」と呼びかけ、応じた児童を集め小グループ学習を実施した。

この場では、「位をそろえる」「くり上がりの際に 1 を書く」「くり下がる場合は十の位を 1 下げ、一の位の横に 1 を書き加える」といった問題解決の手順について話し合いを行った。話し合いを通して理解を促した後、くり上がり・くり下がりを含む筆算の計算方法を実演した。実演によって、児童は筆算の手順を具体的に理解し、その後、正確に計算に取り組めるようになった。



図7 T1 との小グループ学習の様子

エ T2 による個別指導

学習の理解が遅れている児童には、T2 への相談を促し、個別に支援を行った。筆算におけるつまずきの要因は、1 年生で学習した「くり上がり・くり下がり」の計算に課題があることであった。児童は T2 の支援を受けながら、自ら理解を深めようと取り組み、段階的に「くり上がり・くり下がり」の基礎的理解を身につけていった。その後も、位をそろえて書く方法や、筆算における処理について T2 と確認しながら学習を進め、筆算全体の理解と定着につなげることができた。



図8 T2 に個別支援を受ける児童

オ タブレット学習

すべてのレベルをクリアし、課題を早く終えた児童には、タブレット学習に取り組ませた。タブレット学習では、自分のペースで学習を進めることができ、単元全体を通してさまざまな問題を振り返ることができた。また、教科書には載っていない問題も含まれており、多様な問題に取り組む機会となった。

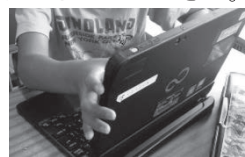


図9 タブレット学習の様子

カ 友達とのペアでの学び合い

学習につまずいている児童は、すべての課題を早く終えた児童にわからない箇所を教えてもらい、安心して学び合うことができた。一方、早く課題を終えた児童は、教えることを通して自身の理解を深め、学びを振り返るよい機会となった。

例えば、筆算で繰り上がった「1」の書き忘れにより誤答した児童が、早く終えた児童から「くり上がりを忘れているよ」と声をかけられたことで、正しい解答を導くことができた。教えた側も、「私もくり上がりの 1 を書き忘れないようにしよう」と意識し、計算ミスに注意を払う姿が見られ、自身の理解をさらに深めることにつながった。



図10 友達との学び合いの様子

(4) 振り返り

授業の最後の 5 分間に、「めあてに対する振り返り」と「学習に対する振り返り」を行った。記述しやすいよう、ワークシートを活用し、次のように書き込ませた。

めあて	レベル15まですすめる
めあての ふりかえり	レベルは、14①を15までいけません でした
学びの ふりかえり	くり下がりの1をそろえないように かきました。

図11 児童の振り返り

めあてに対する振り返りでは、自分の学習への取り組み方を振り返り、次時の学習にどのように生かすかを考えた。学習に対する振り返りでは、自由進度学習の中で気づいたことや大切にすることを整理した。この振り返りは、一斉授業形態による問題解決学習における比較検討の場面で、児童が考えを広げ、深める話し合いへとつなげることができた。

4 一斉授業形態による問題解決学習

一斉授業形態による問題解決学習では、児童が自由進度学習を主体的に進められるようにするため、学習のポイントを押さえさせ、思考を広げ・深める機会をつくるとともに、学力の定着を図ることをねらいとした。

(1)学習のポイントを確実におさえる

たし算・ひき算それぞれの単元の前半に、共通の学習課題をもとに次の三点について全体で話し合い、合意形成を図りながら学習のポイントを確認した。

- ①位をそろえること
- ②くり上がる場合は1を上を書くこと
- ③くり下がる場合は十の位を1下げて一の位の横に1を書き加えること

学習の得意な児童は、あらかじめ学習のポイントをおさえることで、未修の問題にも自ら工夫して取り組み、主体的に次の学習へと進める姿が見られた。

一方、学習につまずいている児童は、自由進度学習におけるT1の小グループ指導やT2による個別支援を通して再度ポイントを確認し、正確に計算できるようになった。理解が深まったことで自信をもって学習に臨む姿も見られた。

(2)考えを広げ、深める比較検討の時間を取り入れる

従来の一斉授業形態による問題解決学習を通して、考えを広げ、深める比較検討を取り入れた。この比較検討の活動では、自由進度学習で次々と学習を進める児

童が中心となり、話し合いをリードした。以下に、実践した授業の中から、二つの比較検討の様子を紹介する。

①26-21

これまでの学習では、筆算の答えが二けたであり、十の位にも数字を書いていた。しかし、この問題では答えが一けたとなり、十の位が0となる。このため、十の位に「0」と書いてしまう児童が見られた。

そこで、正答である「5」を児童が黒板に書き、その隣に教師が誤答の「05」を記入し、比較検討を行った。この場では、自由進度学習で次々と学習を進める児童が中心となって話し合いをリードし、「05という数字はないから、十の位に0は書かないよ」といった声があった。このやりとりを通して、「十の位が0の場合には何も書かない」という点を全員で共通理解することができた。

さらに、誤答をした児童も「0は書かなくてもよい」と納得し、その後の自由進度学習では正しく筆算を行えるようになった。児童同士のやりとりを通して理解を深める様子が見られ、学び合いの効果も確認できた。

②35-27

本問題では、誤答として「12」と解答する児童が多く見られた。これは、一の位における「5-7」の場面で、引かれる数と引く数を取り違え、「7-5=2」と逆に計算してしまったことが原因と考えられる。

そこで、児童が黒板に書いた正答「8」を提示し、その隣に教師が誤答例として「12」を板書し、比較検討の場を設けた。この場では、『12』と答えた人は、どのように計算したのかな?と問いかけると、自由進度学習で次々と学習を進める児童が「7から5を引いて2、3から2を引いて1」と説明した。これにより、繰り下りの理解が不十分であることが明らかとなった。

さらに、「5-7ができないから、十の位から1を借りる」という声が上がリ、繰り下がりの意味が共有された。児童の言葉で計算方法を再度確認することで理解が定着し、正しい手順で計算できる児童が増加した。

(3)学力の定着を図る

単元末には共通の問題を扱い、児童の学習の定着を確認した。ほとんどの児童は、自由進度学習で積み重ねてきた経験をもとに、筆算の手順や繰り上がり・繰り下りの処理を正確に行うことができていた。特に、位をそろえて計算することや、繰り上がり・繰り下がり時の数字の記入位置など、学習のポイントを意識して取り

組む姿が多く見られた。

また、誤答した児童も自ら誤りに気づき、間違いの原因を考えた上で、正しい手順で再計算を行う様子が見られた。さらに、児童同士で活発に教え合う場面も見られ、学習が得意な児童が苦手な児童に寄り添って説明することで、双方の理解を深める機会となった。

加えて、学習に苦手意識のある児童は、T1 や T2 による個別支援を受けながら、たし算・ひき算の筆算に自信をもって取り組めるようになった。

このように、自由進度学習と一斉授業形態の問題解決学習を組み合わせた実践により、単元の終末においては、児童が多様な学習活動から主体的に学びを選択し、学力を定着させることができた。

IV 考察

児童のワークテストの達成度の変容を表 2 に、情意面の変容を図 12 に整理した。

表 2 ワークテストの達成度の変容

	これまでの 平均達成度	たし算・ひき算の 筆算の達成度
知識・技能	84.8%	94.5% (+9.7%)
思考力・判断力・表現力	78.0%	87.6% (+9.6%)

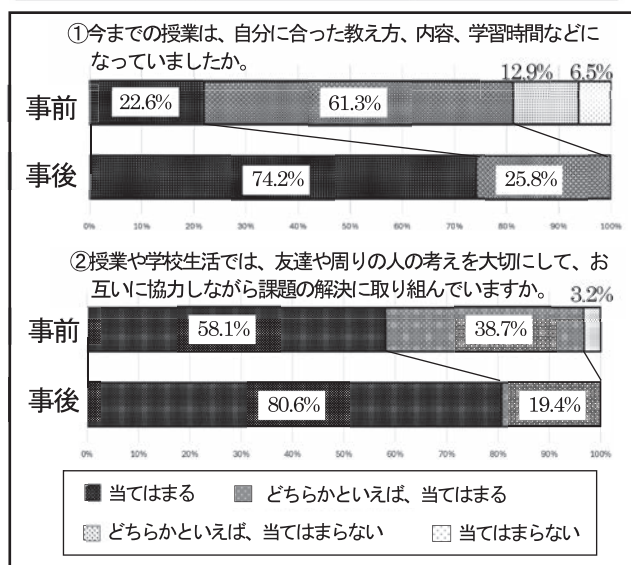


図 12 児童の情意面の変容

ワークテストの達成度は、知識・技能で 84.8% から 94.5% へ、思考力・判断力・表現力で 78.0% から 87.6% へと向上した。この要因として、授業前半の比較検討を通して、児童が考えを広げ・深めるとともに、学習のポイントを全員で確認し、共通理解を得ることができた点が挙げられる。そのうえで、各自が自分に合ったレベルの課題に主体的に取り組んだことが、基礎的な定着

と思考力・判断力・表現力の向上を促したと考えられる。また、自由進度学習においては、児童が取り組む問題数が従来の一斉授業形態に比べて多くなる傾向があり、繰り返しの練習を通して学習内容の定着が一層促進された。練習問題には、学習ステップに沿って取りまわせることで、児童は「正解するまでやり直す」という一連の流れの中で繰り返し練習を行い、計算手順の理解を深めるとともに、学習内容を確実に定着させることができた。こうした、自ら学習内容を選択・調整しながら進める学習のプロセスは、計算力の向上とともに、自己調整力の育成にも効果をもたらしたと考えられる。

情意面では、「授業が自分に合っている」と回答した児童が 22.6% から 74.2% へ、「協働的に課題に取り組んでいる」と回答した児童が 58.1% から 80.6% へと向上した。この結果は、自由進度学習により、児童が自分の理解度やペースに応じて課題に主体的に取り組めるようになったことが、一因であると考えられる。また、学習の中で児童は、一斉指導による比較検討で学んだり、個人・ペア・グループといった学びの選択肢の中から、自分に合った方法を選んで活動に参加したりしていた。こうした多様な学びの中では、考えを聞いたり、伝えたりする場面が多く見られ、児童は考えを広げ・深めることができた。その結果、個に応じた「個別最適な学び」と、他者とともに学び合う「協働的な学び」の双方が育まれたといえる。

本研究は、2 年生「たし算とひき算の筆算」の学習を対象に実践を行い、「数と計算」の領域において一定の成果を上げることができた。一方で、他の領域や内容において自由進度学習が有効に機能するかどうかは、学習内容や単元の見極めを含め、今後の課題である。また、本研究で得られた成果を他教科や他学年へ応用していくためには、タブレットのさらなる活用を含めた授業デザインや指導方法の工夫が求められる。児童の理解の差に対応するための支援体制や学習環境の整備も重要な課題である。

<参考文献>

- 国立教育政策研究所(2024)『全国学力・学習状況調査の結果』
- 中央教育審議会(2021)『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して』文部科学省
- 難波 駿(2023)『超具体！自由進度学習はじめての1歩』東洋館出版社

子どもたちが行きたくなるような学級・学校についての一考察

～児童一人一人の良さを生かし合う学級経営を通して～

野田市立清水台小学校
教諭 鎌田 啓嗣1 はじめに
(実践動機)

現在、日本国内では不登校児童が毎年増加傾向にあり、小・中・高等学校の不登校の児童生徒が急増し、約30万人となった。背景には、子どもたち一人一人の人格の完成や社会的自立を促すための、学校や学びの在り方が問われていると言われている。本校においても、長欠児童、不登校児童が一定数以上おり、同じく増加傾向があるため、課題の一つとなっている。私は本年度、勤務校にて長欠・不登校対策を務めていることもあり、実感を伴って支援の難しさに直面している状況である。

不登校への支援の手立てとして、大きく未然防止、早期発見、早期対応の3つが挙げられている。3つの中でも、未然防止の点に力点を置き、「児童にとって楽しい」学級・学校を目指すべきであると考えている。未然防止の観点として、「行きたくなる学級・学校」づくりを目指すことで、不登校支援の一助になるのではないかと考え、本実践への取り組みを考えた。

(課題設定の理由)

子どもたちが、学級、学校に行きたくなるようにするためにはその空間を楽しいものにすると同時に、自己肯定感を高めることが有効であると考え。そのため、学級、学校が楽しくなるような教育活動の実践とともに、自己肯定感が高まるようなしかけや声かけなどの教師の働きかけが必要になるだろう。

そこで、子どもたちが楽しさを感じるとともに、自己肯定感を高めるための手立てとして、「児童一人一人の良さを生かし合う学級経営」を目指した。これまで、児童一人一人の良さを生かし合う学級経営を目指して、日々の教育活動に取り組んできた。しかしながら、その年によって指導内容や言葉かけは異なるものであった。場当たりの指導ではなく、1年間のゴールイメージを明確にした上で、逆算的に学級経営を行うことが必要であると痛感した。児童一人一人の良さを生かし合

う学級経営を基盤に、子どもたちが行きたくなる学級、学校はどのようなものなのかを考察する。

2 研究仮説

「児童一人一人の良さを生かし合う学級経営」の実現を目指して、1年後のゴールイメージを次のように設定した。

- (1) 児童一人一人が自分の良さを自覚し、自己を表現することができる。
(例:自分の良さは、友達に優しいことであり、困っている友達に声をかけることができる。)
- (2) 友達の良さに気づき、認め合う。
(例:〇〇さんは、いつも挨拶を元気にしている。いつでも、どこでも、誰にでも変わらないところが素敵。)
- (3) それぞれの良さに気づき合うことにより、力を合わせて物事を解決しようとする主体性が育まれる。
(例:係活動や各行事等における工夫など)

上記のゴールイメージの達成を目指した上で、本研究において、以下の研究仮説をもとに各実践を行う。

- (1) 児童一人一人が自分の良さを自覚できるような活動を、計画的に学校生活の中に位置づけることで、児童の自己肯定感が高まるだろう。
- (2) 児童が自分や友達の良さに気づき、認め合うような活動を、計画的に学校生活の中に位置づけることで、集団への所属感が向上し、自己効力感が高まるだろう。
- (3) 自己肯定感や自己効力感を高めることで、学級、学校へ行きたくなる気持ちが高まるだろう。

3 研究方法

(1) 調査対象

令和7年度 野田市立清水台小学校2年生 32名
(男子:13名 女子:19名)

(2) 調査期間

令和7年4月～7月

(3) 調査方法

児童へのアンケート調査及び成果物から、研究の仮説を検証し、これ以降の学級の展望を検討する。

以下、アンケート項目である。

- ① 自分に良いところがあると思いますか。
- ② ①で「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と答えた人は、どんな良いところがありますか。
- ③ 友達の良いところを見つけることができましたか。
- ④ ③で「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と答えた人は、どんなところを見つけられましたか。
- ⑤ 自分の学級が好きですか。
- ⑥ ⑤で「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と答えた人は、どんなところが好きですか。

4 研究実践

(学校での取り組み)

(1) ディズニーランドに負けない学校

長欠、不登校傾向の児童も、校外学習をはじめとした学校行事などのイベントに参加できるという機会も少なくない。昨年度、私が担任した6学年では、東京ディズニーシーの新テーマポートのプレビューに参加する機会があった。その際、長欠、不登校傾向の児童も含め、全員が参加することができた。

そのような経験から、学校の合言葉として「ディズニーランドに負けない学校」をスローガンに掲げて日々の教育活動に取り組んでいる。

(2) 道徳科、特別活動の実践との関連

日々の生活と道徳科の「個性の伸長」「相互理解、寛容」「よりよい学校生活、集団生活の充実」などの価値項目の関連を図った授業改善に取り組んでいる。

異学年との交流活動や児童会活動などへ積極的に参加する機会を設けることで、「学校って楽しい」を実感できるような活動を行っている。

(学級での取り組み)

4月から7月までに計画的に取り組んだ実践から、児童が、自分の良さに気づき、友達の良さを認め、良さに気づき合うことで、力を合わせて学校生活の充実を図ることをねらった。

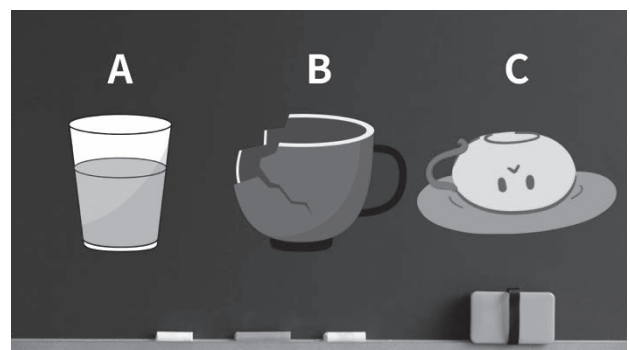
(1) 実践内容①「ミニ授業」

週に一度を目安に、5～10分程度の価値や在り方について考えるミニ授業を行った。扱った内容としては、「A・B・Cのコップ」「履き物を揃える」「信頼貯金」などである。

児童や学級の様子を見て気がついたことや児童に目指して欲しい姿を、授業形式にして、児童に示すことで、

- ① 価値のモデルを示し、児童が目標を持って学校生活を過ごすこと
- ② 良さを共有し、お互いの良さを見つける際の指標にすること

の2点を目指して行った。



【図1 ミニ授業「A・B・Cのコップ」のスライド】

(2) 実践内容②「価値語モデル」

児童の学校生活の様子を写真に撮り、掲示し、その行動の良さを学級で共有した。授業中や休み時間、学年集会など場面は問わず、教師が良いなと思った行動についてクローズアップして取り上げることで、価値を共有することを目指して行った。



【図2 価値語モデル】

(3) 実践内容③「お話タイム」

朝の会のプログラムの中に取り入れて、児童一人一人がテーマに沿って話し合う活動である。

活動の流れとしては、

- ① 登校したら、裏向きに並べられているカードの中から一枚選んで取る。
- ② その日の日直の児童が、メニュー（例：朝ごはんは、お米とパンどちらがいい？）から一つテーマを決める。
- ③ 朝の会の「お話タイム」の時間になったら、自分の選んだカードと同じカードを持っている友達を探す。
- ④ 友達が見つかったら、じゃんけんをして、勝った方からテーマについて質問をする。
- ⑤ テーマの質問の後は、自分で考えた関連する質問を1分間経つまで尋ね合う。

この活動では、毎日ランダムでさまざまな友達と関わり合うことを通して、考えの違いに気づいたり、考えが違っていても良いことを感じたりできるようにすることを目指して行った。



【図3 お話タイムで使ったカードの例】

（「ぷりんときっず」よりダウンロードしたものをカードとして使用）

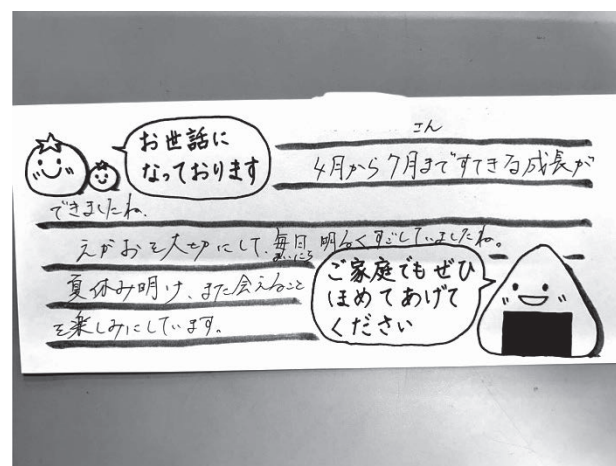


【図4 お話タイムの様子】

(4) 実践内容④「一筆箋」

児童の頑張っている様子や素敵な様子について、教師が気づいたことを一筆箋に記して、児童一人一人に贈り、それぞれの良さを伝えられるようにした。

他者の視点から自分の良さを感じ、自分の良さを認められるようになることを目指して行った。



【図5 一筆箋の例】

(5) 実践内容⑤「ほめ言葉のシャワー」

帰りの会のプログラムの中に取り入れて、その日の主役となる児童にほめ言葉を贈る活動である。主役になった児童は、本人以外の児童からほめ言葉を贈られる。

ほめ言葉を送る際の指導として、

- ・褒めたい行動についての様子を伝える。
(例：話し合いの時、自分から話しかけていましたね)
- ・様子について、自分が良いと思った思いについて伝える。

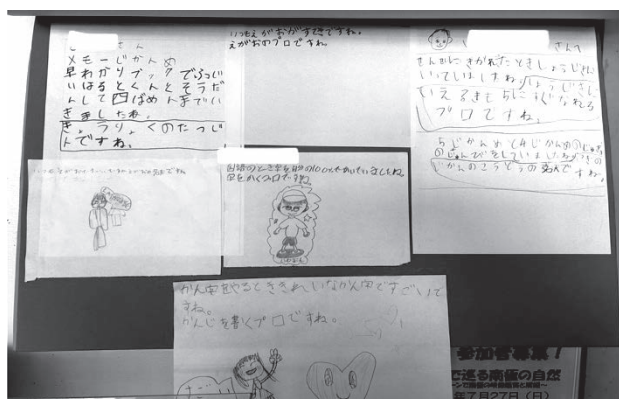
(例：コミュニケーションの達人ですね)

の2点を意識できると良いことを伝えた。

この活動では、

- ① 主役の児童が自分の良さに気づくことができるようにする。
- ② 主役以外の児童は、主役の児童の良さに気づいて、伝えられるようにする。

の2点を目指して行った。



【図6 ほめ言葉のシャワーに向けて、児童が作成したメモの例】

5 結果

以下、7月に実施したアンケートの結果である。

(31人に実施)

① 自分に良いところがあると思いますか。	
そう思う	65% (20人)
どちらかといえばそう思う	23% (7人)
どちらかといえばそう思わない	6% (2人)
そう思わない	6% (2人)

② ①で「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と答えた人は、どんな良いところがありますか。

- ・学習を頑張っている(国語、算数、かけ算、集中している、テスト) 5名
- ・優しい・親切(声をかけてあげた、困っている人を助ける、友達思い) 5名
- ・すぐに行動できる・準備が早い 3名
- ・字がきれい・丁寧 2名

など

③ 友達の良いところを見つけることができましたか。

そう思う	65% (20人)
どちらかといえばそう思う	10% (3人)
どちらかといえばそう思わない	22% (7人)
そう思わない	3% (1人)

④ ③で「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と答えた人は、どんなところを見つけられましたか。

- ・優しい・思いやりがある 4名
- ・仲が良い 2名
- ・助け合っている

など

⑤ 自分の学級が好きですか。

そう思う	77% (24人)
どちらかといえばそう思う	10% (3人)
どちらかといえばそう思わない	3% (1人)
そう思わない	10% (3人)

⑥ ⑤で「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と答えた人は、どんなところが好きですか。

- ・優しくしてくれる 4名
- ・みんな仲良し 2名
- ・みんなの笑顔 2名
- ・クラスみんなが世界一のクラスを目指している

2名

・助け合っている・力を合わせている 2名
など

6 考察

(1) 自分の良さについて

「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と答えた児童の自由記述において、「ほめ言葉のシャワー」で友達から伝えられた自分の良さについて記述する児童や教師が贈った一筆箋に書かれた内容を記述する児童が多くいた。このことから、他者から伝えられた良さについて自覚している児童が多くいることがわかった。

しかし、一方で自分の良さについて自覚的に語ることができていないと考えることもできる。

(2) 友達の良さについて

「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と答えた児童の自由記述において、「ほめ言葉のシャワー」で他の児童が主役の児童に伝えた良さや価値語モデルで示した良さについて記載する児童が多くいた。他者の良さについて伝える場を設けることで、他者の良さに気づこうとすることができたと言える。

(3) 学級への所属感について

(1)(2) 同様、教師が学校生活における良さについて言及した内容や、ほめ言葉のシャワー、価値語モデルにおいて、学級内で共有した内容が多く目立った。

上記より、教師が、計画的に指導や仕掛け、声かけを行うことにより、学校生活や授業中における主体的な参加を図ることができたと考える。

また、1年間の学級経営に計画的に取り組むことで、児童らは、自分の良さや友達の良さに気がついたり、見つけたりするようになった。自分の良さや友達の良さに気づいたり、見つけたりすることを通して、学級の良さや所属感を感じることができたのではないかと考える。

7 成果と課題

研究実践①～⑤を通して、自分や友達、学級の良さについて考えたり、伝え合ったりすることができたと考えられる。しかしながら、アンケートの各項目において、否定的回答をする児童もいることから、自分の良さへの気づき、他者の良さへの気づき、学級への所属感の全

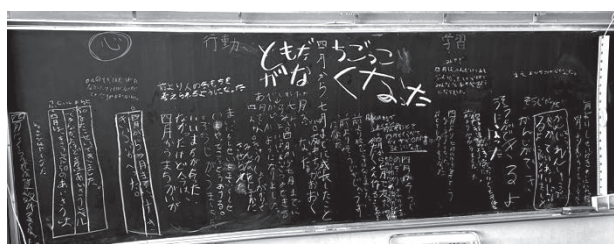
てにおいて、これまで以上の支援やしかけ、働きかけが必要である。

また、教師自身も視点を絞って児童へ接することを通して、自己肯定感や自己効力感を高めることへの働きかけについて日々試行錯誤する必要性を改めて実感した。本研究は、令和7年4月から7月の短い期間での実践であることから、今後も継続して取り組むことを通して、「子どもたちが行きたくなるような学級、学校」について考え続けたい。

8 おわりに

夏休み前の最終日に、学級の児童に、「4月から7月までに成長したことはなんですか？」と問うと、「勉強ができるようになった」「掃除が上手になった」「みんな仲良くなった」「人の気持ちを考えられるようになった」などの反応があった。多くの児童が、自分の成長を言葉にして表現することができるようになった姿に教師としても成長を感じたとともに、児童が語った成長について今後も継続的に「自分の良さ」として自覚できるように働きかけることの重要性を実感した。

今回の研究は、本年度始めたばかりの行ったものであるため、省察を通じて、夏休み以降の実践に繋げることができる。夏休み以降はさらなる発展を遂げて、「子どもたちが行きたくなる学級、学校」の実現を目指し、不登校支援の一助となる取り組みとして繋げていきたい。



【図7 夏休み前最終日に子どもたちが黒板に書いた「4月から7月までに成長したこと」】

9 参考文献

文部科学省『誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策（COCOLOプラン）』、2023
渡辺道治『心を育てる語り』、2022、東洋館出版社
菊池省三・菊池道場『成長の授業』、2017、中村堂

魅力がたくさん！各教科等を合わせた指導の実践！

～児童が夢中になれる、活躍できる生活単元学習の授業を目指して～

千葉県立楨の実特別支援学校
教諭 黒川 裕司

1 はじめに

本校は昭和54年に設立された、知的障害のある児童生徒を対象とする特別支援学校である。「豊かな心と健康なからだを育み、もてる力を最大限に発揮できる児童生徒を育てる」を学校目標に掲げている。小学部では、以下（図1）のような教育課程を組んでおり、各教科等を合わせた指導（以下、「合わせた指導」と表記する）である日常生活の指導や生活単元学習を軸として行っている。

	月	火	水	木	金
9:00	登校・日常生活の指導				
9:30	朝の会				
9:45	国語／算数				
10:10	体育(なかよし広場)				
10:35	国語／算数				
11:05	生活単元学習				
11:50	給食・昼休み				
13:15	音楽	体育	体育	音楽	にこにこタイム/ 集会/道徳
14:00	日常生活の指導・清掃・帰りの会				
14:50	下校				

図1 本校小学部の教育課程

一昨年度、特別支援教育総合研究所の専門研修で学んだ際、全国から集まった研修員にその地域の学校の教育課程についてアンケート調査を行った。本校は、「合わせた指導」を教育課程の中心として行っているが、大阪府や名古屋市を初めいくつかの学校では、教科別の指導を中心とした教育課程を組んでいることが分かった。日常生活の指導は、「生活科」の〈基本的生活習慣〉や〈日課予定〉として実施し、生活単元学習は「生活科」や「図画工作科」、「学級活動」として教科ごとに授業を組んでいると聞いた。県内北部の学校でも教科別の指導に取り組む学校が増えており、近年の傾向として「合わせた指導」から教科別の指導にシフトする学校や自治体が増えてきている。



図2 教科別の指導に取り組んでいる学校がある県

その理由として、2017年告示の特別支援学校学習指導要領には「各教科等を合わせた指導を行う場合においても各教科等の目標を達成していくことになり、育成を目指す資質・能力を明確にして指導計画を立てることが重要となる。」と記述があり、教科の資質・能力の育成が重要視されていることが挙げられる。学習指導要領に記載されている各教科の項目に沿って、授業内容を設定し、目標を立て評価しやすいことや各校のニーズの高まりから教科別の指導に取り組む学校や自治体が増えてきているのではないかと考える。

以前本校小学部で行ったアンケート調査でも、「合わせた指導において教科の視点をもって授業を計画することの難しさ」や「合わせた指導の仕組みそのものの理解が難しい」といった意見が挙がっており、「合わせた指導」には実践上の課題がある。

そのような国の動向や実践上の課題がある中でも、本校が長年取り組んできた「合わせた指導」には、子どもたちの生活に直結する力を養うことができることや、子どもたちが他者と関わりながら、自らめいっぱい活動に取り組む姿を育てることができることなど、教科の視点だけではとらえきれない魅力がある。

本研究では、「合わせた指導」において、教科の資

質・能力の育成を図りつつ、「合わせた指導」ならではの魅力について、小学部の生活単元学習の実践を通して探っていく。

2 研究の目的

「各教科等を合わせた指導の魅力について、生活単元学習の授業実践を通して探る」

3 実践

(1) 単元名 「マキノカート」

(2) 対象

小学部4年生（男子6名、女子2名）で構成されている。児童の実態として、人と関わることが好きな児童が多く、教師と一緒に遊んだり話したりして休み時間を過ごしている。一方、児童同士で遊ぶことは少なく、集団から離れて一人で遊ぶ児童もいる。国語では、絵カードで意味を理解する児童や平仮名の読み書きに取り組む児童、算数では、一対一対応に取り組む児童やお金の計算に取り組む児童など実態は幅広い。

(3) 授業実践

児童の実態を踏まえ、児童同士が互いにに関わりながら遊べるように、ペアになって台車を押してコースを回るゲーム遊びを設定した。設定遊びを通して、友達を遊びに誘ったり、誘いを受け入れたりすることや相手のことを思いやる気持ちを養ってほしいと考えた。

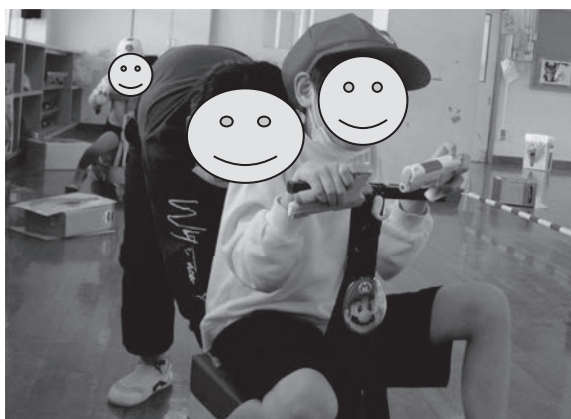


図3 マキノカートの授業の様子

単元は全12回行い、序盤はコースに使う的や障害物の制作、中盤は一人でコース遊び、終盤はペアになってコース遊びや児童一人一人が役割を担って活動することに取り組んだ。

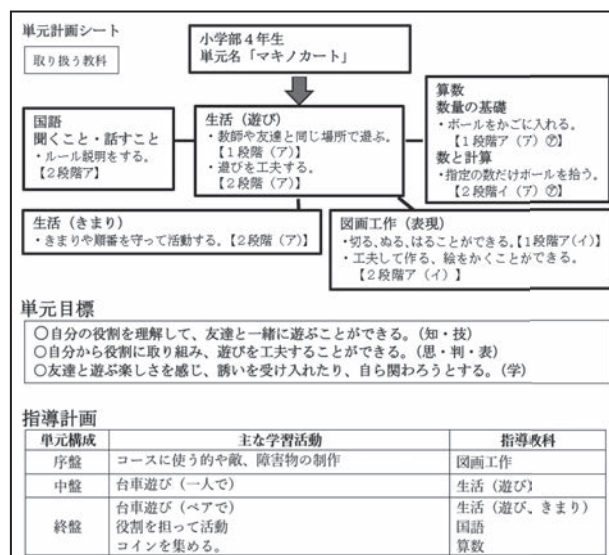


図4 単元計画シート

上記は、本校で作成した単元計画シートの一部である。指導者が、教科の内容をしっかりと踏まえて授業を行うことができるように取り扱う教科(学習指導要領の内容)を一覧にし、単元目標、指導計画を作成した。

取り扱う教科として、中心となる教科に「生活科」(遊び)を据え、友達と同じ場で遊ぶことや遊び方を工夫することを目標にした。「国語科」では、ルール説明や振り返りの発表で、言葉や身振りで話すこと。「算数科」では、コインに見立てたボールを拾ってかごに入れることや、「赤いボール3つ、青2つ・・・」とお題を設定し、正しい色や数のボールを集めることを目標とした。「図画工作科」では、手本を見て敵のイラストを描いたり、自分なりのオリジナルの適役の絵を考えて描いたりすることを目標とした。

(4) 実践を通してみつけた「合わせた指導」の魅力

① 夢中になれる魅力

本単元は、某テーマパークに行ったことがある児童がいたことや、当時流行りのゲームがあり児童の間で話題にあがっていたことから、そのゲームをモチーフとした設定遊びを計画した。

制作では、児童から「〇〇のキャラクターを作りたい。」や「コースには、岩や花のキャラクターを設置したい。」などと作りたいものを聞いて、段ボールや画用紙を使い、色を塗ったり組み合わせたりして制作した。計画前は、衣装作りも考えていたが、生活科で掲げた「教師や友

達との遊びを通した関わり」の時間をよりとれるように、的や障害物の作成に絞って取り組んだ。

遊びでは、初めは教室内で遊んでいたが、児童から「もっと広いコースで遊びたい。」「複雑なコースにしたい。」と声が上がった。教室から廊下、多目的室と場所を広げ、回数を重ねる中でコースがより長くなり、難易度も上がっていった。授業の終わりに振り返りの時間を取り、次はどんなコースにするか、敵や的の配置、児童が障害物を動かす方法など、皆で話し合う時間をとった。以前は控えめな性格であった児童も、「こんなコースにしたい。」や「ここにバーを設置したらどうか。」と積極的に発言する様子がみられた。児童だけでなく、教師も全力で楽しもうと、教師が敵に変装して登場したり、一緒に台車に乗ってレースをしたりして一緒に楽しんだ。学校を休みがちで、遅刻が多かった児童がいたが、この授業を楽しみに毎日来るようになった。

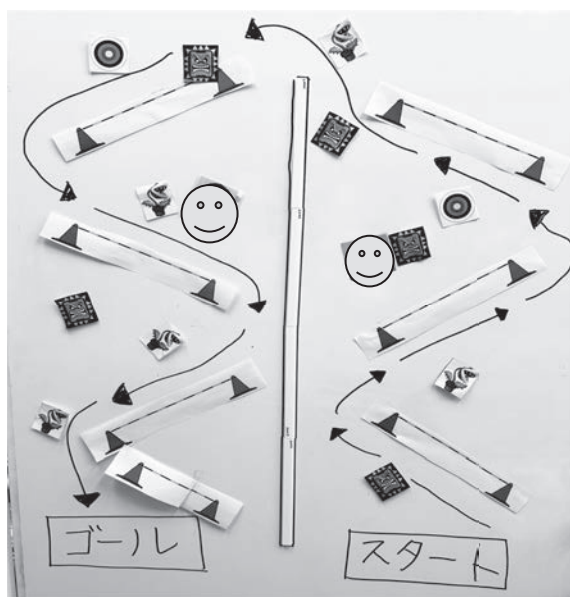


図5 児童と考えたコース図

②教科を総合的に学べる魅力

「生活」〈遊び〉では、同じ場で一緒に遊んだり、遊びを工夫したりするなどの目標を評価することができた。「国語」では、毎時間感想発表の時間をとった。これまで国語で学習してきた、「誰が」、「何をして」、「どうだったか」の順に沿って、項目ごとにカードを用意することで、順序通りに、言葉で発表することができた。身

振りで表現する児童は、実際に使った道具を使って活動を再現して発表をすることができた。

「算数」では、これまで色の一致や1対1対応、10までの数唱、10までの数と具体物の一致について実態に合わせて個別で学習してきた。それぞれの実態に合わせて、難易度を変え、ボールが一つずつ入るかごを用意してコースからボールを集めて入れる活動や、10個ボールを数えて集める活動、メモを見ながら「赤いボール3個、黄色いボール7個」と数を記憶して集める活動などそれぞれが目標としている活動に取り組んだ。ゴール後に教師やペアの児童と一緒に数を確認することで正しくボールを集めることができるようになった。「生活」〈きまり〉では、順番を守ることを目標にした。以前は出番が最初でないと不穏になる児童もいたが、ベンチイスを一行に並べその順に座り、出番が近づくにつれ、前に移動する形にすることで、自分の番を理解し、最後まで待つことができるようになった。これまで学習してきた国語/算数での個別学習や日常生活の指導での学びがつながったという成果がみられた。



図6 ボールを数えて入れる様子

③一体感がある魅力

この単元では、毎回くじ引きで児童2人がペアになり、台車を押す人と台車に乗る人に分かれて、交代しながら活動した。早く押されることが苦手な児童、早く押されてスリルを味わいたい児童など、それぞれの児童に希望があったので教師が間に入りつつ、押す児童には「ゆっくり押そうね。」や「ここでは、早く押したらどうか。」と伝えるようにした。学習を重ねる中で、児童同士で、それぞれ児童の好きな押され方が分かり、相手のことを考えて調節しながら

台車を押す姿がみられるようになった。また「コイン（ボール）を取りたいから、こっちに行きたいです。」と台車に乗っている児童が、押す児童に伝えて、児童同士でやりとりをする様子もみられるようになった。ゴール付近には、ラスボスとして大きい敵の的を用意した。レースに参加している児童が、力を合わせて、敵を倒す場面を設定した。スタートからゴールまで、障害物を避けながら、2人で協力してゴールを目指す姿から、友人関係の広がりや、児童同士の一体感を感じることができた。



図7 全員で敵の的を倒す様子

④得意なことを活かせる魅力

本単元では、児童がそれぞれ役割を担って活動に取り組んだ。制作では、はさみで切ることが得意な児童は切るグループ、色塗りが得意な児童は塗るグループ、貼り付けが得意な児童は貼るグループとそれぞれのグループに分かれて活動を行った。切った段ボールを塗るグループへ渡し、色を塗った段ボールを貼るグループへと渡すことで、児童同士での関わりが生まれ、それぞれが得意なことを活かしながら制作をすることができた。また友達がどんな活動をしているのか互いに見合えるように机やいすの配置も工夫した。

コース遊びでは、音楽を聴くのが好きでラジカセの操作が得意な児童は、スタートの合図でラジカセのボタンを押す係となり、人前で発表することが得意な児童は、原稿を用意し、開始前のルール説明や実況を担当した。普段から遊びを工夫したり盛り上げることが得意な児童は、安全を配慮しつつ、障害物を動かしたり、敵に扮して驚かすなどの係を担った。整理整頓が得

意な児童は、倒れた的や障害物を、床の印を元に正しい位置に戻す係を担った。

自分のやりたい係を聞き、写真カードと係活動を一致させて児童に提示することで、自分のやるべきことが分かり、繰り返し取り組む中で自分から係活動に取り組むことができるようになってきた。

以前は授業に最後まで参加することが難しい児童がいたが、役割があることで、「これをやりたいからがんばる。」と目標を決めて、安定した気持ちで最後まで授業に参加することができるようになった。また休みの子がいた際には、「〇〇さんがいないからどうしようか。」と気かけたり、「〇〇さんの係は、僕がやるよ。」と自分から気が付いて係活動をしたりする姿が見られた。教師からの称賛や、友達が楽しんでいる姿をみて、自分の役割に誇りをもち、達成感を感じている様子が見られた。



図8 役割を担って障害物を動かす様子

⑤実生活につながる魅力

単元を終えて、児童のかかわりの様子に変化がみられた。以前は、一人遊びが中心だった児童が、友達の誘いを受け入れて、一緒にままごとや電車ごっこなどをして遊ぼうとする様子や、自分から声をかけてサッカーや野球などをして一緒に遊ぼうとする様子が見られた。玩具や絵本の貸し借りにおいても、自分の気持ちに折り合いをつけて、一緒に使うことや順番を決めて待つことができるようになってきた。友達に対して、やや強引に誘ってしまったり、一方的に話しかけてしまったりする児童がいたが、この単元後は、優しい言葉で話しかけることや、相手の話を聞く気持ちをもてるようになってきた。

今回の授業で扱った台車遊びをもっと広いグラウンドでもやりたいと、大きな台車に4, 5人が乗って昼休みに遊ぶこともあった。台車を押す人を交代しながら遊ぶことができた。



図9 グラウンドで行った台車遊び

5 まとめ

本実践を通して、「合わせた指導」の形態の一つである生活単元学習の魅力として、①夢中になれる魅力、②教科を総合的に学べる魅力、③一体感がある魅力、④得意なことを活かせる魅力、⑤実生活につながる魅力があることが分かった。「みんなで楽しめるコースを作り、児童同士の豊かな関りを育む。」という達成すべきゴールに向けて、児童一人一人が役割を担い、夢中で活動に取り組んできた。様々な教科が絡み合って展開され、テーマに沿って制作から遊びまでの活動が自然な流れでつながることが生活単元学習の魅力である。計画の段階では、予想できなかった児童の反応や発言があり、活動内容を変更したり、より遊びを発展させたりと児童と一緒に授業を作り上げる喜びを感じることができた。児童の発言や反応を見逃さないように、教師が児童の様子をこまめに観察し、共感する言葉で児童に返して伝えることを意識したり、担当する職員間で放課後に話し合いの時間を設けて反省を行ったりした。計画に沿いつつも、児童の様子から活動を発展させたり、アレンジしたりできることも生活単元学習の魅力である。

次単元では、お店屋さんの形態である「弁当屋」の生活単元学習を実施した。今回目標とした児童同士の関わりや役割の活動がより深まるように、ペアで活動する場面を設定したり、児童が接客や弁当の配達などの役割を担い、得意なことを活かす場面を設定したりした。また学年内だけでなく

他学年を招待したり、担任外の先生を招待したりと大きな集団と関われる授業を考えた。小学部4年生は、年間を通して「児童同士の豊かな関わり」をテーマに年間計画を計画してきた。単元が終わっても、次の単元、次年度の単元とつながるように、意識して計画を行ってきた。

「合わせた指導」の法的根拠として、学校教育法施行規則第130条第2項には「特別支援学校において～特に必要があるときは、各教科の全部又は一部について、合わせて授業を行うことができる。」と記載がある。実践を通して、この意味を再確認することができた。「国語」や「算数」などの教科ごとの基本的な知識・技能や思考力・判断力・表現力等を身に付けたいのであれば、単一教科の指導が適切であり、生活上の目標を達成したり課題を解決したりするためには、「合わせた指導」が有効である。本校では、国語/算数の指導を、週5時間を行っている。基本的な教科の資質能力を国語や算数の時間に身に付け、生活単元学習では、その力を般化させたり、より生活に近い場面で活用したりする力を身に付けることが大切である。教科別の指導がよいのか、「合わせた指導」がよいのかを単に決めつけるのではなく、児童の目標や課題に応じて、指導者がどちらの形態で指導する方が適切かを判断する必要があると実践を通して学ぶことができた。

また、生活単元学習が活動ありき、単発の授業で終わらないためにも、学校目標から学部目標、個別の指導計画、年間指導計画、単元計画と順を追って、児童の実態をとらえて、その時、その児童に必要なことをタイミングを逃さずに指導することが大切である。児童が夢中になれる、活躍できる授業を目指して今後も教育活動にあたっていきたい。

【参考文献】

- 「特別支援教育学習指導要領解説各教科等編」
文部科学省
- 三浦光哉 「知的障害教育の教科別の指導と合わせた指導」2021年 ジアース教育新社

佳 作

《佳 作》

学校部門

千葉市立千葉高等学校	校長	尾留川 聡	探究力を高める基礎講座(モジュール)の展開
千葉市立作新小学校	校長	金谷 英味	多様な人とのかかわりの中で認め合い、自分に自信をもつ子の育成
市川市立鶴指小学校	校長	清水 秀峰	新聞教育でウェルビーイングな学校へ
香取市立山田小学校	校長	小山田 貴久男	地域とともにあゆむ学校づくり

個人・グループ部門

千葉県立八千代東高等学校	教諭	三浦 輔	地域の歴史教育におけるICTの活用と提言
千葉県立松戸高等学校	教諭	金子 元貴	ヘルスプロモーションの見方・考え方を育む保健の授業
千葉県立松戸南高等学校夜間部	教諭	砂村 清史	定時制高校の体育授業におけるリズムジャンプトレーニングの取り組み
千葉県立千葉西高等学校	教諭	杉山 辰夫	主体的・対話的な小説の読み方
千葉県立柏の葉高等学校	教諭	栃木 壮佐	ICTを活用したプレゼンテーション活動の実践
千葉市立千葉高等学校	教諭	石田 剛志	学習内容の「つながり」を意識させる理科授業の構想
千葉県立君津特別支援学校	教諭	黒川 知寛	特別支援学校と地域をつなぐ新たな場の創設
千葉市立本町小学校	教諭	津久井 和樹	問題解決を楽しむ児童の育成
千葉市立川戸小学校	校長	遠藤 敬介	地域とともに歩み続ける学校教育をめざして
千葉市立幸町第三小学校	教諭	杉中 健志	よりよい価値判断・意思決定を図る社会科授業
千葉市立作新小学校	教諭	佐藤 翔	職員の必要感を基にした、研修の在り方についての研究
習志野市立屋敷小学校	教諭	金丸 直樹	自分の力で問題を見出し、解決する力をもつ児童の育成
浦安市立東野小学校	教諭	則元 亮	「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体化への挑戦
松戸市立六実第二小学校	教諭	大塚 優	見方・考え方を働かせる算数授業
柏市立光ヶ丘小学校	教頭	岩本 直樹	運動の楽しさや喜びを味わう3つの型のボール運動授業の提案
野田市立清水台小学校	教諭	三宅 貴之	学校図書館を効果的に活用した授業づくり 実践と普及
柏市立手賀東小学校	教諭	今田 佳代子	STEAM教育の視点を取り入れた小学校1年生における教科横断型授業
松戸市立新松戸西小学校	元教諭	小林 幸一	学力向上を目指した校内研究会のあり方
旭市立鶴巻小学校	校長	見山 望	幸せに働き・学ぶ学校づくり
富津市立天羽小学校	教諭	仲野 恭平	子どもが熱中し、内から育つ学びの追究
千葉市立真砂中学校かがやき分校	教諭	高田 茂子	社会とつながる日本語教育の実践
習志野市立第一中学校	教諭	小林 圭	ネガティブ・ケイパビリティに着目した教科横断的な学び
鎌ヶ谷市立第二中学校	教諭	石川 了一	動機付けを高め、積極的に英語使用を図る学習環境の工夫
松戸市立第二中学校	教諭	瀧川 千尋	「伝える力」を向上させるための教科横断的授業の実践

令和7年度募集

教育実践研究論文集

－ 第40号 －

令和8年1月 発行

発行 公益財団法人 日本教育公務員弘済会千葉支部

千葉市中央区中央4-13-10

(千葉県教育会館新館)

電話 (043) 224-8851

